

中 溝 遺 跡 揚 久 保 遺 跡

山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書

1996. 3

山梨県教育委員会
日本鉄道建設公団

中 溝 遺 跡 揚 久 保 遺 跡

山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書

1996. 3

山 梨 県 教 育 委 員 会
日 本 鉄 道 建 設 公 団

序

本報告書は、山梨リニア実験線建設に先立ち、平成5年度に発掘調査された都留市中溝遺跡および揚久保遺跡についてその成果をまとめたものであります。

山梨リニア実験線は南都留郡秋山村から東八代郡境川村までの48.2kmが計画され、先行実験区間として、秋山一大月間の18.4kmが工事着手されました。この区間はほぼ直線であり、ほとんどがトンネルとなりますが、地上走行区間に都留市九鬼Ⅱ遺跡、同中溝遺跡、同揚久保遺跡、同中谷遺跡、大月市外ガイド遺跡の5カ所の遺跡が確認されております。

本報告書でまとめた中溝遺跡は、大原台地上の長さ300mが対象となり、試掘調査により本調査部分を限定して本調査を行いました。本遺跡は、当地区で農地整備が行われた際遺物が確認され、1973年にごく一部が調査されました。調査面積は少なかったにもかかわらず、当時県内ではほとんど資料のなかった縄文時代中期中葉の一括資料が得られたことで、中期を代表する遺跡として著名になりました。当然のことながら今回の調査においても中期の遺構・遺物が出土するものと予想し、調査を実施した訳ですが、今回の調査では意外なことに平安時代の集落と縄文時代早期末～前期初頭にかけての集落が確認されました。とくに縄文時代早期末～前期初頭にかけての集落は、本県においては一宮町・勝沼町釀迦堂遺跡群、大月市原平遺跡について3例目の確認となる貴重な発見であります。また、この時期の住居跡内から発見された滑石製块状耳飾りは全国的に最も最古の一群と捉えられるもので、約6千年前の富山湾を中心とした交易を考えるうえで重要な資料となるものです。

また、揚久保遺跡では、台地から山間部に上がった部分に平安時代の土坑数基が確認され、当地での居住の痕跡を確認することができました。

本報告書が、多くの方々の研究資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1996年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

- 1 本報告書は平成5年度に山梨リニア実験線建設に先立ち発掘調査された、都留市中溝遺跡・揚久保遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、日本鉄道建設公団の委託を受けて山梨県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査及び出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌・笠原みゆきが担当した。
- 4 本報告書の編集は長沢・笠原が行い、第Ⅰ章（中溝遺跡）及び第Ⅲ章第3節を長沢が、第Ⅱ章（揚久保遺跡）及び第Ⅲ章第4節を笠原が執筆した。また、微細遺物について東京大学総合研究資料館・松谷暁子氏にご執筆いただいた。なお、年代測定は（株）パリノサーヴェイに委託した。
- 5 写真撮影は長沢・笠原が行った。
- 6 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 7 発掘調査および本報告書の作成にあたり、下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

松谷暁子（東京大学総合研究資料館）

渋谷昌彦（島田市博物館）

奈良泰史（都留市教育委員会）

杉本正文（大月市教育委員会）

目 次

第Ⅰ章 中溝遺跡の調査

第1節 調査概要

1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1

第2節 遺跡概況

1 遺跡の位置	2
2 地理的・歴史的環境	2
3 調査方法	2
4 標準層序	2

第3節 遺構と遺物

1 住居跡と出土遺物	3
2 集石土坑と出土遺物	6
3 土坑と出土遺物	7
4 掘立柱建物跡	9
5 溝と出土遺物	9
6 遺構外出土遺物	9

第Ⅱ章 揚久保遺跡の調査

第1節 調査状況

1 調査に至る経緯	41
2 調査組織	41

第2節 遺跡概況

1 遺跡の位置	41
2 地理的・歴史的環境	41
3 調査方法	41

第3節 遺構と遺物

1 土坑と出土遺物	42
2 その他の遺構	43
3 遺構外出土遺物	43

第Ⅲ章 考察

第1節 中溝遺跡から出土した炭化植物について	49
第2節 中溝遺跡住居跡出土炭化材年代測定	54
第3節 中溝遺跡出土早期末～前期初頭の土器について	55
第4節 中溝遺跡出土の玦状耳飾りについて	60

挿 図 目 次

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 第1図 遺跡位置図 | 第20図 土器（土坑・グリッド） |
| 第2図 調査全体図 | 第21図 塊状耳飾り |
| 第3図 1号・2号住居跡 | 第22図 石器（石鏃・ドリル・石匙） |
| 第4図 3号住居跡 | 第23図 スクレイパー・加工痕ある剥片 |
| 第5図 4号住居跡 | 第24図 加工痕ある剥片・剥片 |
| 第6図 5号住居跡 | 第25図 剥片 |
| 第7図 6号・7号住居跡 | 第26図 剥片 |
| 第8図 8号・9号住居跡 | 第27図 コア |
| 第9図 10号住居跡・1号～3号集石土坑・20号土坑 | 第28図 コア |
| 第10図 土坑（2号～13号） | 第29図 石器（磨石） |
| 第11図 土坑（14号～23号） | 第30図 石器（磨石・たたき石・打製石斧・石皿） |
| 第12図 溝・掘立柱建物 | 第31図 揚久保遺跡調査全体図 |
| 第13図 土師器・須恵器 | 第32図 揚久保遺跡遺構全体図 |
| 第14図 土器（4号住居跡・10号住居跡・20号土坑） | 第33図 各遺構 |
| 第15図 土器（4号住居跡） | 第34図 揚久保遺跡出土土器 |
| 第16図 土器（5号住居跡） | 第35図 揚久保遺跡出土石器 |
| 第17図 土器（5号住居跡） | 第36図 下吉井式・木島式土器対比図 |
| 第18図 土器（6号～8号住居跡） | 第37図 県内各遺跡出土木島式・伴出土器対比図 |
| 第19図 土器（8号～10号住居跡） | 第38図 県内出土早期末～前期初頭塊状耳飾り |

表 目 次

- | | |
|----------------|----|
| 石器・石製品観察表..... | 39 |
| 炭化植物試料一覧表..... | 52 |

図 版 目 次

- 図版1 上 調査前遺跡近景 中・下 1号住居跡
- 図版2 上 4号住居跡 中・下 5号住居跡
- 図版3 5号住居跡
- 図版4 上 6号住居跡 中 7号住居跡 下 8号住居跡
- 図版5 上 9号住居跡 中・下 住居跡全景
- 図版6 土器（4号住居跡）
- 図版7 土器（上 5号住居跡 下 6号住居跡）
- 図版8 土器（上 7号住居跡 中 8号住居跡 下 9号住居跡）
- 図版9 土器（上 10号住居跡 中 グリッド 下 海綿体骨針）
- 図版10 石製品 石器（石鎚・ドリル・石匙）
- 図版11 石器（磨石・加工痕ある剥片・剥片）
- 図版12 石器（コア） 平安時代土師器
- 図版13 上 揚久保遺跡近景 下 同出土遺物
- 図版14 炭化物実体顕微鏡写真
- 図版15 炭化物実体顕微鏡写真
- 図版16 炭化物走査型電子顕微鏡写真

第Ⅰ章 中溝遺跡の調査

第1節 調査概要

1 調査に至る経緯

現在の新幹線に代わる次世代高速交通として期待されるリニアモーターカーは、これまで宮崎県の実験線で各種基本実験が行われてきたが、カーブや高低差という具体的な問題を解決するため、新たな実験線を山梨県内に建設することが決定された。これに伴い、山梨県では予定路線の内の先行実験区間に確認された埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

調査は平成3年度～6年度にかけて実施され、大月市内および都留市内に確認された5遺跡が対象であった。本遺跡はこのうちの一つで、平成5年4月26日～8月30日までの約4ヶ月にわたって調査された。

2 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 長沢宏昌（県文化財主事）

笠原みゆき（県文化財主事）

作業員 吉村公子・吉村雄治・帶津まさ子・水越町子・佐藤あさ子・佐野洋介・小俣吉広・藤田利行・浜田実・天野昭次・永田勤昭・志村恵子・山中章・石塚義弘・井上幸治・吉永富美・今泉政男・志村茂・信藤肇・高尾美佐子・中村信（中溝遺跡）

山中章・吉村雄治・石塚義弘・小林武・松井基幸・谷内弘道・今野毅・大木定夫・田辺信孝・和田弘行・伊藤孝・大居敬子・大熊僚・大野吉江・刈谷奈津子・工藤さゆり・小林久子・小宮貞澄・今陽子・佐藤あさ子・佐藤なか子・佐藤美須子・中尾政弘・梅津浩平・鈴木順子・鈴木美寿子・高畑紀子・細谷林子・折原尚子・田中弥子・田中英行・真瀬正義・関屋延行・井上京子・刈谷義章・表みゆき・鈴木好子・佐藤善治・小林好子・佐藤悠喜子・小俣吉広・田代光男・田代久子・杉田歩江・佐藤昌枝・吉村公子・広瀬忠治・大野千恵子・帶津まさ子・近藤英子・上原京子・藤江崇・藤江かつ代・水越町子・相本仲・日向照子・奥秋すず江・武井はな子・天野徹也（揚久保遺跡）

整理作業員 永田勤昭・小林武・名取洋子・中澤恵美子・斎藤律子・石原由美子

第2節 遺跡概況

1 遺跡の位置

本遺跡は都留市小形山大原7番地外に所在する。

2 地理的・歴史的環境

山梨県東部域を流れる桂川は下流の大月市内で東流する笛子川と合流し、神奈川県域で相模川となって相模湾へと注いでいる。桂川中流域である都留市内では川岸段丘の発達が著しいが、その中でも最も大きな段丘の一つが東西約600m・南北約700mを計る大原台地である。本遺跡はこの大原台地の中央部に展開している。

昭和47年に大原台地一円で圃場整備が実施され、その側溝掘削現場の現地表下1mから大量の土器が出土したことにより、本遺跡は存在が確認された。翌年2月に19日間にわたって発掘調査が行われ縄文時代中期中葉の住居跡6軒が検出された。極めて狭い面積であるにもかかわらず重複して住居跡が確認されたことや平坦な大原台地に遺跡が広く展開していることなどから本遺跡は縄文時代中期の大規模な集落であると推定された。

本遺跡の周辺には、今回リニア関連で同時に調査された中谷遺跡（縄文中～晩期集落跡）、揚久保遺跡（縄文時代・平安時代散布地）、九鬼II遺跡（縄文時代・平安時代集落跡）などがあり（第1図）、さらに縄文時代の松葉遺跡・宮脇遺跡なども近い。現在都留市内では70箇所程の遺跡が確認されているが、本遺跡の所在する大原台地とその周辺は市内における遺跡集中域の一つである。

3 調査方法

今回の調査は山梨リニア実験線建設に伴うものであり、本遺跡においては本線部分の幅約20m、長さ約350m、面積約7,000m²が対象となった。大原台地の南側を東西に横切る状態で、東は桂川、西は中央道までである。この部分について、調査に先立ち1.5m幅のトレントレンチ3本を路線に沿って並列に設定し、本調査区を限定するために遺構の有無、遺物の多寡を確認していった。調査対象域は道路によって分断されており、東からI区・II区・III区・IV区・V区までの5区域を設定したが、トレントレンチ調査により本調査対象域をII区と・IV区に限定した（第2図）。

限定された本調査区はII区約1,000m²、IV区約900m²の合計1,900m²である。本線部分はおおむね東西方向に路線が設定されているため、II区、IV区ともに南側（山側）から北側（台地側）に向かって4mごとにA～Fまで、また桂川側から中央道側に向かってやはり4mごとに1から番号を付し、4m×4mのグリッドを設定した。本調査区はグリッドごとの全面調査である。

4 標準層序

本遺跡の現状は水田であり、現地表下約20cmは水田床土である。床土下は赤色小スコリア粒を多量に含んだ暗褐色粘質土が40～50cm堆積しており、遺構は主にこの面で確認される。暗褐色粘質土下は赤色小スコリア粒を含んだ黒色粘質土で約20cmの堆積である。さらに、その下20cmが黒色粘質土とロームの混ざった黄褐色粘質土層となり、その下は完全なローム層となる。

第3節 遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代の住居跡7軒、平安時代の住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟のほか20基の土坑と3基の集石土坑が確認された。以下に概要を記す。なお、平安時代の住居跡3軒（1号～3号）と掘立柱建物跡及び9～18号土坑はIV区、縄文時代の住居跡7軒（4号～10号）と溝及び20・22・23号土坑はII区である。それ以外の土坑はIII区、集石土坑はI区の試掘調査区域で確認されている。

前述したように、今回の調査では本調査に先立ち対象域全体にトレンチを入れて遺構の有無や濃さを確認している。集石土坑の確認されたI区でも同じようにトレンチを3本入れたものの、集石土坑が確認されたトレンチ以外では遺物は全く出土せず、また確認された遺構が集中していたこともある、その部分を拡張したが、結局最初確認された3基の集石土坑だけであったことから、他に遺構は存在しないと判断し、I区の調査を終了したものである。III区についても同様の調査の結果、土坑の分布も非常に薄いとの判断からトレンチのみでの終了とした。V区は遺構・遺物とも全く確認されていない。これらの区域で確認された遺構については全体図中にも記載されておらず、また、図面もセクション図作成だけが行われたものも含まれる。さらに土坑については、当初土坑番号を付したもののが攪乱であることが判明したものや調査区域が飛び飛びであるために、番号が必ずしも通しではないことを記しておく。

なお、本文記述中の個々の遺物の後の（ ）内番号は図面中の遺物番号を示すもので、本来ならば第15図12というように、図面番号と遺物番号を示すべきであるが、遺物番号は通しとしたため、図面番号は省略する。

1 住居跡と出土遺物

• 1号住居跡（第3図）

E・F-4・5グリッド。一辺3m程度の小型方形住居跡である。トレンチを掘削する段階では全く遺構の存在が認識できず、トレンチセクションの観察段階で初めて住居跡であることが確認された。トレンチによって南東のほぼ半分は失われている。壁の立ち上がりはきつく、壁沿いには10cm程の幅の浅い周溝が巡っている。床はカマド周辺のみよく踏み固められている。柱穴は全く確認されなかった。

カマドは東壁中央のやや南寄りに構築される。カマドは粘土と石により構築され、東壁の一部を掘り込み煙道としている。カマドの幅は約1mである。内部からは長さ40cmと30cmの石が出土し、また袖部分に浅い掘り込みがあり、これらの石が袖石として立てられていたと考えられる。

遺物は非常に少ない。カマド内より甕2個体の破片（1・2）と壺底部片（3）が出土したのみである。甕は口縁部がやや肥厚する。壺は底部付近だけの小破片であり器形全体を予想するには危険もあるが、底部からの立ち上がりもまだ比較的きつく、暗文はみこみ部には及ばない。底部は糸切りで、周辺部のみにヘラ削りがあることなどから、甲斐型土器Ⅷ期（9世紀前半）への位置付けが妥当であろう。

• 2号住居跡（第3図）

C・D-4・5・6グリッド。本住居跡もトレンチ調査の際断面でその存在が確認されたものであり、住居跡のほぼ中央部とカマドの半分がトレンチにより失われた。1号住居跡よりやや大型で、一辺約3.7mの方形住居跡である。南東壁の東コーナー寄りにカマドは構築される。本住居跡では柱穴3基が確認された。直径20～30cm、深さ15～30cmを計る。住居内のところどころに焼土・カーボンの集中がみられたが、一般的な火災住居に比べると飛び散り方が少ない。床は非常に軟弱であった。

カマドは、幅・長さとも130cm程の範囲に粘土を用い構築したものと推定されるが、内部から幅20cm・長さ35cmと、それより一回り小ぶりな石2個が出土していることから、粘土と石を用いたものと考えられる。

やはり遺物は少なく壺破片が4個体出土しているに過ぎない（4～7）。これらの整形や調整状況は1号住居跡の壺と同じであり、やはり9世紀前半に位置付けられよう。

● 3号住居跡（第4図）

A・B-4グリッド。ごく一部の調査である。東壁と北壁が確認されただけで、ほぼ半分の調査である。これも一辺3mの方形小型住居跡である。大きさ、主軸、カマド位置など1号と同じである。結果としてカマド付近だけの調査であったが、床は堅く踏み締められている。柱穴は1基確認されただけである。壁沿いに10cm～30cmの幅の周溝が確認された。

カマドは東壁の南寄りに構築され、壁を掘り込んで煙道としている。なおカマドは1.2mの幅である。内部からは石が全く出土しておらず、当初からカマドに石は用いていないものと思われる。

遺物は非常に少なく須恵器壊破片1点（8）が図示できただけである。須恵器の断片資料だけでは不安も残るが、住居跡の類似性などから、時期的には他の2軒と同じ位置付けができるよう。

● 4号住居跡（第5図）

D・E-3・4グリッド。不整橢円形を呈し、長径4.5m、短径4mを計る。壁の立ち上がりは緩い。覆土は、5号～10号住居跡と同じくスコリア小粒を含んだ暗褐色粘質土の単層で、壁際はスコリアが少ない。中央部に炉が確認されたが、柱穴等の施設は確認されなかった。床は炉の付近も含めて全体に軟弱である。

炉は地床炉で長径100cm、短径70cm、深さ10cmを計る。炉の中心部分は70cm程の円形で、それにテラス状の張り出しが付いた形態である。この炉には焼土層が形成されておらず、焼けたスコリアのブロックが見られた。

遺物は多い。住居内北隅から、完形土器1個体（9）が潰れた状態で床面より約20cm浮いて出土している。そのほか住居内全体から土器（12～35）が出土した。詳細は後述するが、土器には厚手で繊維を多量に含む下吉井式と、極めて薄手で隆帯と条線からなる木島式とがある。33は内面が剥離しており全体の厚さは不明であるが、隆帯の厚さなどからも薄手と思われる。しかし、隆帯の貼付後接着面をきれいになでており、木島式とは明らかに違う土器である。なお、隆帯上には貝殻圧痕が施文されており、時期的には他の出土資料とも整合する。石器では石鎧（167～172）、ドリル（192・193）、石匙（199）、スクレイパー（202～204）、磨石（277・278）、加工痕ある剥片（209～212）等が出土している。また、コア（256～261、270・271）や剥片（219～228）も多く、さらには小破片ではあるが滑石製块状耳飾り（165）が出土した。

本住居跡では、住居跡全体に50cm小グリッドを設定し、覆土すべてを5mm・3mm・1mmメッシュで水洗選別を行った。検出された微細遺物については第3章で述べるが、ここでは非常に目立ったクルミについて記しておく。第5図右に住居内小グリッドを示したが、各小グリッド内の数字が出土したクルミの重量（単位：g）である。これはあくまで平面分布であり、覆土最上部から床面までのトータル重量である。クルミはすべて破片となっており、最大でも5mm程度のもので、一つの破片の存在により極端に重量に差が出るような状況ではない。結果としては炉が存在する住居中央部付近のC～E-4～6小グリッドに集中が見られる。覆土が自然の流れ込みであれば覆土の厚みが最も大きい中央部に多くなるのは当然であるが、一方でD-8小グリッドに見られるように壁際にも集中している。垂直分布が全く不明であるため定かではないが、この状況から、すべてが流れ込んだものではなく、住居床面上の資料も相当量含まれているものと推定される。

● 5号住居跡（第6図）

E・F-6・7グリッド。これも不整橢円形を呈する住居跡で長径4.7m、短径4m、深さ0.3mを計る。壁は緩やかに立ち上がる。本住居跡ではピットが14基確認された。ピットの直径は20cm～40cmであるが、深さにはバラツキがみられる。図中の1～4はいずれも深いもので、40cm～50cmである。ピットの大きさもほぼ等しく、炉を中心とした位置関係からもこの4本が主柱穴であると考えられる。また、5も深さ45cmと深いものの掘り方が小さく、補助的な柱穴であろう。その他のピットは5cm～25cmの深さである。

炉は地床炉で、中央やや南寄りに位置する。70cm×60cmの範囲に焼けたスコリアが集中していた。下層のロームも被熱によりやや赤く変色している。

遺物は比較的多いが、土器では復元可能な資料は出土していない。破片（36～80）には1号住居跡と同様厚手の下吉井式と薄手の木島式が混在している。石器では石鏃（173～179）、石匙（200）、スクレイパー（205・206）、磨石（279～286）、加工痕ある剥片（213・214）等が出土した。また、コア（262～267）や剥片（229～240）も比較的多い。さらに滑石製块状耳飾り（166）も出土している。この資料はおよそ1／3の破片であるが破損部には補修孔があり、孔内部には赤色顔料が付着している。

本住居跡でもセクションベルトを利用して、水洗選別を行った。セクションベルトを20cm毎に番号を付して上部から5cmの厚さにスライスしてそれぞれ水洗選別したものである。

• 6号住居跡（第7図）

C・D-7グリッド。やはり不整橢円形を呈するが、短軸方向で7号住居跡に切られている。長径4.2m、短径3.3m程度と推定される。壁は緩く立ち上がる。中央部に炉が確認されたが、柱穴等は全く確認されなかった。床も軟弱である。

炉は長径140cm、短形100cm、深さ10cmの掘り方である。他の住居跡と違い、本住居跡では焼土が明瞭に確認される。炉の内部には5cm程の厚さで焼土層が形成されており、また炉の付近2m×1mの範囲にも焼土が飛散していた。

遺物のうち、土器は破片のみで（81～93）、やはり2種類が確認される。石器では石鏃（180）、ドリル（194）、スクレイパー（207）、磨石（287）、加工痕のある剥片（215・216）が出土した。また、コア（268・269・272）や剥片（241～246）の出土も多い。

本住居跡でもセクションベルトを利用し、5号住居跡と同様の方法で水洗選別を行った。

• 7号住居跡（第7図）

D-7・8グリッド。6号住居跡を切っている。やはり不整橢円形を呈する小型住居跡で、長径3.3m、短径2.7m程度と推定される。壁は緩い立ち上がりで、床も軟弱である。柱穴等は確認されない。

炉は中央部に位置する地床炉である。70cm×40cmの長橢円形に掘り込み、深さは平均で10cmで、掘り込み端に小ピット（深さ20cm）を有する。炉内には全体に焼土粒子が散っている。

遺物は多くはなく、土器（94～101）はやはり下吉井式と木島式とが混ざっている。木島式の資料は4号～6号住居跡までのものに比べて条線が細く、住居跡の切り合いからも時期的な違いが予想される。また覆土最上部から、比較的薄手の条痕文土器（95）が出土しているが、この土器は8号住居跡の103（これも最上部出土である）と接合する。石器は石鏃（181・182）、加工痕のある剥片（217）が出土しているが、石鏃のうち1点（181）は炉内からの出土である。他に剥片（247）がある。

本住居跡でも住居跡全体に50cmメッシュを設定し、4号住居跡同様覆土の水洗選別を行った。

• 8号住居跡（第8図）

D・E-5・6グリッド。やはり不整橢円形の住居跡で、長径4.1m、短径3.6m、深さ0.3mを計る。床は軟弱である。覆土の状況は他の住居跡と変わらないが、本住居跡では床面の上部に炭化物を多く含んだ黒褐色土層が形成されていた。柱穴ははっきりしないが、炉の脇に径30cm、深さ20cmのピット1基が確認されている。

炉は、長径110cmの橢円形を呈する地床炉で、深さ15cmを計る。内部の焼土はごくわずかであった。

炉の脇には30cm大の平石がおかれていた。はっきりした使用面は確認されなかったが、住居内の炉の脇で床面に密着していたことから何らかの作業台であったと考えられる。

遺物は土器と石器・剥片等が出土している。土器（102～116）は破片であるが、他の住居跡と同様、厚手と薄手の二種類が確認される。石器には石鏃（183～185）、ドリル（195・196）、石皿（299）、磨石（288・289）がある。また、コア（273）も出土した。

• 9号住居跡（第8図）

D・E-10・11グリッド。後述する溝によって、住居の中央部分を切られている。不整楕円形を呈する住居跡で、長径4.7m、短径4.1m、深さ20cmを計る。壁の立ち上がりや床の状況は他の住居跡と変わらないが、本住居跡では12基のピットが確認された。このうち30cm以上の深さを有するもののみに番号を付したが、掘り方の大きさからは1と4が主柱穴のように思える。2・3はそれらに比べやや小ぶり、他のピットは深さ10cm～20cmである。もちろんこれらも柱穴と思われるが、1・4を主柱穴とした場合それらに対比できるものがない。深さはともかく、大きさあるいは位置からは他のピットと2・3とが関連することになる。

炉は径75cmの円形の掘り方を有する地床炉で、深さは約5cmと浅い。焼土は炉内全体に飛散している訳ではなく、2カ所にブロック状に確認された。

遺物は多くはない。土器はピット12の脇にまとまっていた破片（10）と小破片（117～126）があるが、ここでは薄手のものは全く出土していない。石器には石皿（298）、磨石（290～293）、たたき石（296）がある。磨石のうち290・292は凹石でもある。また、コア（274・275）や剥片（248）も出土している。

• 10号住居跡（第9図）

D・E-12・13グリッド。本住居跡は炉が確認されたため、炉を中心とした円を想定して、住居跡としたものである。ピット等は全く確認されず、床もはっきりとしないため、炉の確認面を床とした。炉の北東側に土器のまとまりがあったためその部分までを住居内と認識した。その結果、長径5m、短径4.5m程度の大きさと推定された。

炉は75cm×50cmの長楕円形の掘り方で、深さ約5cmである。内部に焼土、カーボンが飛散していた。

遺物は少ない。前述のまとまった土器は図示していないが、内外面とも激しく剥離した胴部破片で、上部にはタガ状隆帯が貼付され胎土には多く纖維を含んでいる。他の小破片（127～135）には厚手と薄手の二種類が含まれている。石器では石匙（201）、磨石（294）が出土した。また、コア（276）もある。

2 集石土坑と出土遺物

• 1号集石土坑（第9図）

I区試掘トレンチ内で確認された。重機によるトレンチ掘削で半分は失われ、しかも残存部分が調査区域外であったためセクションの確認だけを行った。スコリア小粒を多く含む暗褐色粘質土層中に掘り込まれた集石土坑で、確認部分での径130cm、深さ40cmを計る。礫は坑底付近に集中しており、拳大程度のものが多い。礫は焼けていたが、土坑内部に焼土やカーボンの集中は確認されなかった。遺物は出土していない。

• 2号集石土坑（第9図）

同じトレンチの反対側断面に確認された集石土坑であり、セクションの観察と残り部分の調査を行った。セクションで確認された範囲では、径150cm、深さ40cmである。すり鉢状の形態で、礫は坑上部から底部ちかくまで確認される。礫の詰め込み方は粗である。1号同様礫は焼けていたものの、土坑内部に焼土やカーボンの集中は見られなかった。遺物の出土はない。

• 3号集石土坑（第9図）

1号と2号の中間に確認された集石土坑で、2基と違ってローム層中に掘り込まれたものである。そのため重機による掘削の影響もなく全面調査された。掘り方はほぼ円形で、径90cm、深さ40cmを計る。やはりすり鉢状を呈するが、内部には全体に焼土粒子が確認され、坑底の直上にはカーボンを多く含んだ黒色土層が1～3cmの厚さで堆積していた。礫は5cm以下程度の小礫も含まれるもの拳大のものが多く、15cm程度のものも含まれており、焼けていた。遺物は全く出土していない。

3 土坑と出土遺物

- 2号土坑（第10図）

断面でのみ確認された。断面円筒形を呈し、径65cm、深さ55cmを計る。覆土にはスコリア小粒が多く含まれる。遺物は出土していない。時期不明。

- 4号土坑（第10図）

断面でのみ確認された。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。径85cm、深さ65cmを計る。覆土にはやはりスコリアが含まれ、1cm程度のものも混ざる。遺物は出土していない。時期不明。

- 5号土坑（第10図）

調査区域の関係から半分が調査された。径80cmの円形を呈し、深さ50cmを計る。覆土にはスコリアが多く含まれる。遺物は出土していない。時期不明。

- 6号土坑（第10図）

径90cmの円形を呈し、深さ35cmを計る。坑底は平坦で片側の壁のみほぼ垂直に立ち上がる。覆土にはやはりスコリアが多い。遺物は出土していない。時期不明。

- 7号土坑（第10図）

これも調査区域の関係から半分だけが調査された。楕円形を呈すると思われ、長径140cm、深さ55cmを計る。やはり坑底は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土にはスコリア粒が多い。本土坑からは中層部から縄文土器（136）が出土している。諸磯b式であるが、1点だけでしかも覆土中からの出土であり、土坑の時期とは一致しない可能性が大きい。

- 8号土坑（第10図）

一部未調査であるが、ほぼ円形を呈し、径80cm、深さ30cmを計る。これも坑底は平らであるが、立ち上がりはきつい。覆土にはスコリア粒が含まれる。遺物は全く出土していない。

- 9号土坑（第10図）

E-7・8グリッド。これもトレンチにより半分が失われ、残りの半分が調査された。坑底は平坦で、壁は緩く立ち上がる。覆土にはスコリアを多く含んでいる。諸磯b式土器（137）と炭化球根2点が覆土から出土している。

- 10号土坑（第10図）

D-6グリッド。ほぼ円形を呈し、径120cm、深さ40cmを計る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。人工遺物は出土していないが、炭化球根が1点出土した。

- 11号土坑（第10図）

C・D-8グリッド。これも径1mの円形の土坑で、深さ15cmを計る。坑底は平坦で壁は緩く立ち上がる。土器（138）が出土した。諸磯b式である。

- 12号土坑（第10図）

C・D-9グリッド。これも径1mの円形の土坑で、深さ15cmを計る。坑底や壁の状況も11号トレンチ同じであ

る。遺物は全く出土していない。

- 13号土坑（第10図）

D-9 グリッド。12号のすぐ脇に位置する。径120cm、深さ10cmを計る。底部に傾斜があり、壁も緩やかに立ち上がる。人工遺物は出土せず、炭化球根3点が出土した。

- 14号土坑（第11図）

B-6 グリッド。ほぼ円形で、径135cm、深さ65cmを計る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土中から諸磯b式土器（139・140）が出土したが、本土坑では炭化物が非常に目立った。球根類18点とマメ類1点が出土している。

- 15号土坑（第11図）

B-9 グリッド。16号土坑を切っている。橢円形を呈し、長径120cm、短径100cm、深さ30cmを計る。遺物は全く出土していない。

- 16号土坑（第11図）

B-9 グリッド。規模・形状とも15号に類似。やはり何も出土していない。

- 17号土坑（第11図）

B-10 グリッド。円形を呈し、径150cm、深さ55cmを計る。坑底は平坦で壁の立ち上がりは緩い。諸磯b式土器（141）と炭化球根3点が出土した。

- 18号土坑（第11図）

A・B-3 グリッド。今回の調査で確認された唯一の袋状土坑である。坑口の径150cm、最大径175cm、深さ55cmを計る。坑底は平坦である。覆土にはスコリアが含まれ、上層ほど多い。

図示した土器（142～144）は縄文時代前期後半であるが、図示できない程度の細片となって、土師器・須恵器が出土している。土師器は内面に暗文が確認でき、別に口縁部破片も確認されており、それらから8世紀前半代に位置付けられる可能性が強い。

本土坑からは非常に多くの炭化物が出土した。モモの核が最上部から、ダイズ？や別種のマメ、さらには16点もの球根類が中層部から出土している。炭化種子類についての詳細は後述するが、モモやダイズの存在からも本土坑の時期を奈良時代あるいはそれ以降に位置付けたい。

- 20号土坑（第9図）

D-6 グリッド。8号住居跡のすぐ脇に確認された。径約70cmの円形の土坑で、深さ10cmと浅い。覆土には、やはりスコリアが多く含まれるが、カーボンも目立つ。坑底は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

本土坑では遺構発見時に、覆土最上面に浅鉢の大破片が確認されている。半分程度の大きさの破片である。遺構は、確認面よりさらに上部から掘り込まれており、この破片が底面からわずか10cm浮いているだけという状況からすると、今回の調査では坑内の底面ちかい部分を確認した可能性が強く、土坑墓と考えられる。

土器（11）は口縁部におそらく一対となるであろう抉りのある浅鉢で、内面にはペン先状工具による連続刺突が施される。新道式土器である。

- 21号土坑（第11図）

C-10グリッド。楕円形を呈し、長径180cm、短径150cm、深さ30cmを計る。坑底は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。非常に縦長の形態であり、坑底が平坦であることなどから、土坑墓の可能性が強い。図示できなかつたが、覆土中から少量ながら土器片が出土している。無文の胴部破片で、繊維は含んでいないが、剥離の状況などから住居跡の資料と同様の時期に位置付けられるものであろう。剥片（249・250）も出土した。

• 23号土坑（第11図）

B・C-10・11グリッド。不整楕円形を呈し、長径245cm、短径130cm、深さ50cmを計る。坑底は段を成し、壁の立ち上がりは緩やかである。石鏸（186）が出土したもの、時期不明である。

4 掘立柱建物跡（第12図）

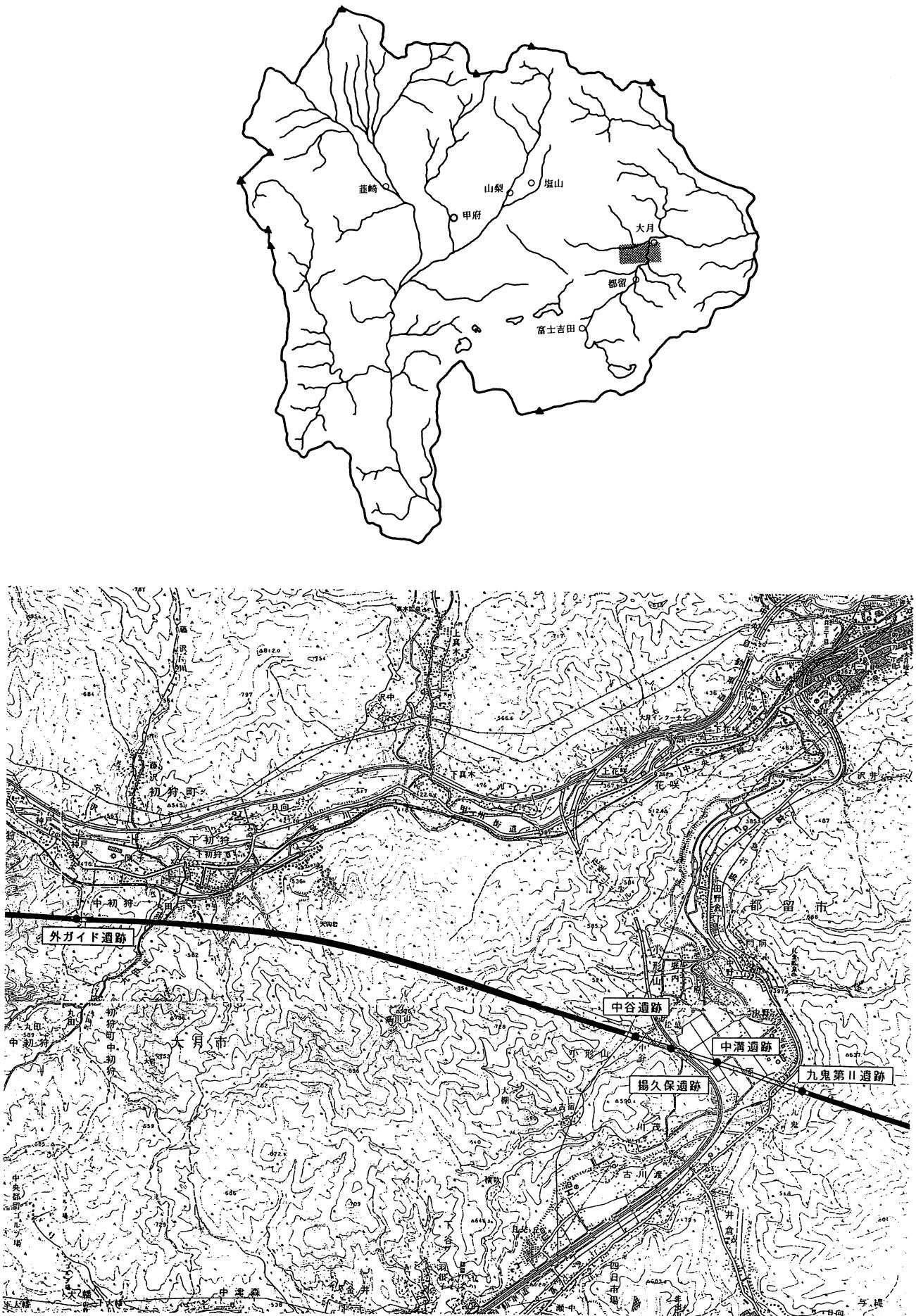
D-0・1グリッド。調査区域の関係から、ごく一部を調査したに過ぎない。確認されたピットは3基で、いずれも径50cm程度の円形を呈し、深さ25cm～35cmを計る。内部に平石などの施設はない。ピット間は約180cmである。確認されたピットのラインはN-38-Wであるが、これが主軸であるあるいは主軸に直行する軸であるかはこの部分の調査だけでは判断できない。どのピットからも遺物は出土していない。

5 溝と出土遺物（第12図）

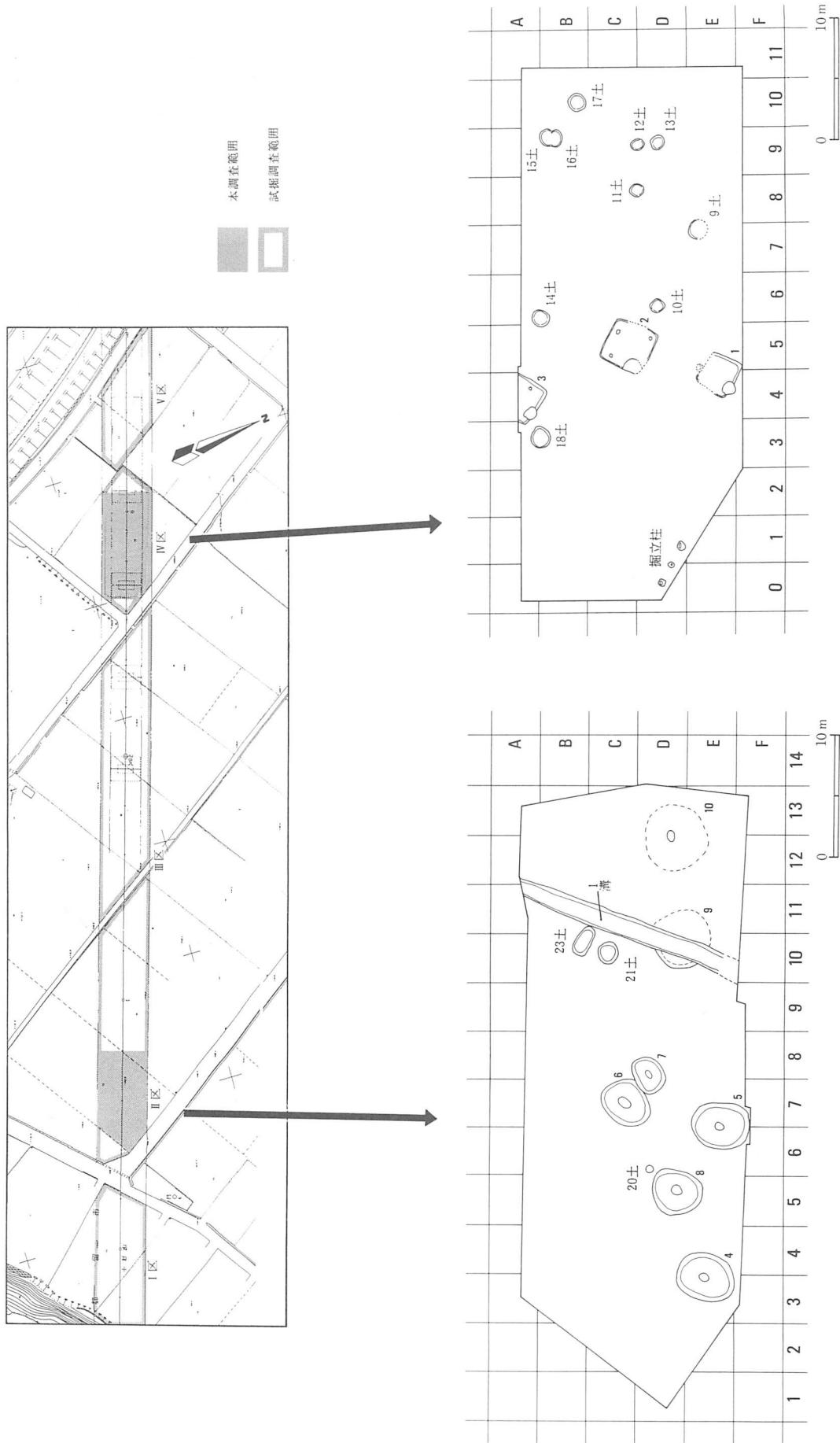
A～E-10・11グリッド。9号住居跡の中心を切って、調査区域を横切る形で確認された溝である。幅80cm～150cm、深さ30cm～50cmを計る。確認された部分では3ヵ所に深い掘り込みが確認された。本溝の覆土は最上層が暗灰色を呈していたためはっきりと認識できた。その時点では時期的には非常に新しいものと考えていたが、中層部分以下はスコリアを多く含んだ暗褐色粘質土層で、他の遺構と変わらない。本溝からは、図示できなかつたが平安時代の土師器小破片が出土しており、平安時代に位置付けられる可能性がある。

6 遺構外出土遺物

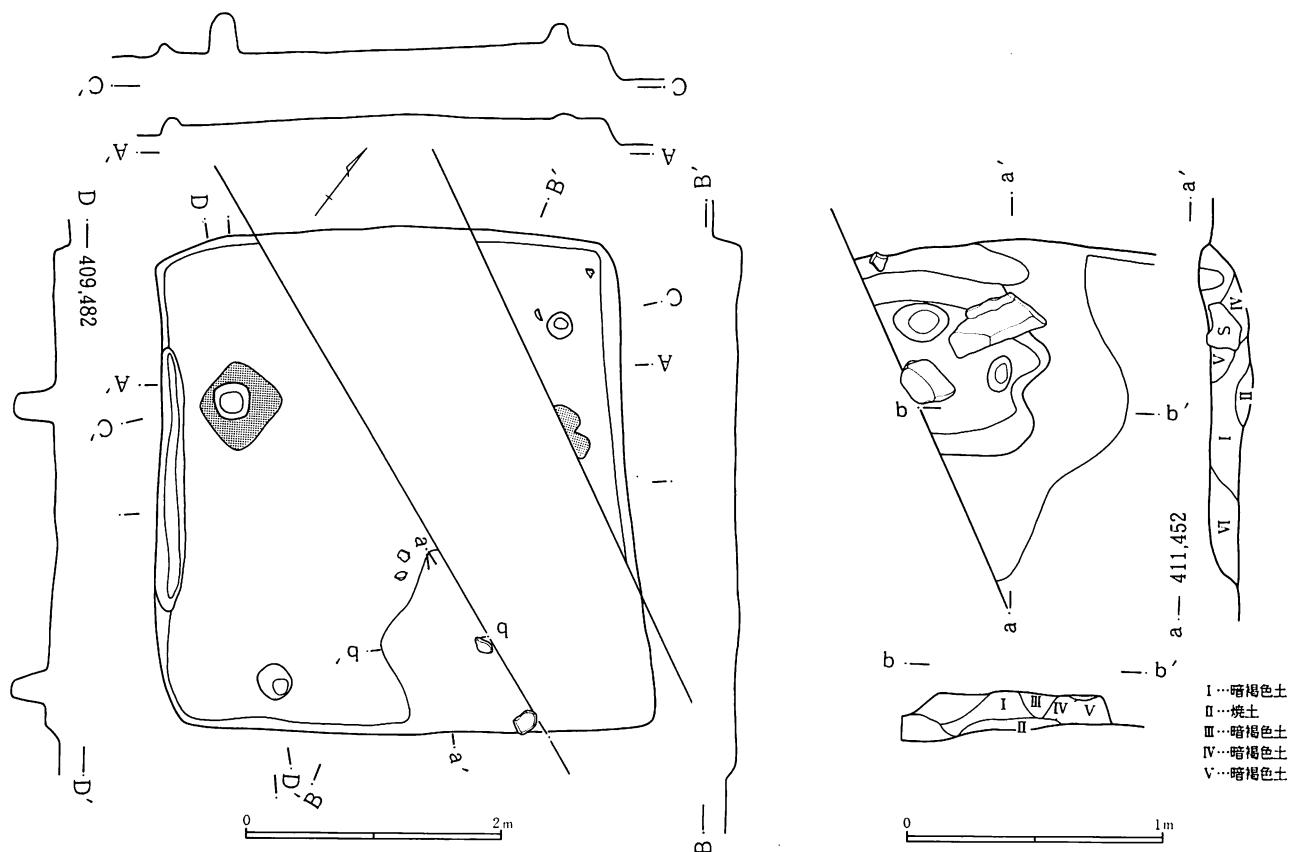
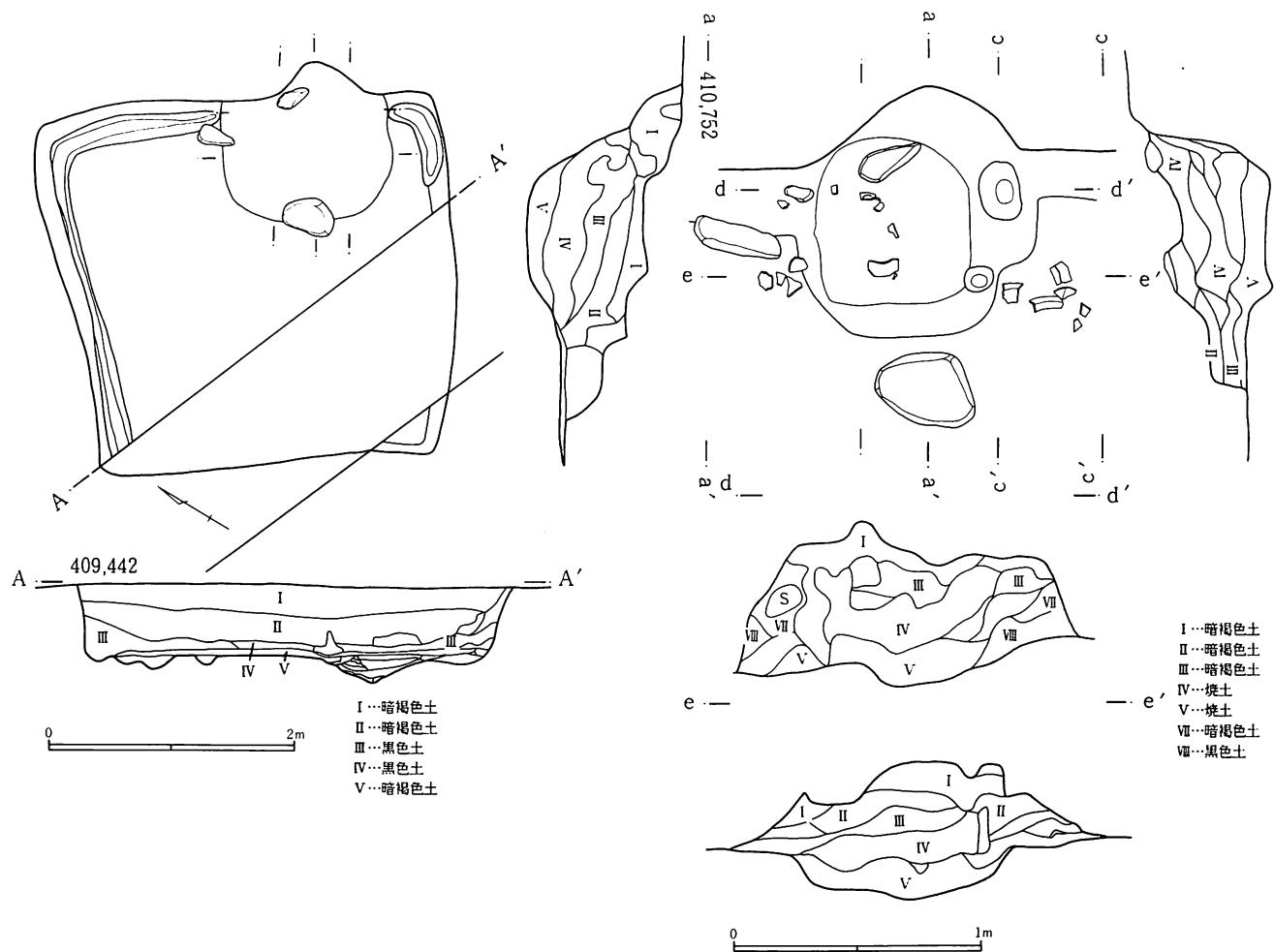
遺構外から多くの遺物が出土している。特に縄文時代早期末～前期初頭の土器（145～158）が目につく。厚手の下吉井式と薄手の木島式が多い。これらについての詳細は後述する。他に、多くはないが前期（159～161）、中期（162～164）の土器がある。後・晩期の土器の有文破片は確認されなかった。石器では石鏸（187～191）、ドリル（197・198）、スクレイパー（208）、磨石（295）などがあり、また加工痕ある剥片（218）、剥片（251～255）も出土した。これらのほとんどは早期末～前期初頭に位置付けられよう。また、唯一の打製石斧（297）は粘板岩質の剥離しやすい石材を用いており、中期の可能性が強い。



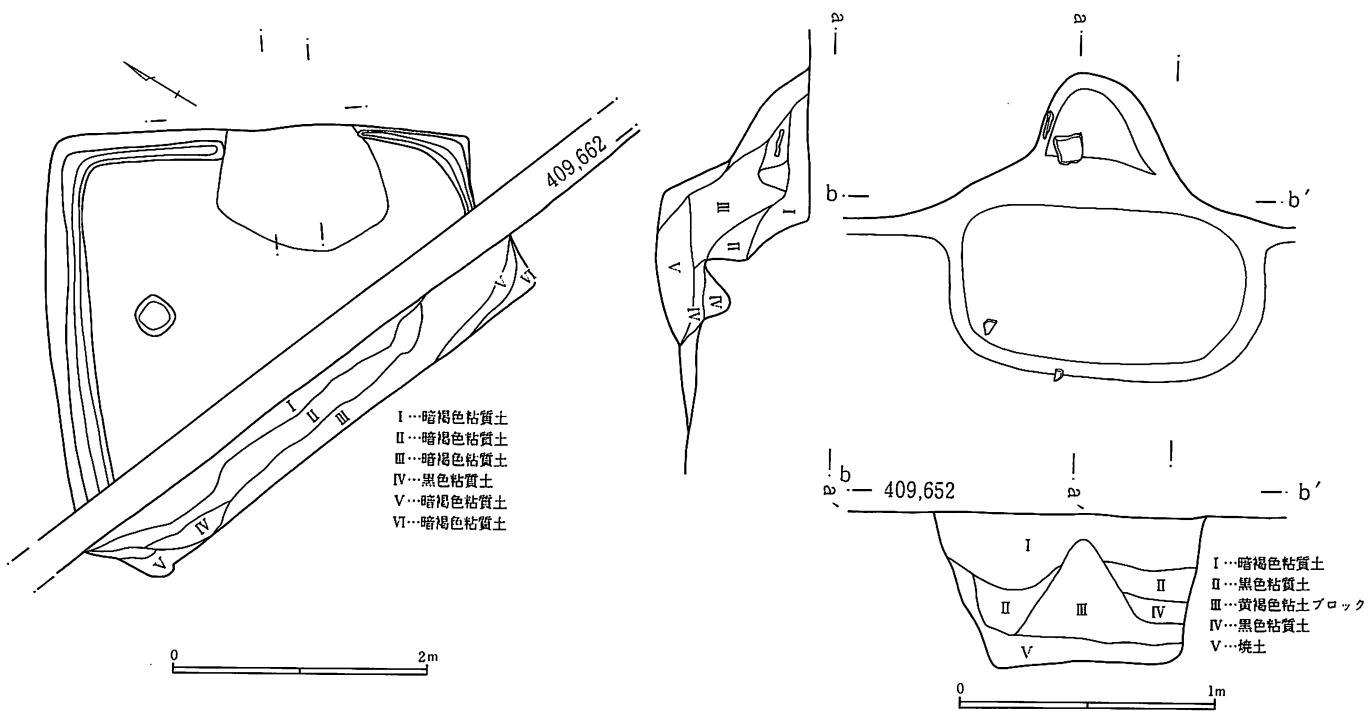
第1図 遺跡位置図



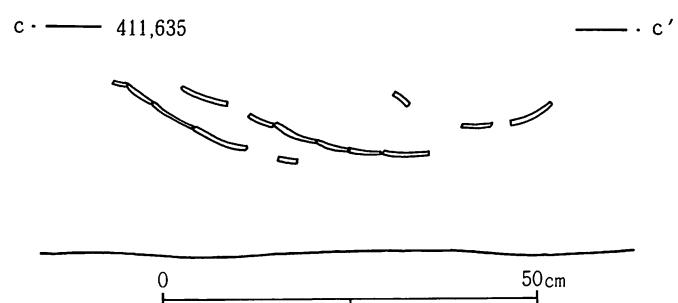
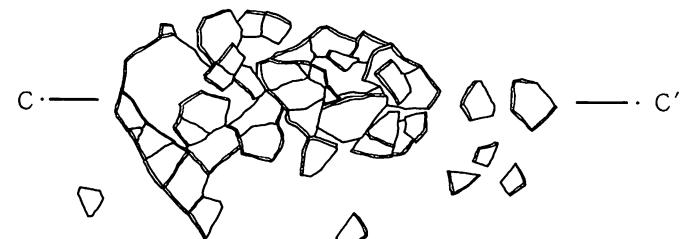
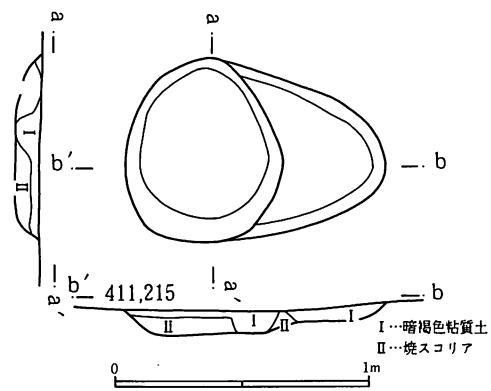
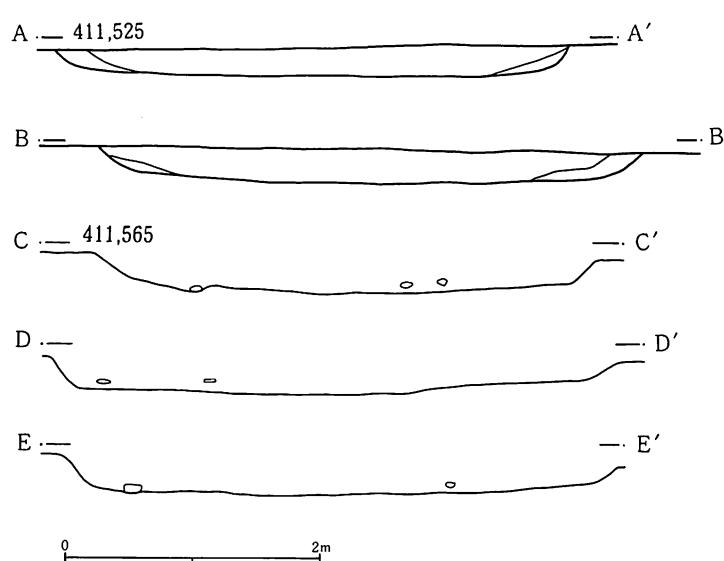
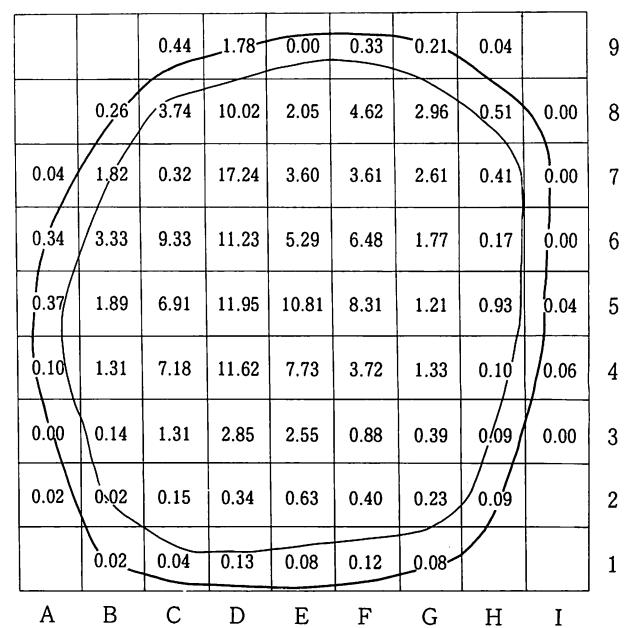
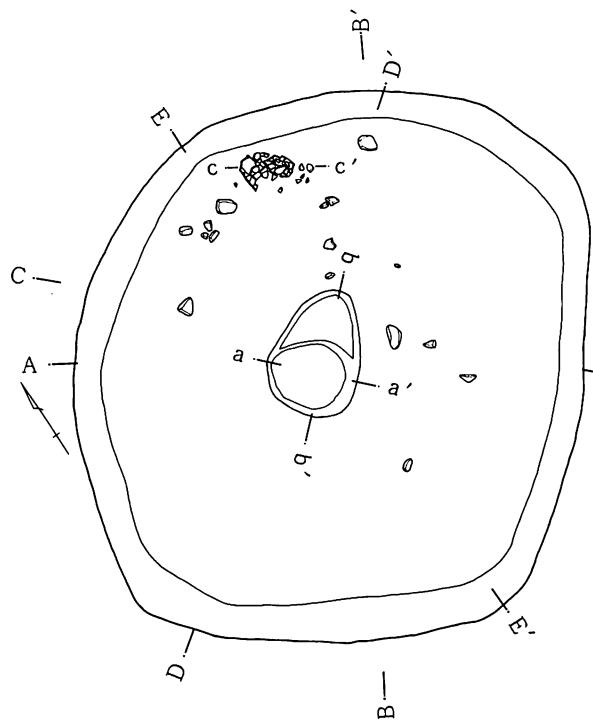
第2図 調査全体図



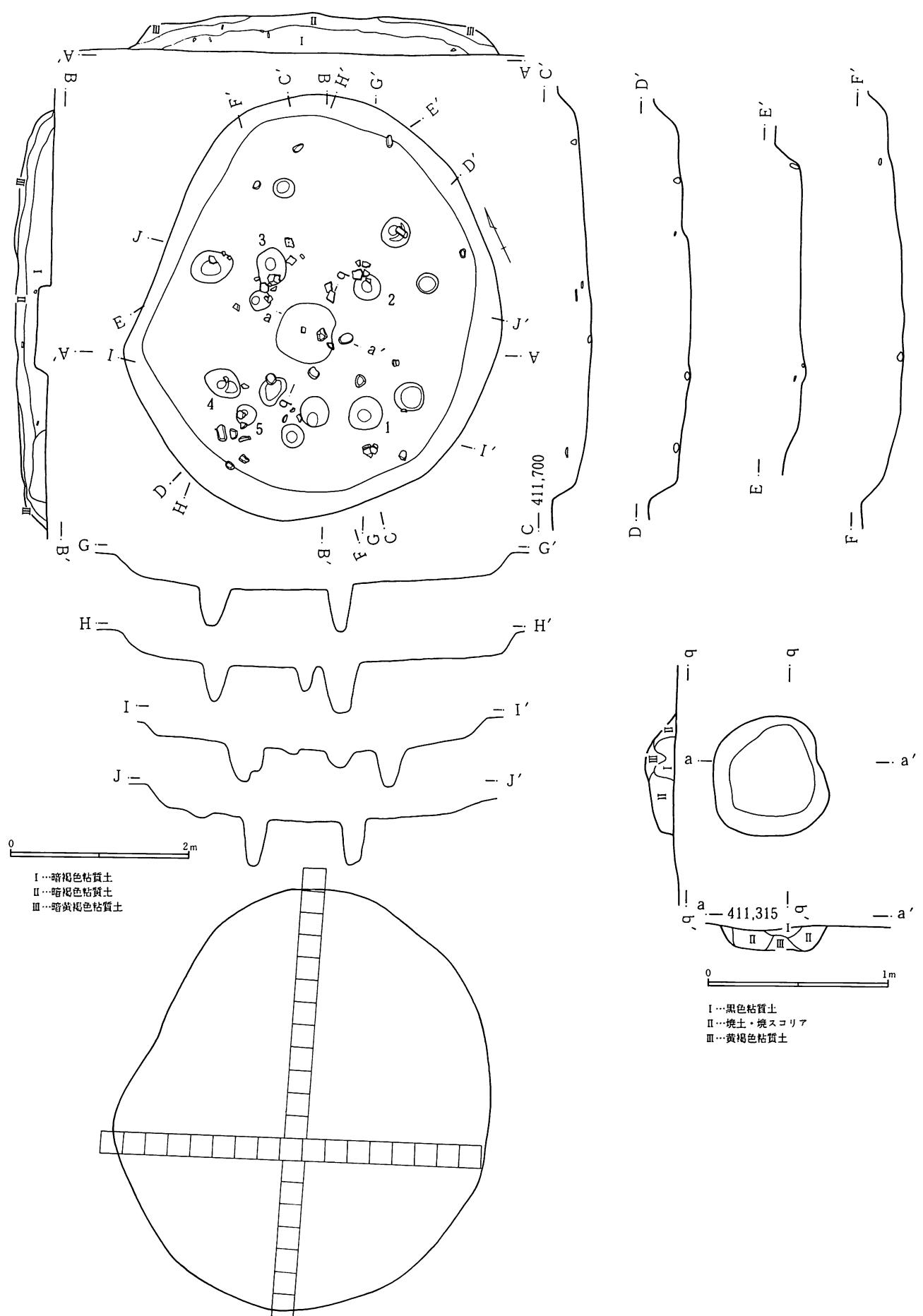
第3図 1号・2号住居跡



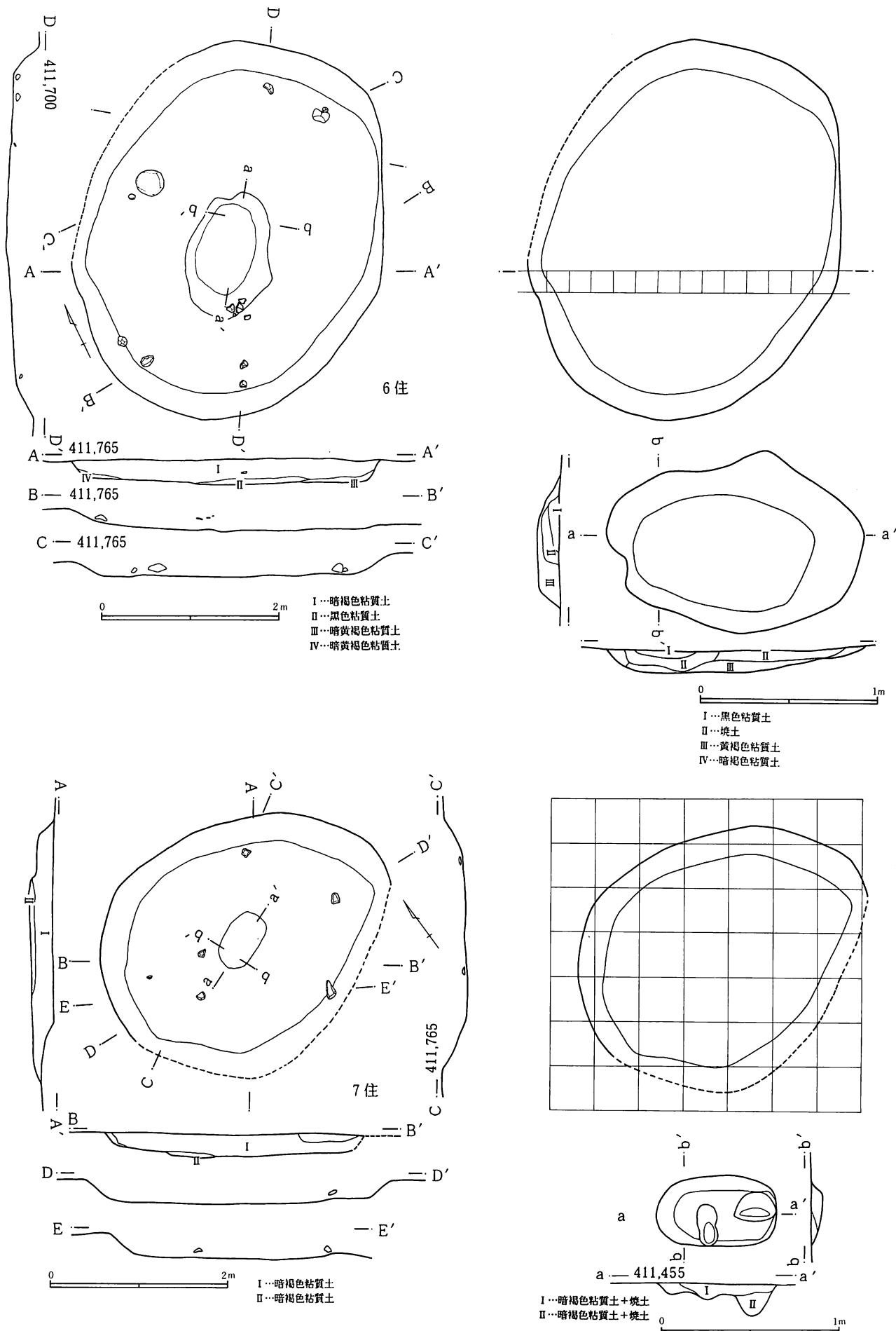
第4図 3号住居跡



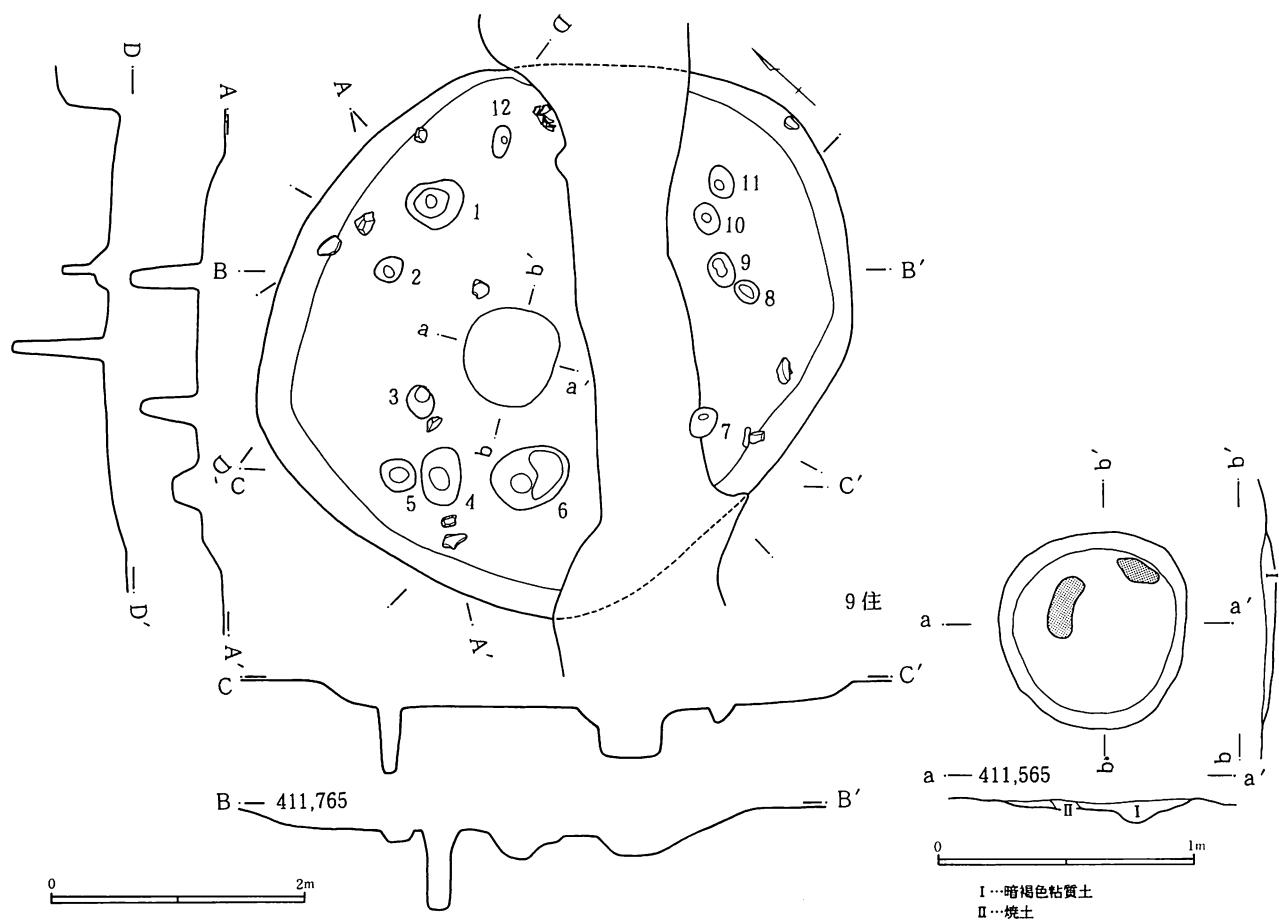
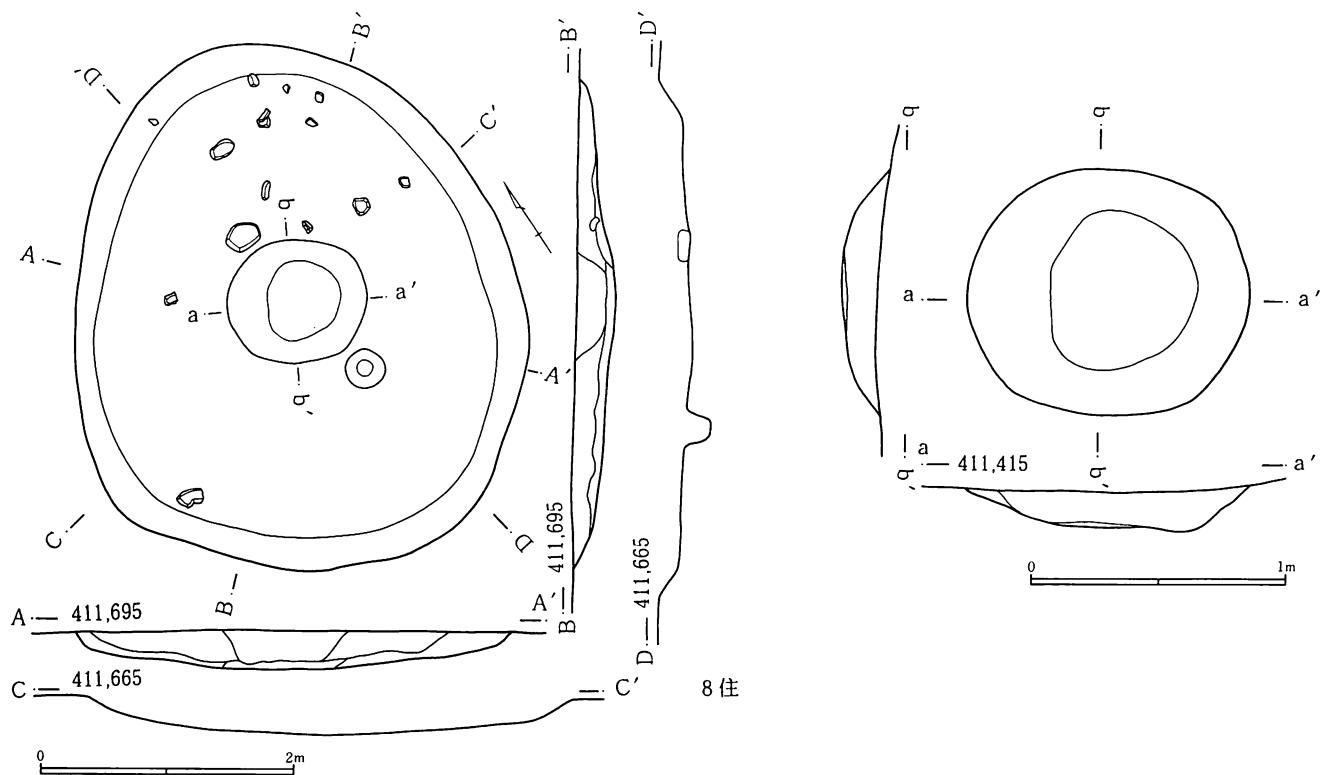
第5図 4号住居跡



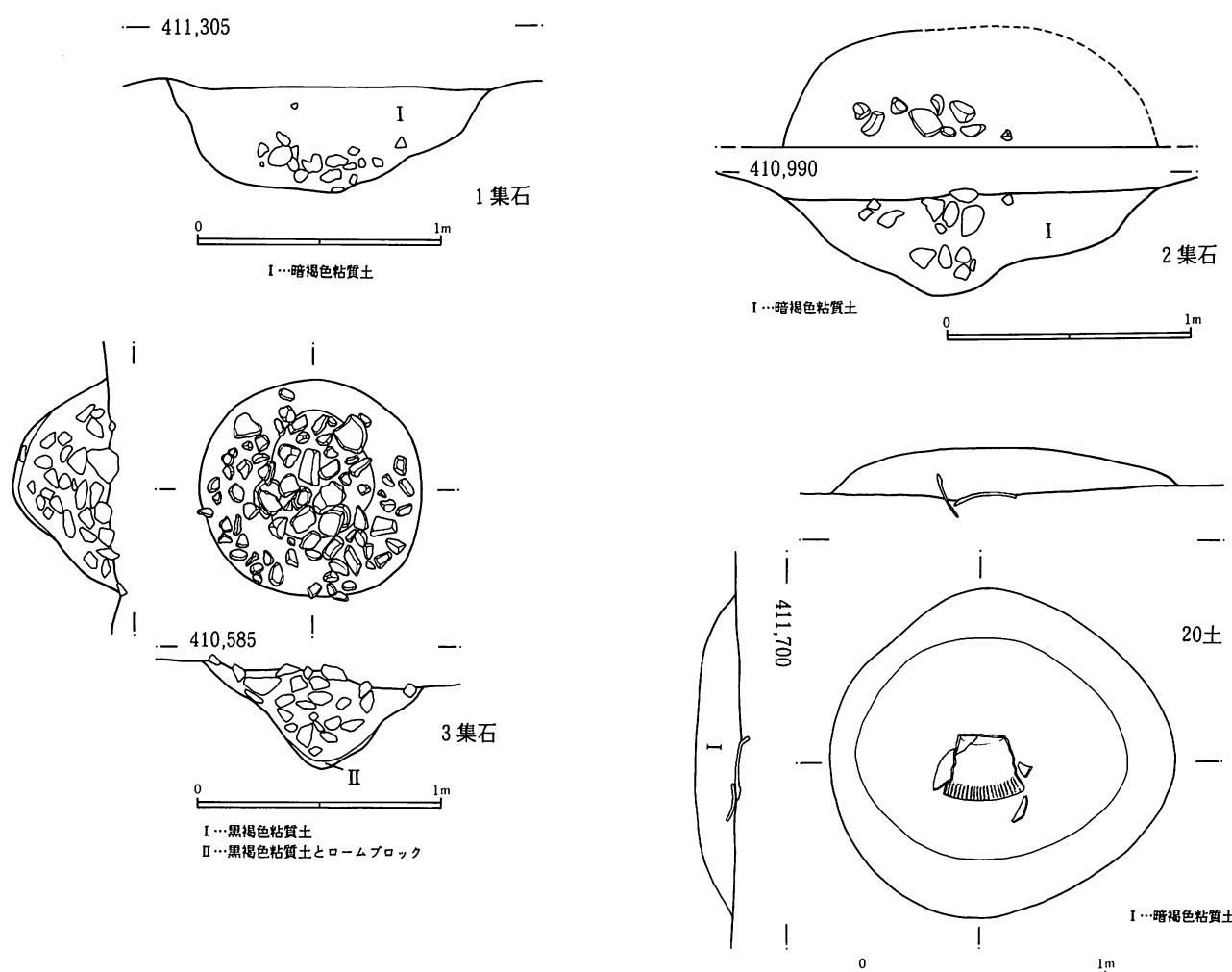
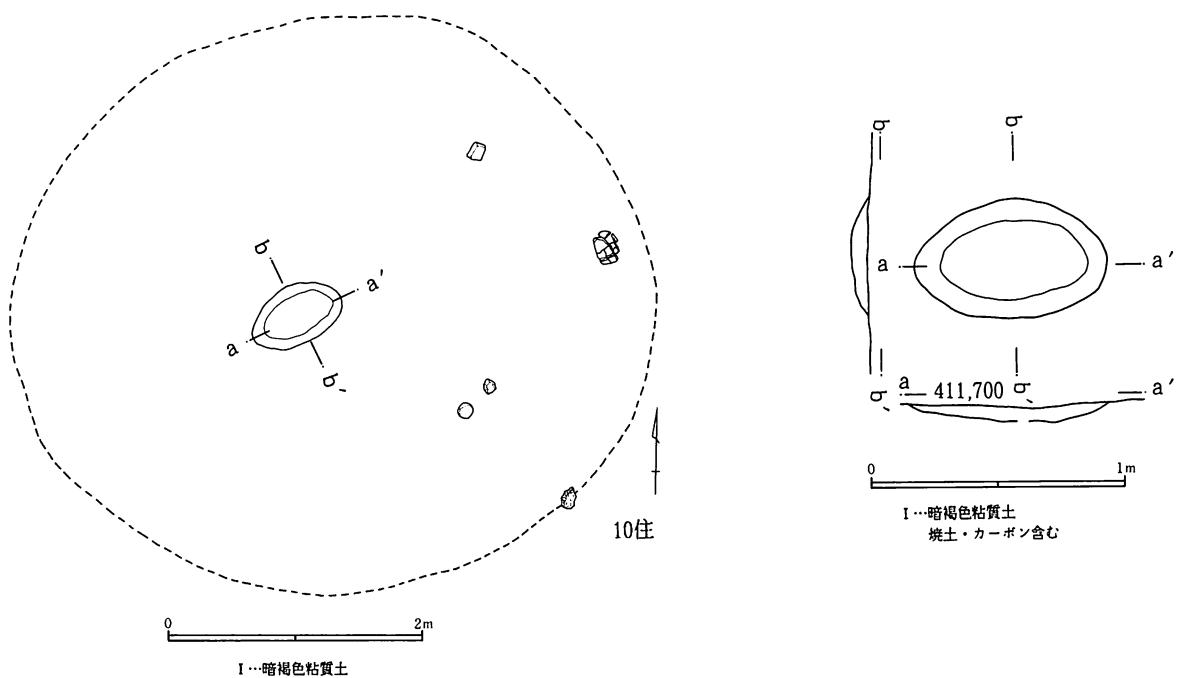
第6図 5号住居跡



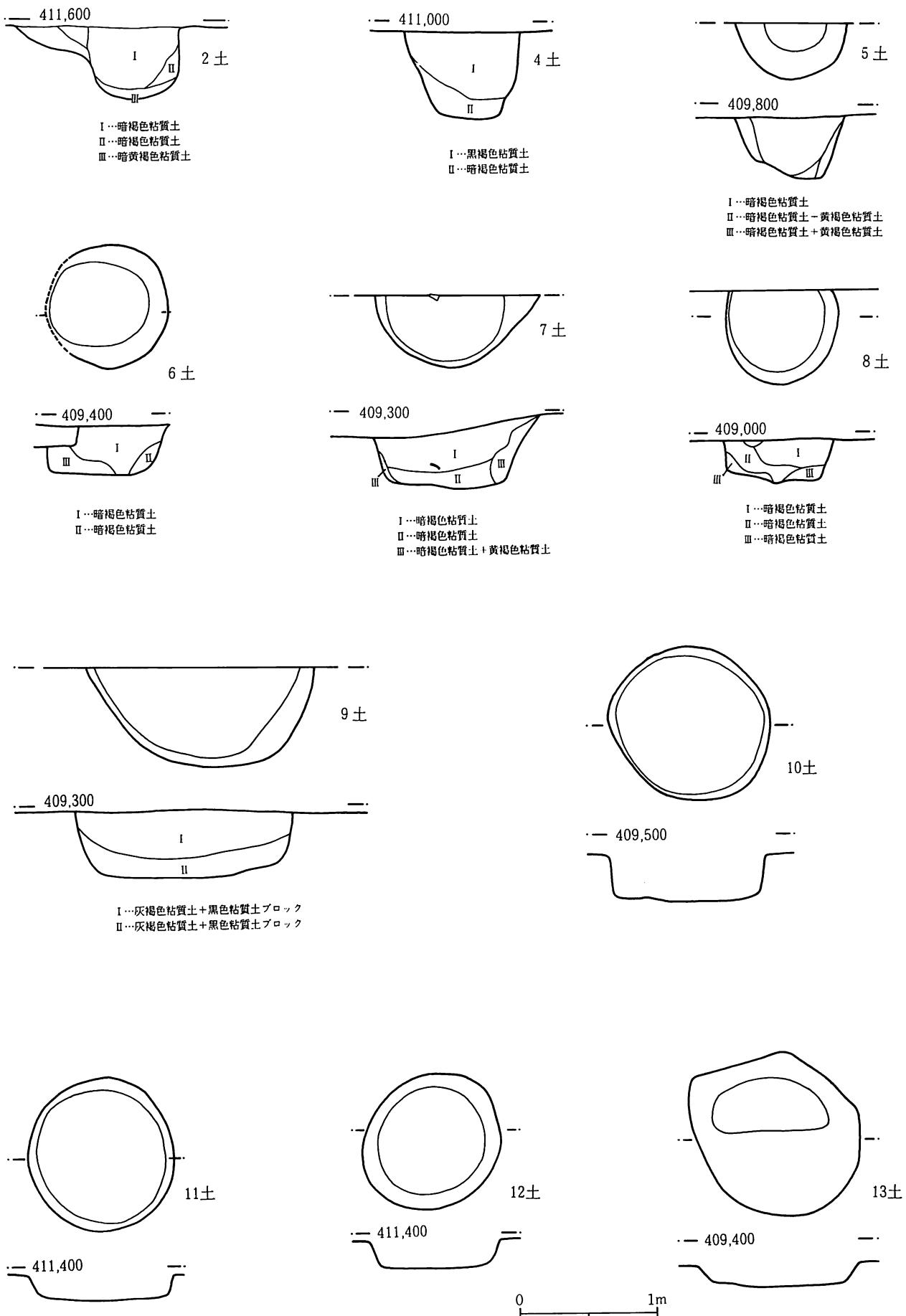
第7図 6号・7号住居跡



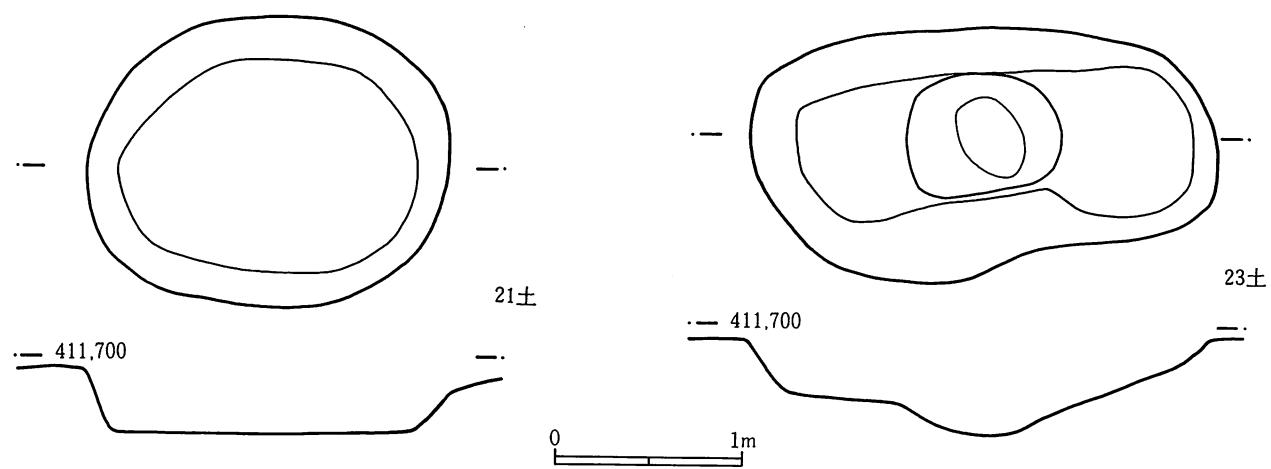
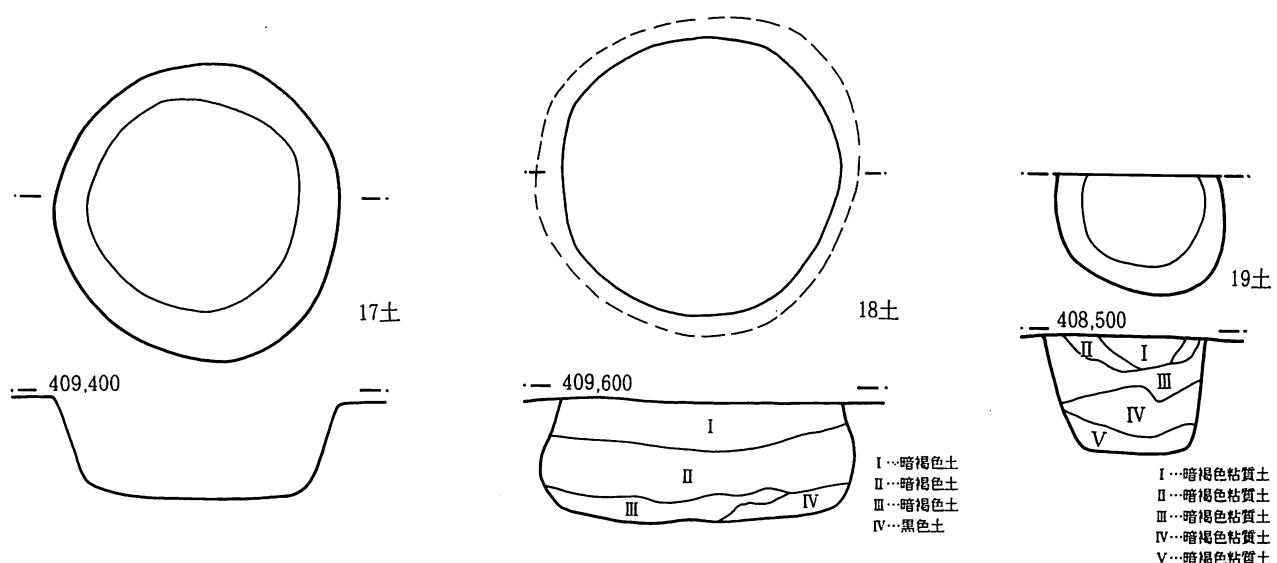
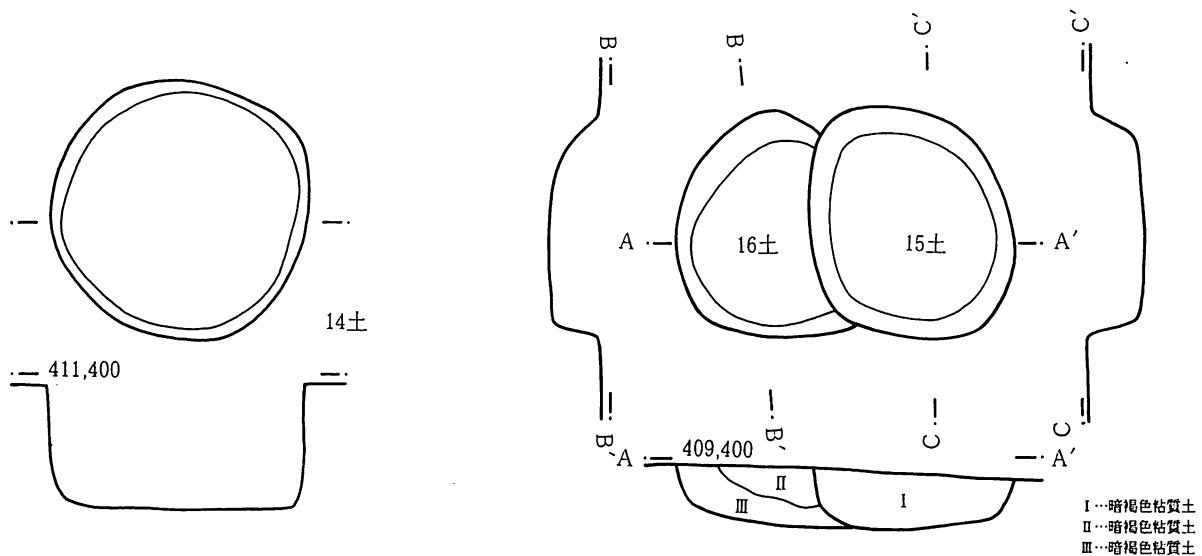
第8図 8号・9号住居跡



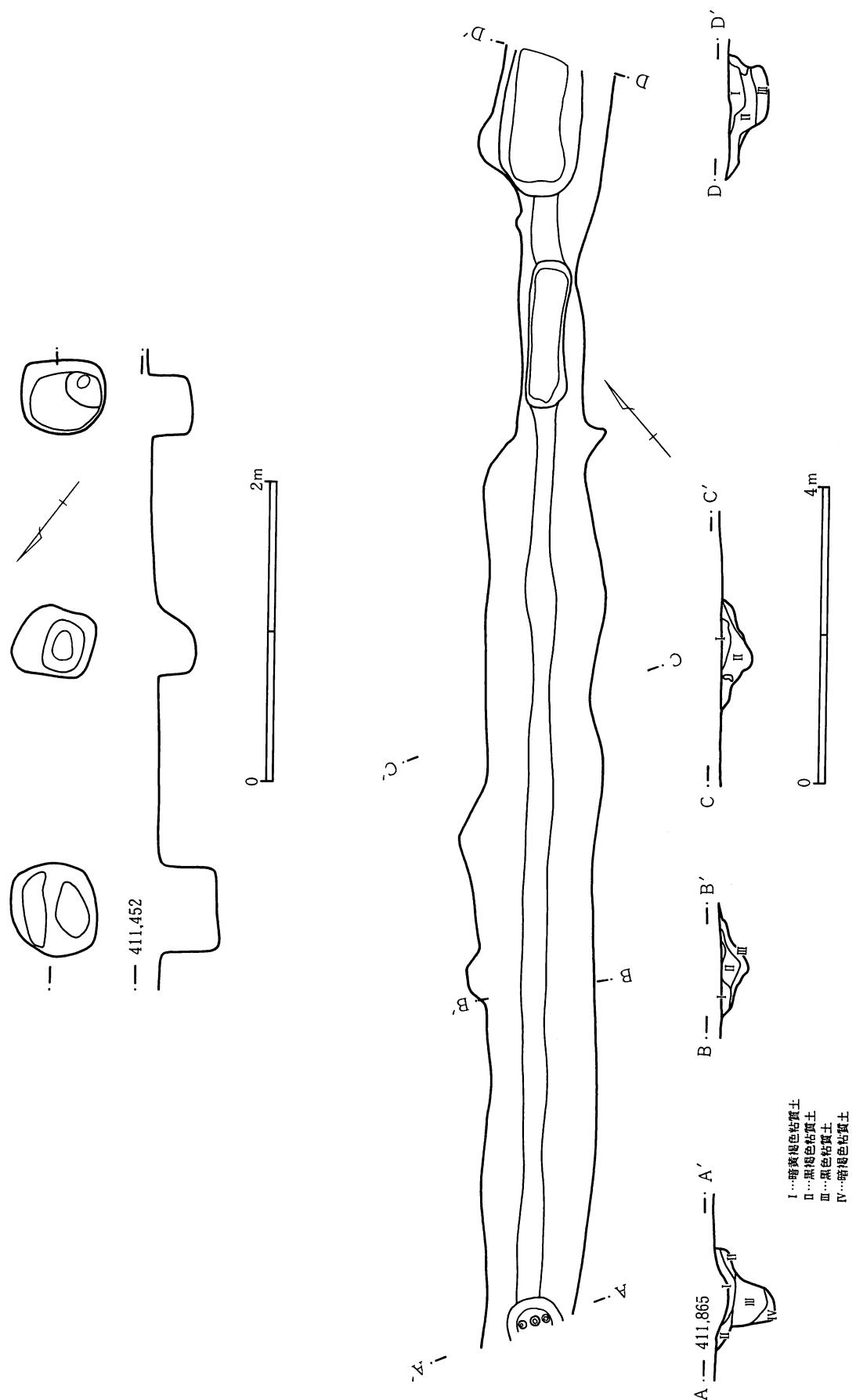
第9図 10号住居跡・1号～3号集石土坑・20号土坑



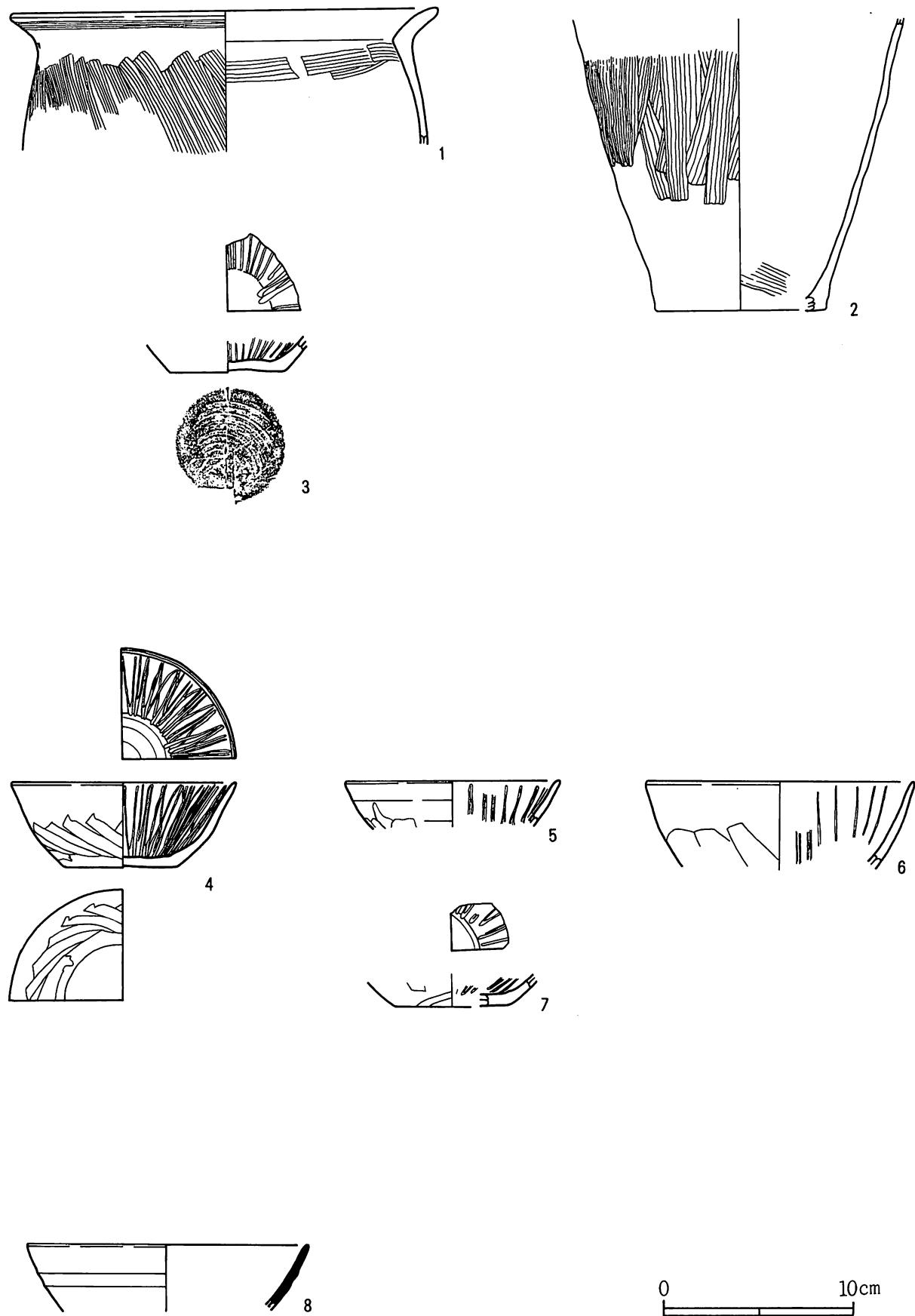
第10図 土坑（2号～13号）



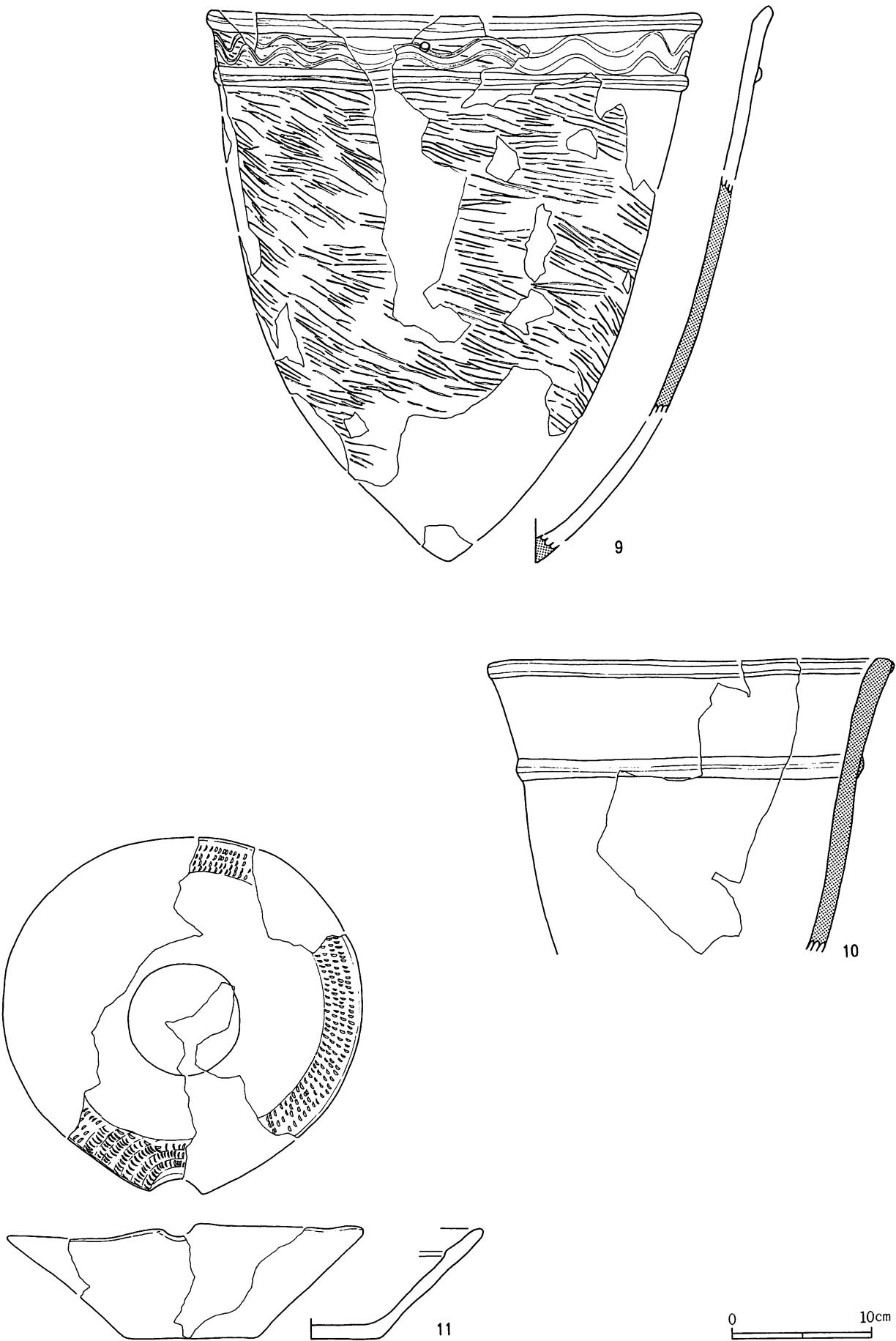
第11図 土坑（14号～23号）



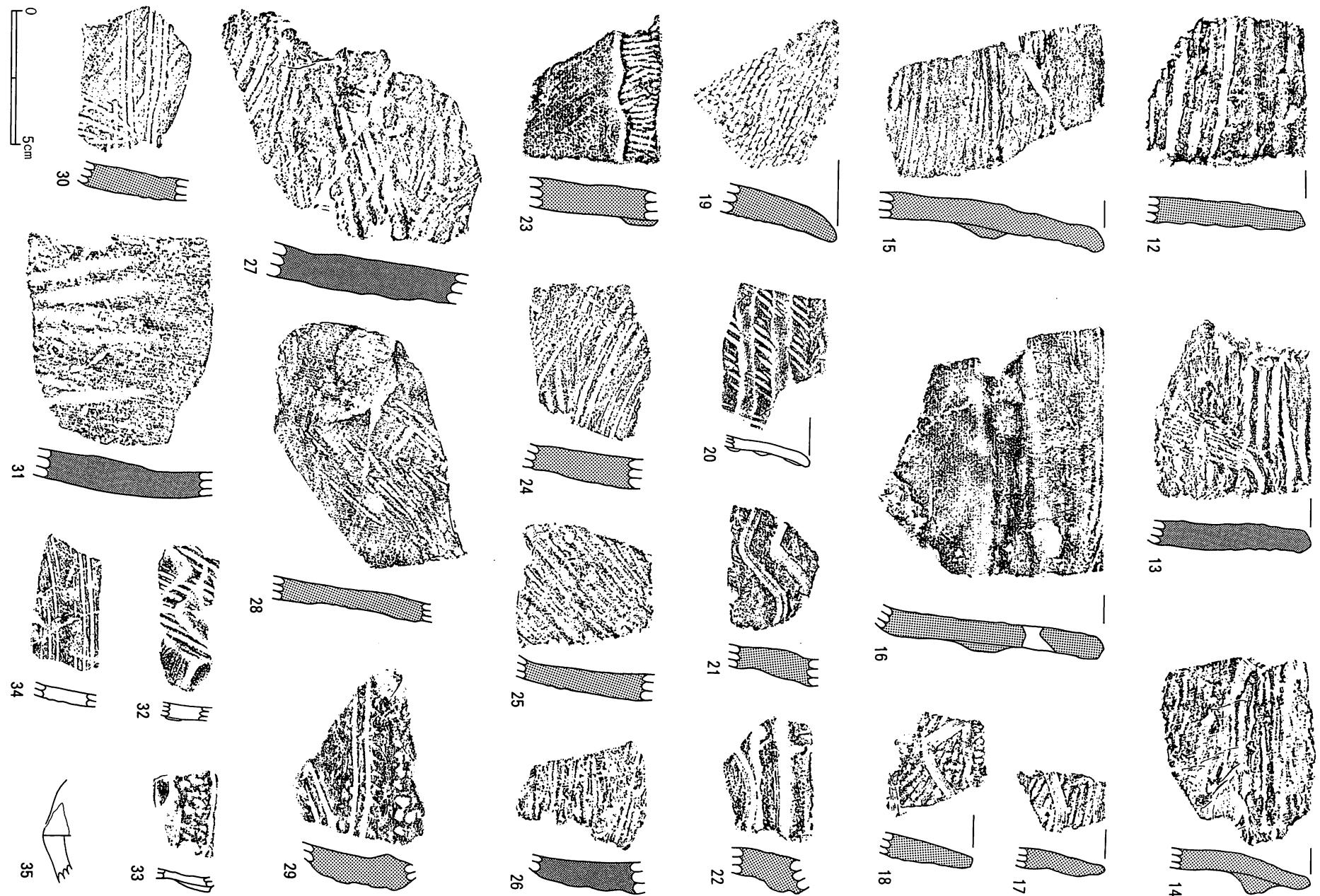
第12図 溝・掘立柱建物



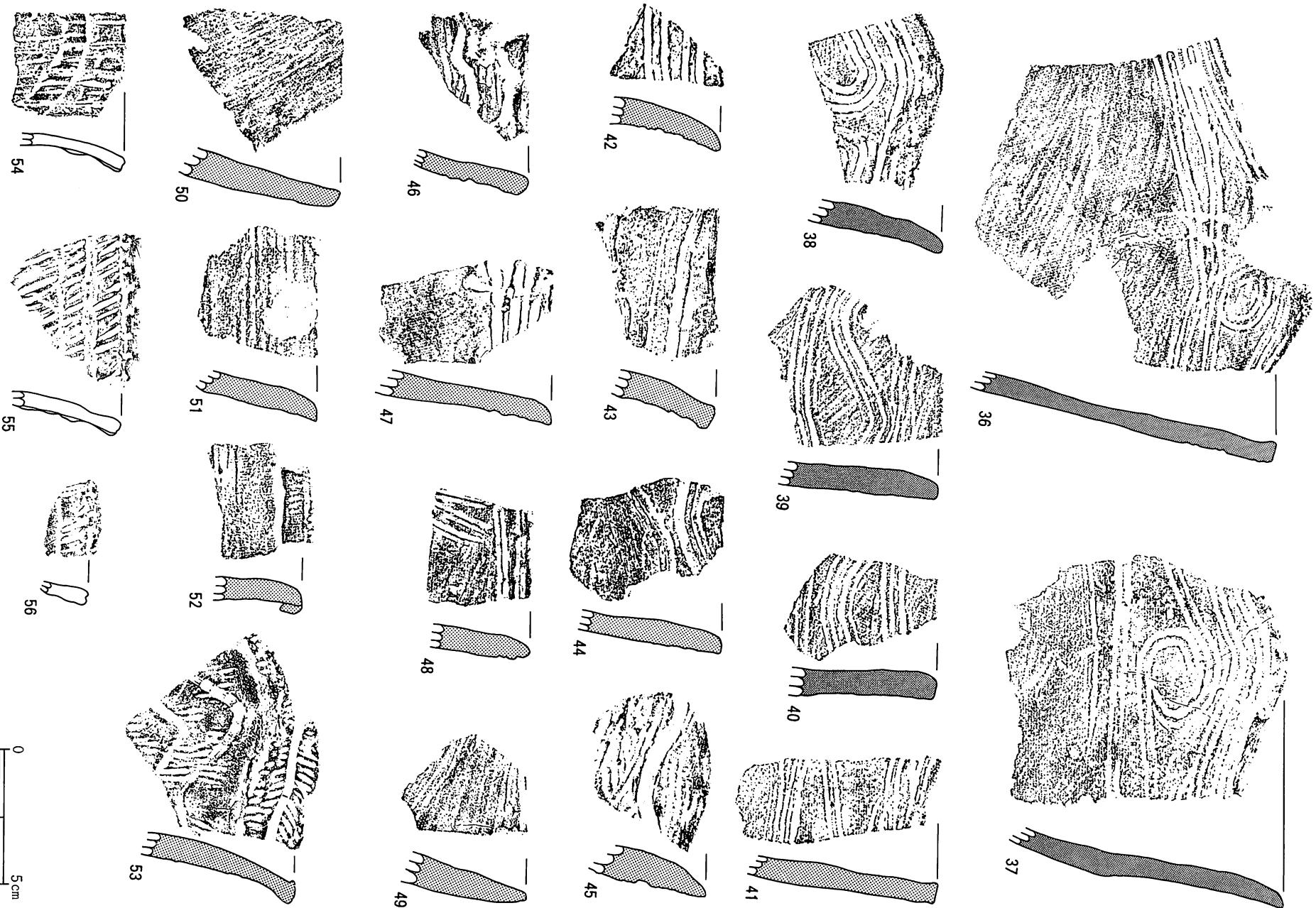
第13図 土師器・須恵器



第14図 土器（4号住居跡・9号住居跡・20号土坑）

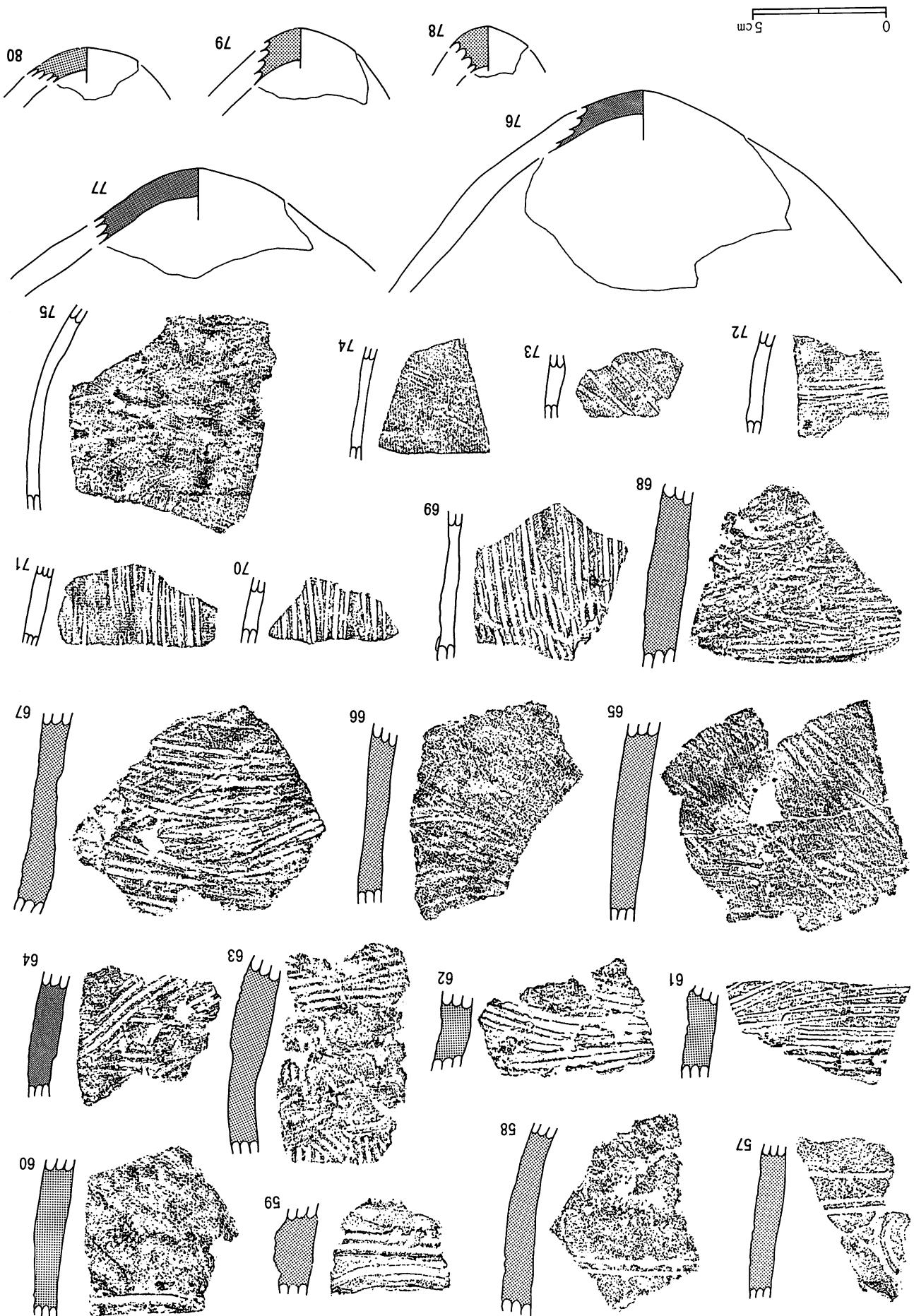


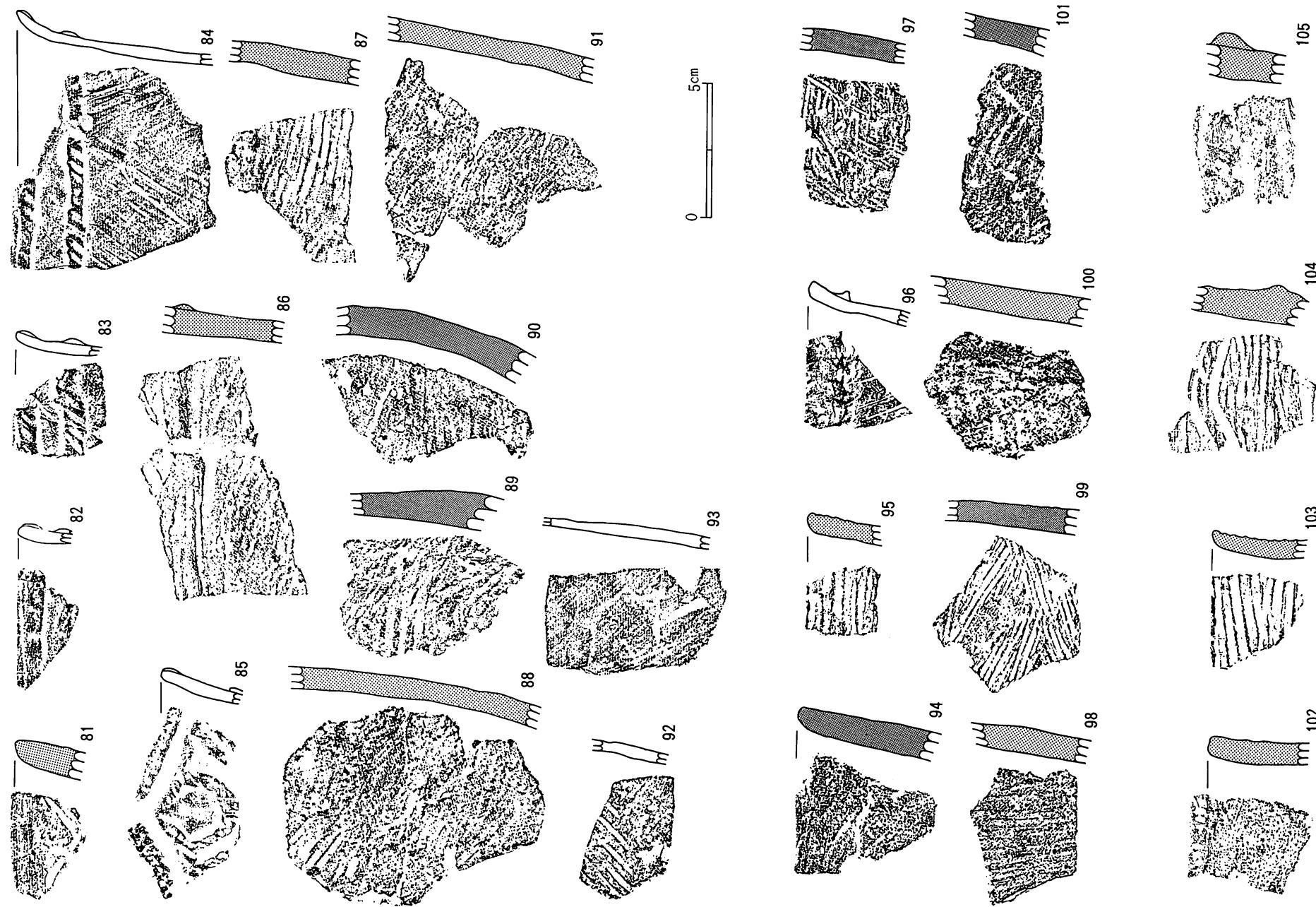
第15図 土器（4号住居跡）



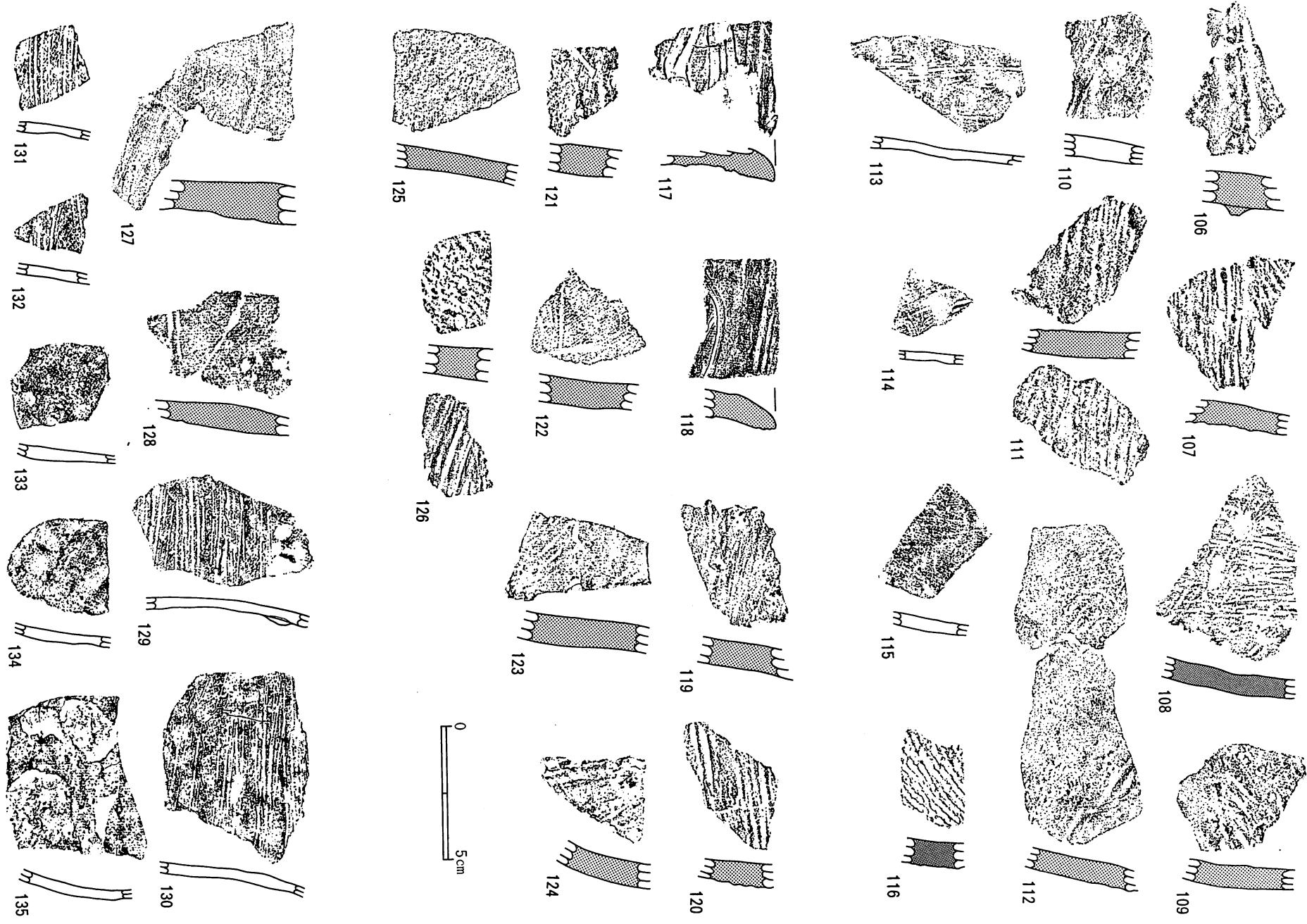
第16図 土器（5号住居跡）

第17图 土器 (5号住居跡)

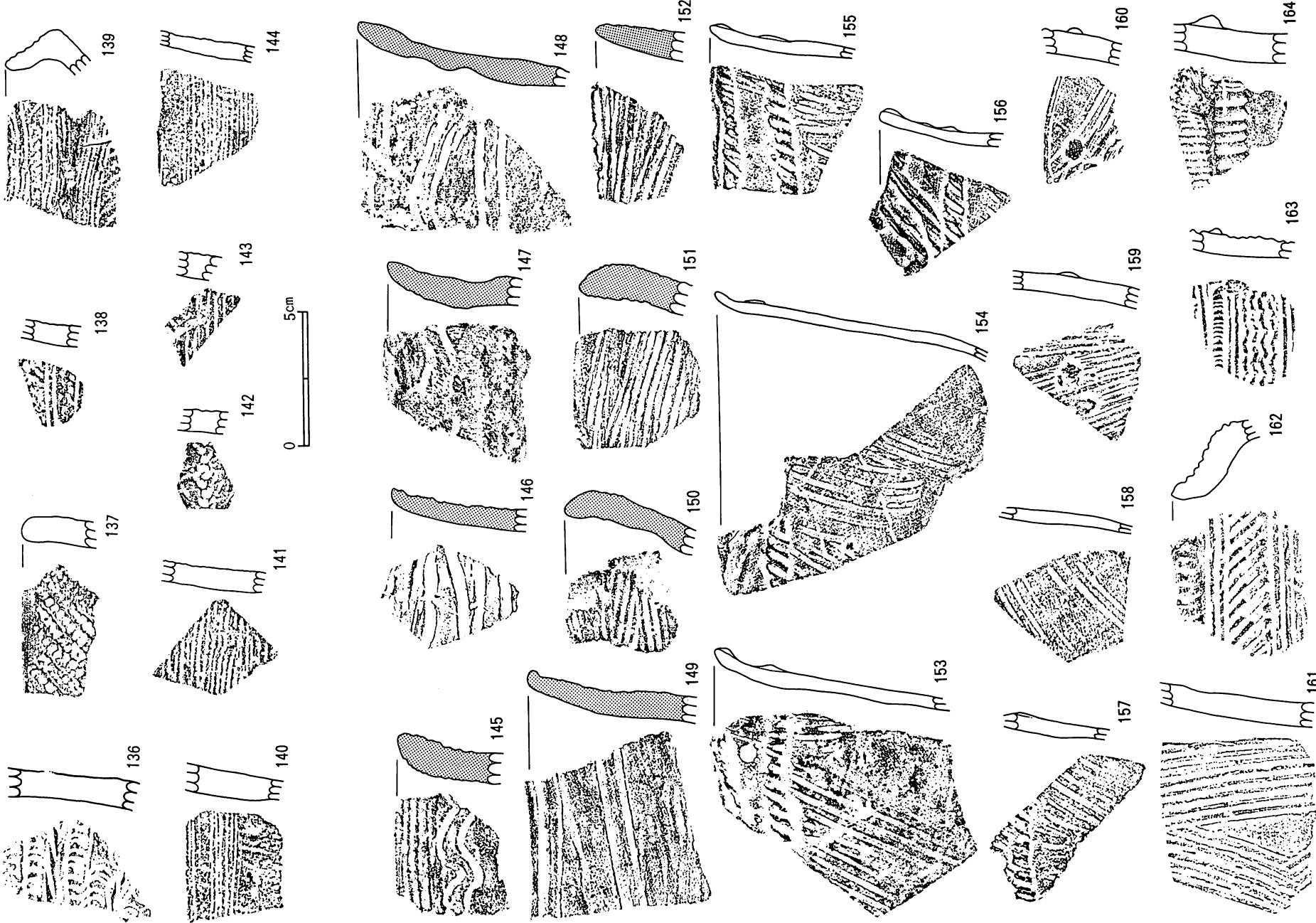




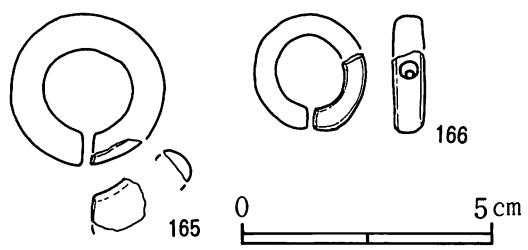
第18図 土器（6号～8号住居跡）



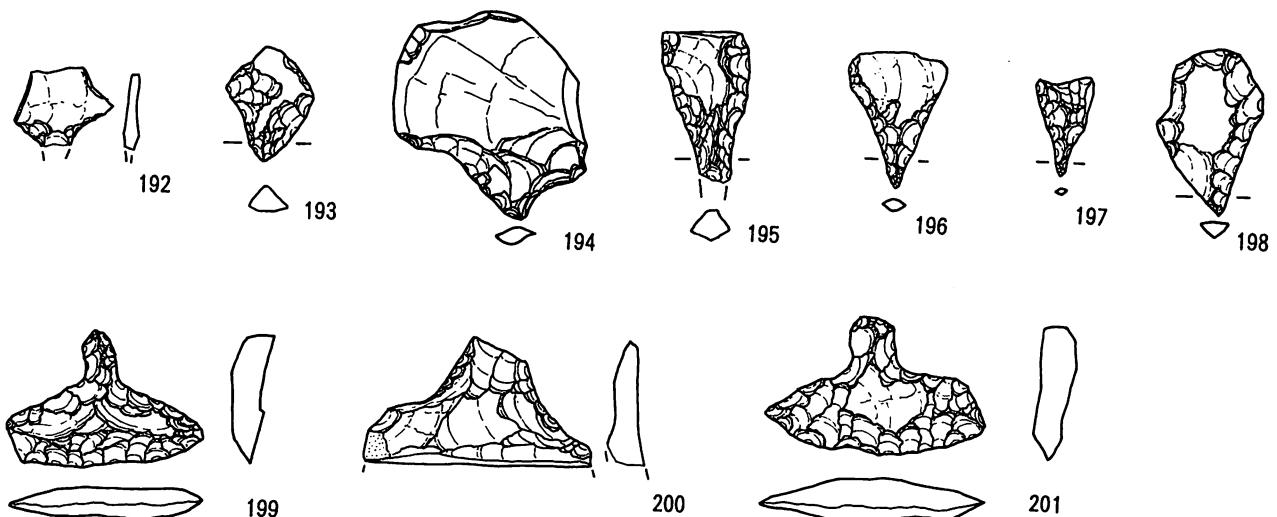
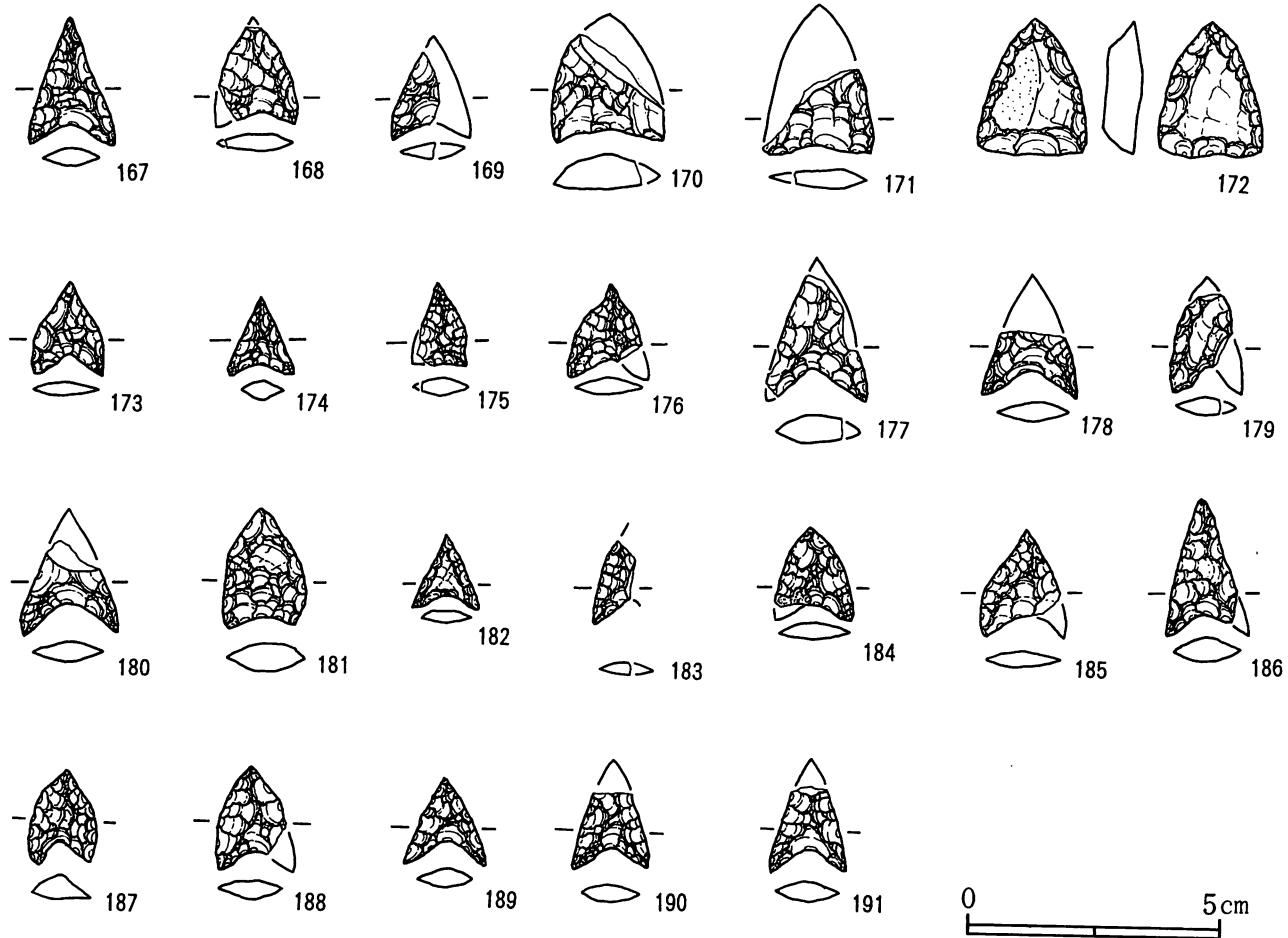
第19図 土器（8号～10号住居跡）



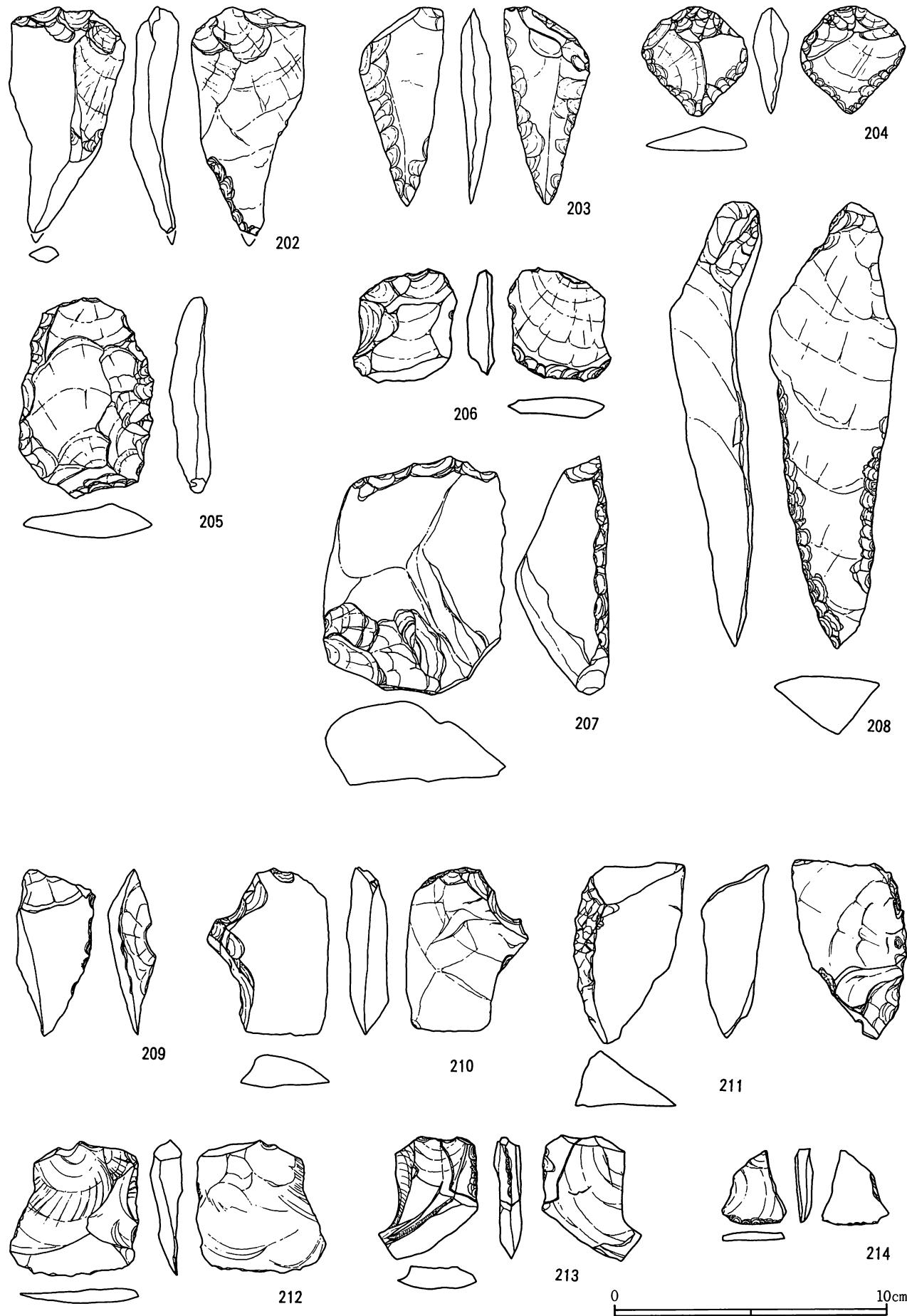
第20図 土器(土坑・グリッド)



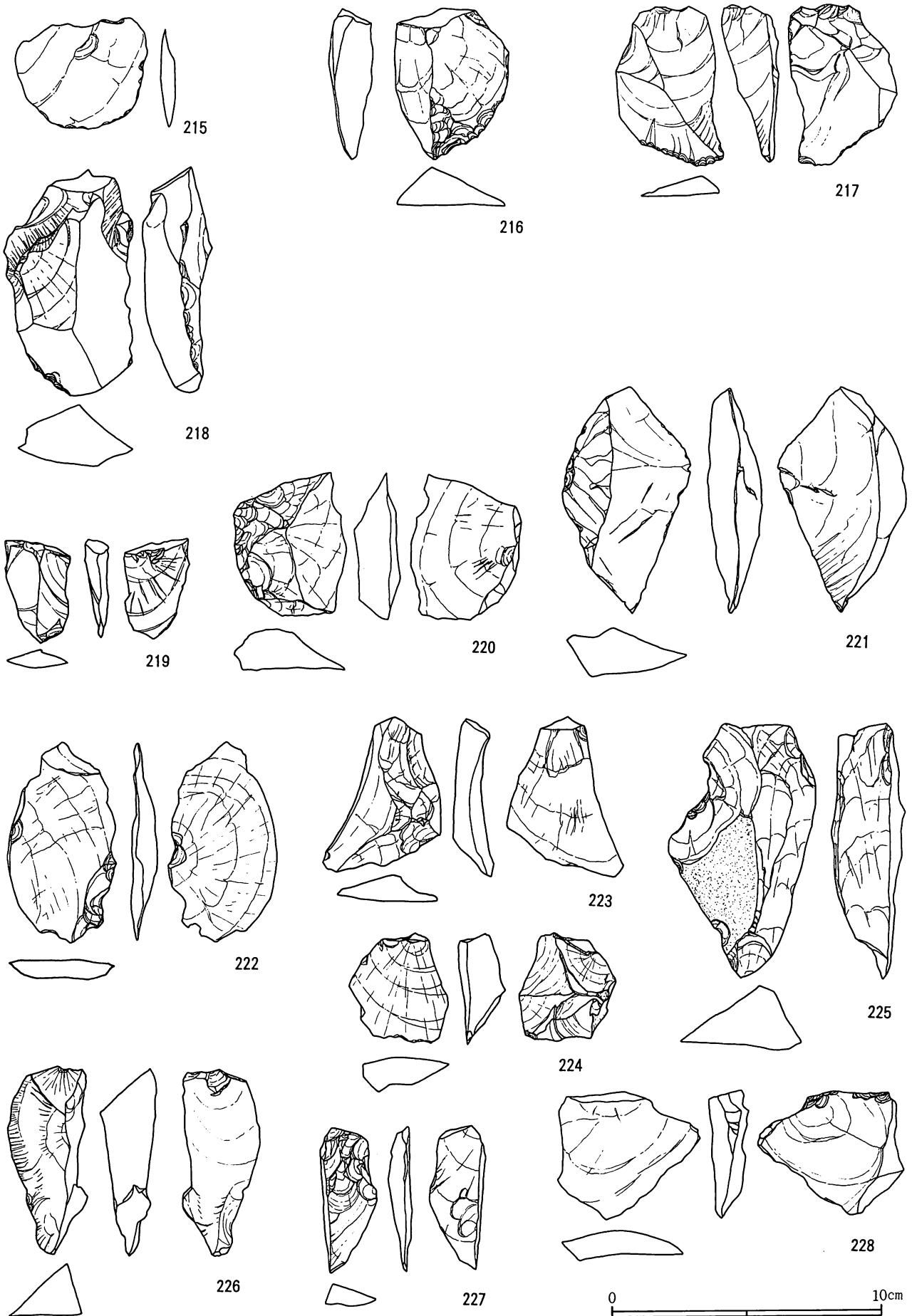
第21図 積状耳飾り



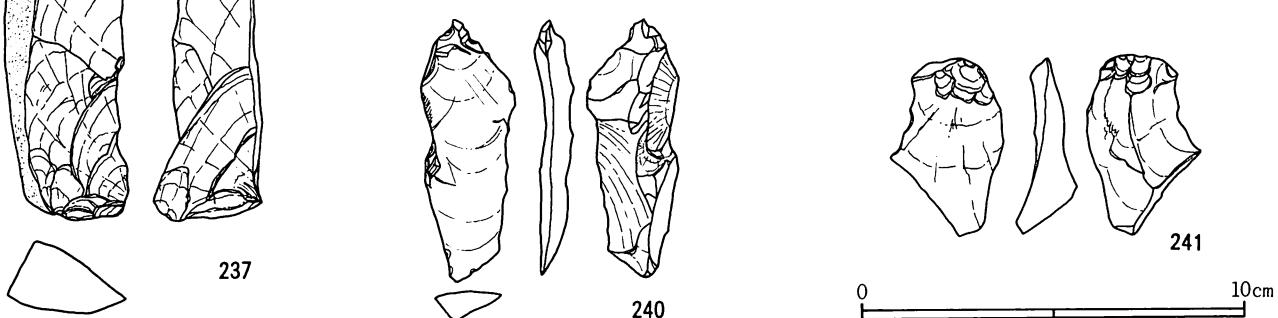
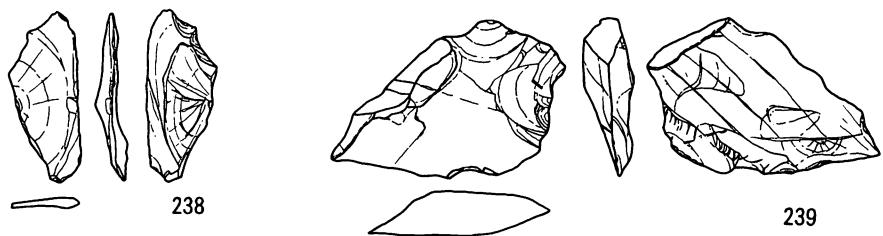
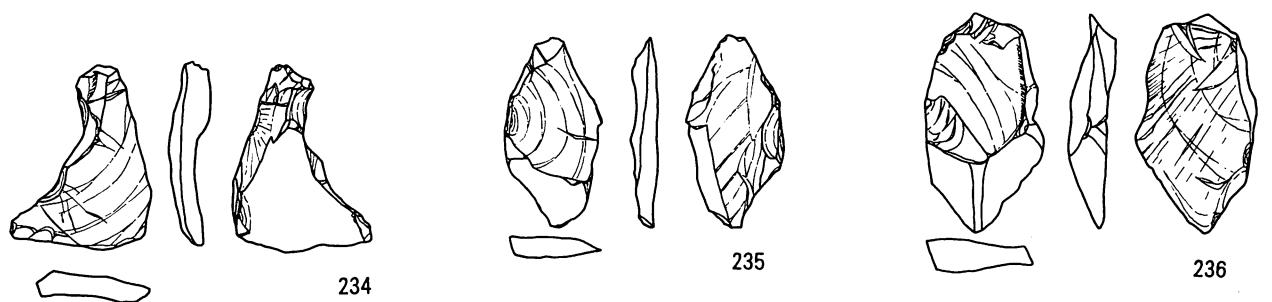
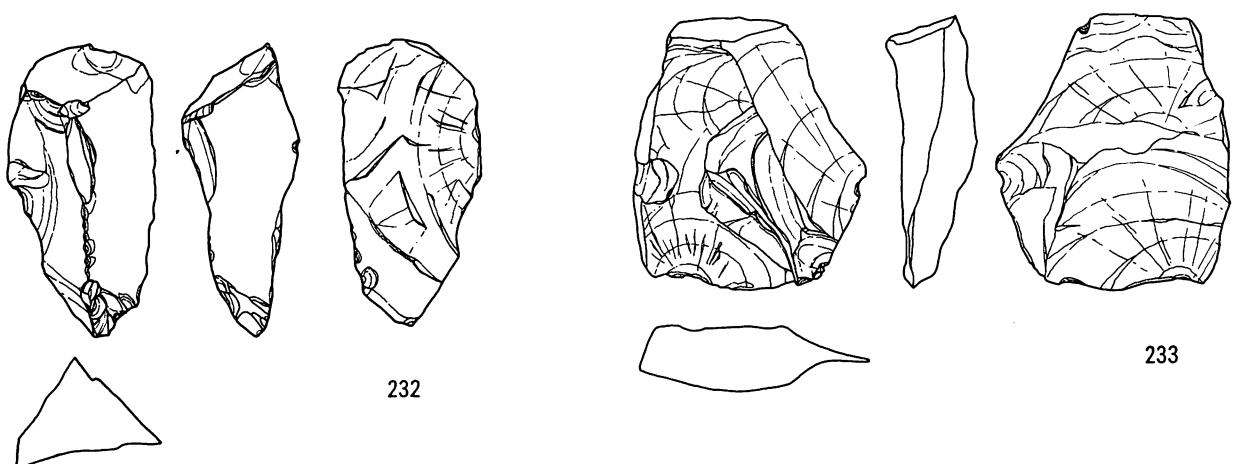
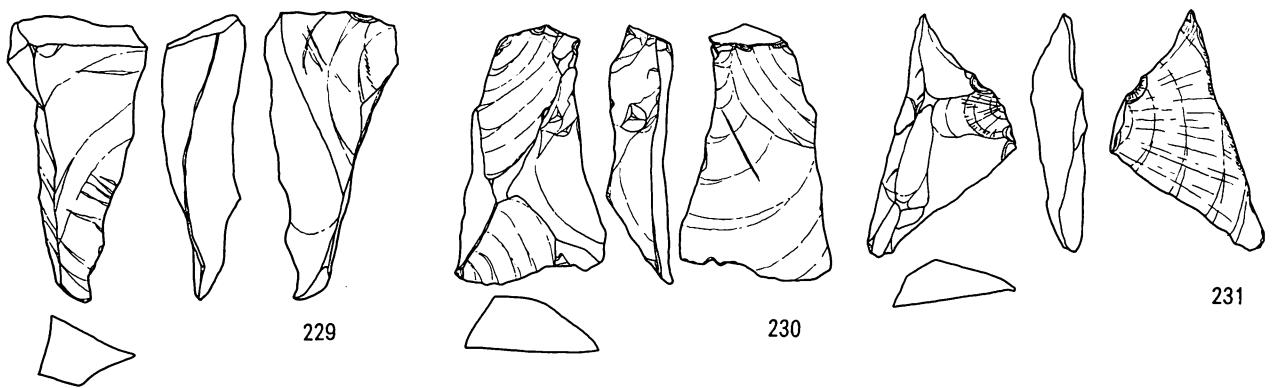
第22図 石器（石鎌・ドリル・石匙）



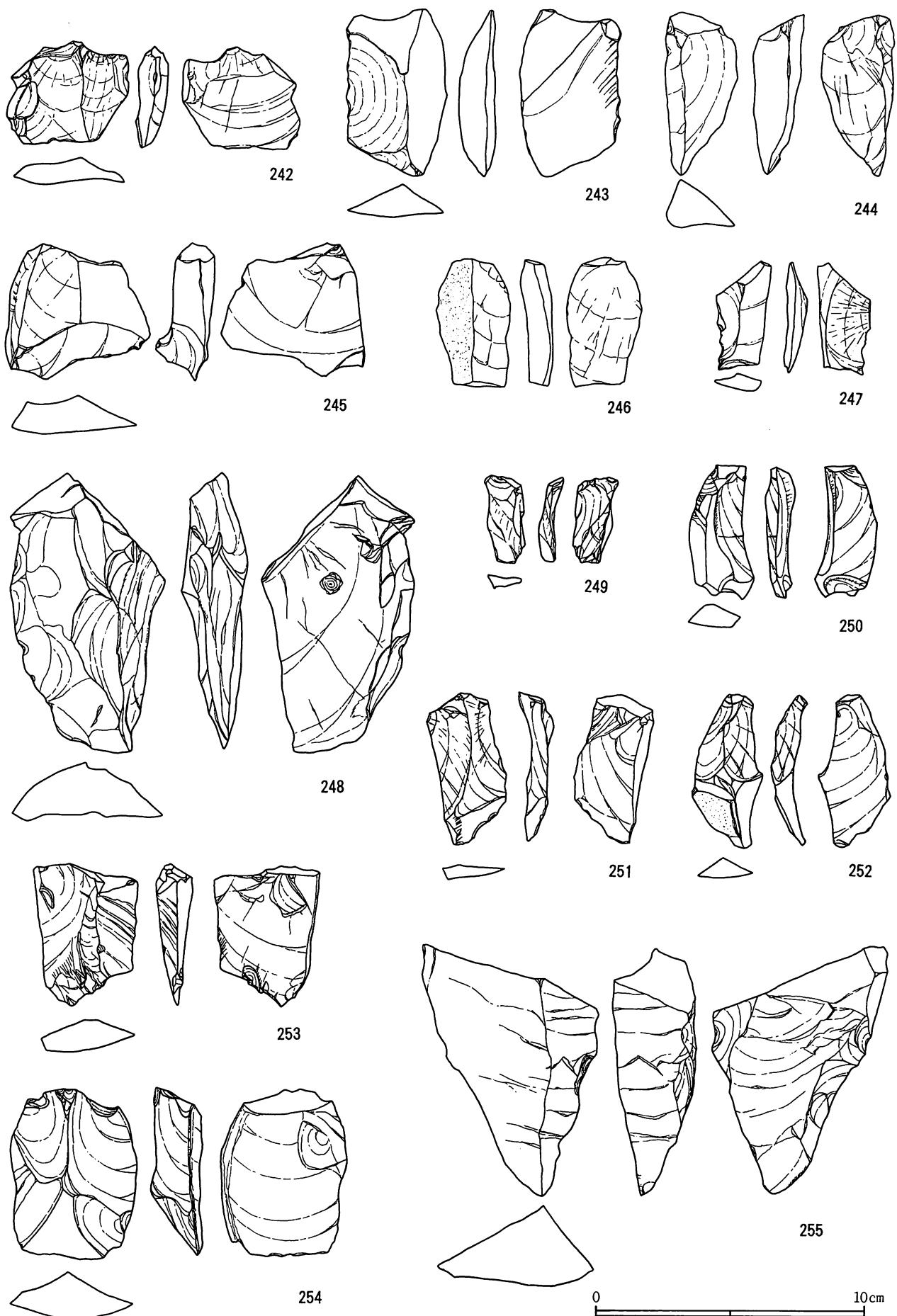
第23図 スクレイパー・加工痕ある剥片



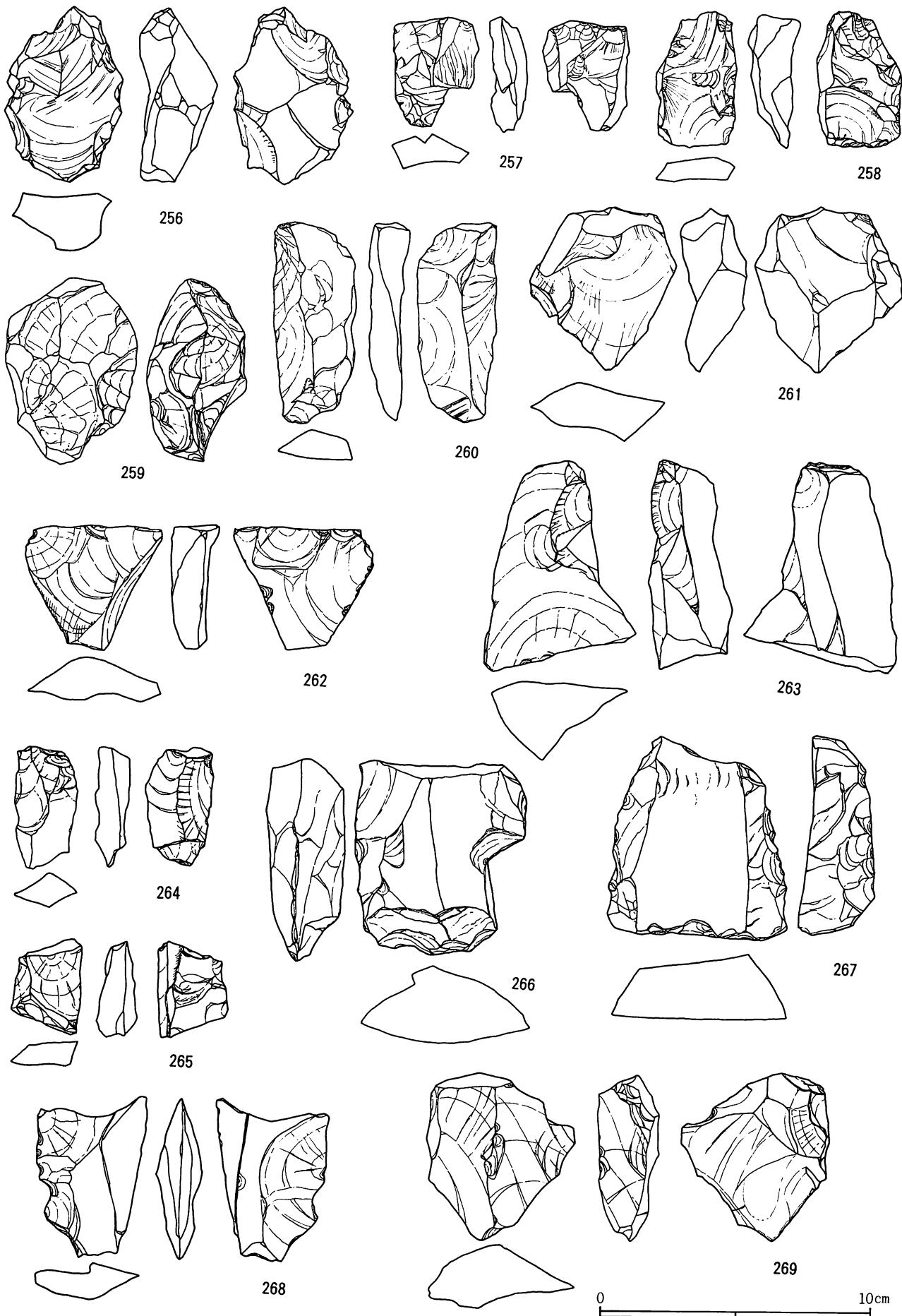
第24図 加工痕ある剥片・剥片



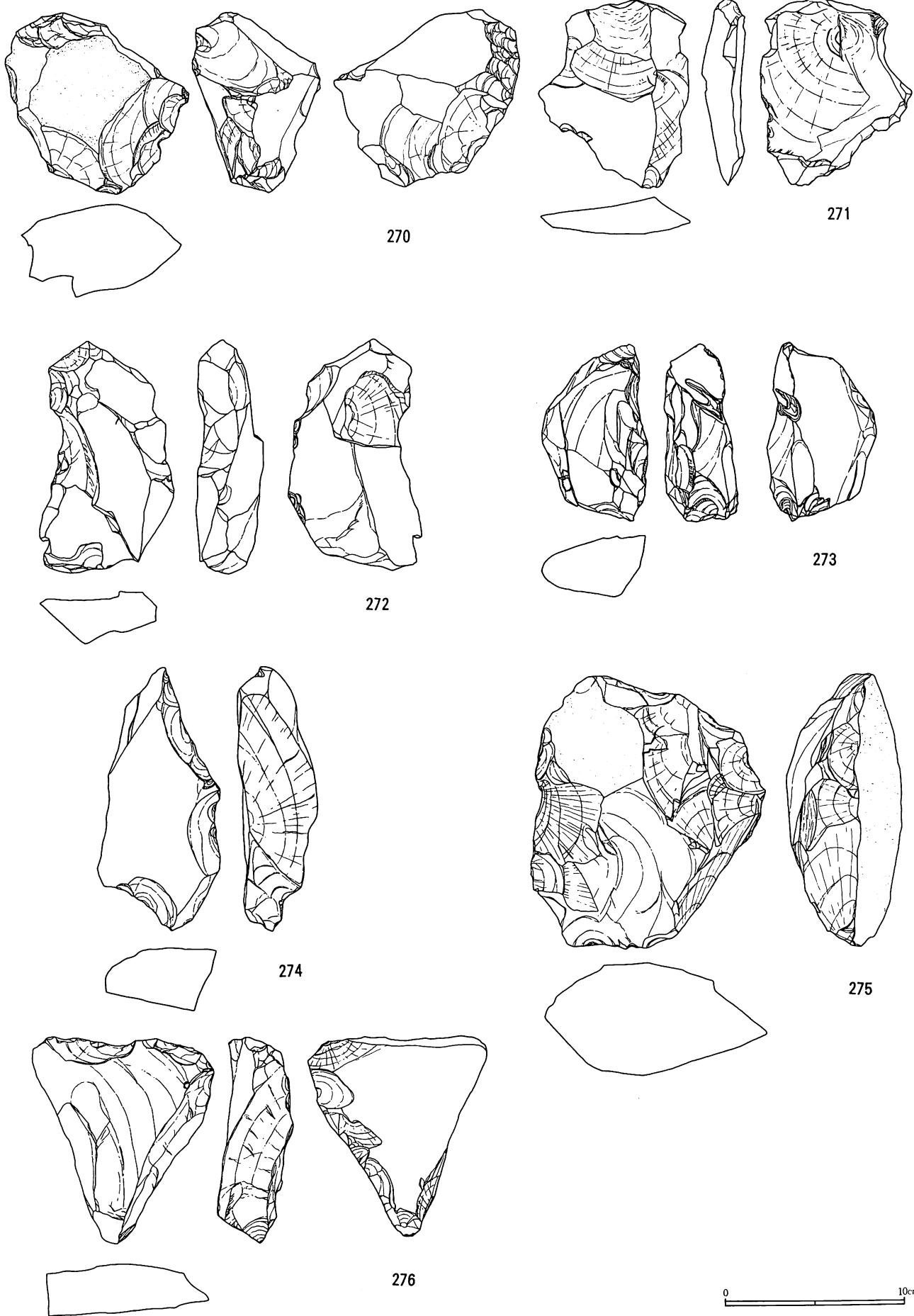
第25図 剥片



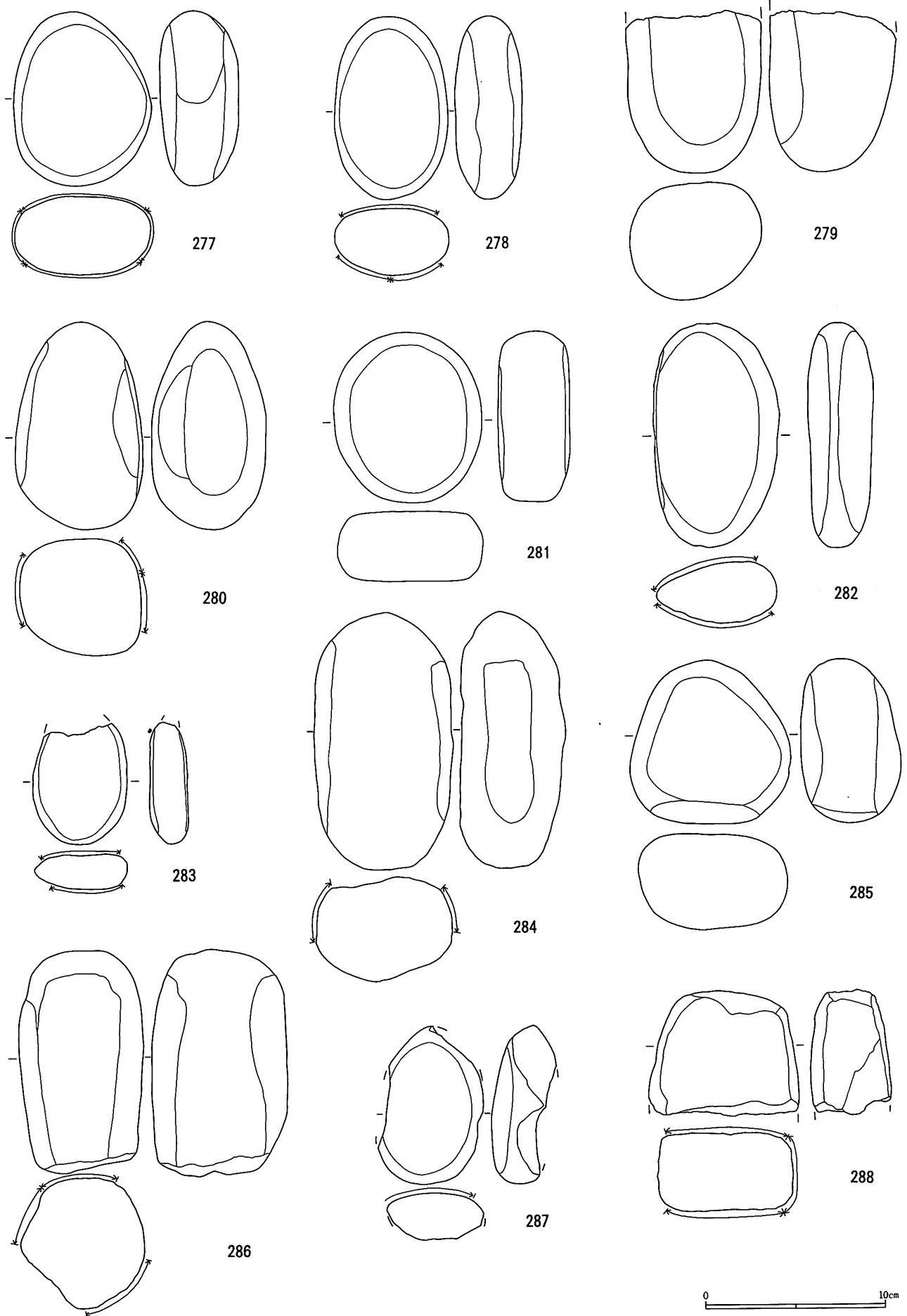
第26図 剥片



第27図 コア

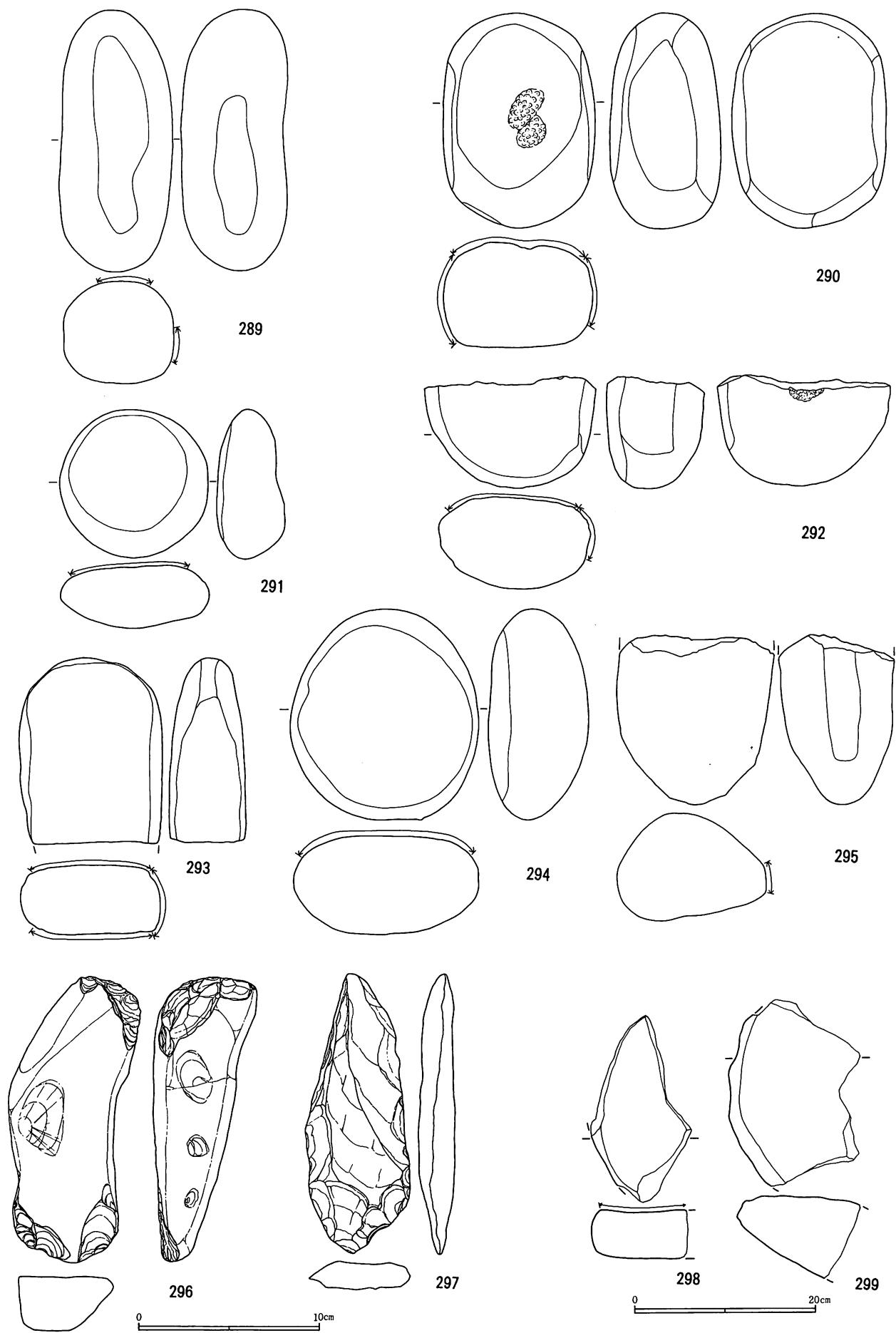


第28図 コア



第29図 石器（磨石）

0 10cm



第30図 石器（磨石・たたき石・打製石斧・石皿）

石器・石製品観察表

図面	番号	器種	出土位置	石材	重量(g)	図面	番号	器種	出土位置	石材	重量(g)
21-	165	块状耳飾り	4住	滑		24-	215	"	6住	泥	10
	166	"	5住	"			216	"	"	砂	32
22-	167	石鏃	4住	黒	0.93		217	"	7住	凝・粘	35
	168	"	"	"			218	"	グリッド	砂	85
	169	"	"	"			219	剥片	4住	凝・粘	6
	170	"	"	頁			220	"	"	"	31
	171	"	"	黒			221	"	"	"	55
	172	"	"	泥	3.58		222	"	"	泥	24
	173	"	5住	黒	0.45		223	"	"	凝・粘	21
	174	"	"	"	0.43		224	"	"	"	18
	175	"	"	"			225	"	"	"	104
	176	"	"	"			226	"	"	"	27
	177	"	"	凝			227	"	"	"	8
	178	"	"	黒			228	"	"	"	24
	179	"	"	"		25-	229	"	5住	粘	46
	180	"	6住	チ			230	"	"	"	37
	181	"	7住	黒	2.13		231	"	"	凝	16
	182	"	"	"	0.32		232	"	"	粘	65
	183	"	8住	"			233	"	"	"	94
	184	"	"	"	0.61		234	"	"	泥	10
	185	"	"	"			235	"	"	粘	10
	186	"	23土	泥	1.26		236	"	"	凝	17
	187	"	グリッド	黒	0.64		237	"	"	凝・粘	92
	188	"	"	"			238	"	"	粘	3
	189	"	"	凝	0.55		239	"	"	頁	24
	190	"	表採	黒			240	"	"	凝	13
	191	"	"	凝			241	"	6住	泥	9
	192	ドリル	4住	黒		26-	242	"	"	凝・粘	15
	193	"	"	"			243	"	"	凝	29
	194	"	6住	頁	14.63		244	"	"	粘	25
	195	"	8住	黒			245	"	"	凝・粘	39
	196	"	"	頁	1.36		246	"	"	頁	13
	197	"	グリッド	チ	0.69		247	"	7住	凝	5
	198	"	"	粘	4.62		248	"	9住	粘	125
	199	石匙	4住	チ	5.29		249	"	21土	泥	2
	200	"	5住	砂			250	"	"	凝・粘	10
	201	"	10住	チ	6.51		251	"	グリッド	粘	11
23-	202	スクレイパー	4住	頁	37		252	"	"	"	10
	203	"	"	粘	20		253	"	"	チ	25
	204	"	"	泥	13		254	"	"	粘	54
	205	"	5住	安	50		255	"	"	"	142
	206	"	"	粘・H	16	27-	256	石核	4住	凝	63
	207	"	6住	泥	162		257	"	"	頁	15
	208	"	グリッド	砂	247		258	"	"	チ	29
	209	加工痕ある剥片	4住	粘	22		259	"	"	凝	120
	210	"	"	泥	42		260	"	"	粘	33
	211	"	"	"	50		261	"	"	頁	53
	212	"	"	緑・泥	19		262	"	5住	凝	37
	213	"	5住	凝	12		263	"	"	砂	102
	214	"	"	緑・凝	4		264	"	"	粘	13

図面	番号	器種	出土位置	石材	重量(g)
	265	"	"	凝	12
	266	"	"	粘・H	156
	267	"	"	砂	152
	268	"	6住	粘	28
	269	"	"	泥	70
28-	270	"	4住	頁	588
	271	"	"	凝	190
	272	"	6住	頁	327
	273	"	8住	凝	280
	274	"	9住	粘	359
	275	"	"	凝	1234
	276	"	10住	泥	416
29-	277	磨石	4住	安	
	278	"	"	"	
	279	"	5住	"	
	280	"	"	"	
	281	"	"	花	
	282	"	"	安	
	283	"	"		
	284	"	"	安	
	285	"	"	"	
	286	"	"		
	287	"	6住	安	
	288	"	8住	花	
30-	289	"	"	砂	
	290	磨石・凹石	9住	花	
	291	磨石	"	安	
	292	磨石・凹石	"	花	
	293	磨石	"	安	
	294	"	10住	"	
	295	"	グリッド	"	
	296	たたき石	9住	砂	
	297	打製石斧	グリッド	粘	
	298	石皿	9住	花	
	299	"	8住	安	

石材凡例 砂・砂岩 泥・泥岩 頁・頁岩 粘・粘板岩
 磕・礫岩 凝・凝灰岩 チ・チャート 緑・緑色岩
 黒・黒曜石 玄・玄武岩 花・花崗岩 蛇・蛇紋岩
 安・安山岩 千・千枚岩 軽・軽石
 H・ホルンフェルス化

第Ⅱ章 揚久保遺跡の調査

第1節 調査状況

1. 調査に至る経緯（中溝遺跡参照）
2. 調査組織（中溝遺跡参照）

第2節 遺跡概況

1. 遺跡の位置

本遺跡は都留市小形山字大原溝上他に所在する。

2. 地理的・歴史的環境

遺跡は山梨県東部、都留市街中心から北東方向に位置し、桂川によって形成された河岸段丘左岸に広がる大原台地奥、標高580mほどの山の山際に位置する。今回、試掘及び発掘調査におよんだ区域は、この山の東側斜面にあたり、更に、その東側には中央自動車道富士吉田線が走っている。遺跡の北西には高川が流れしており、この流域や本遺跡を含む桂川流域では多くの遺跡が調査されている。高川の上流では、高川山の南麓に張り出した洪積台地上に大日影遺跡、大棚遺跡などが存在し、前者では縄文時代前期十三菩提式土器が、後者では古墳時代の住居跡が見つかっている。また、下流域では、中央自動車道建設に伴い調査された中谷遺跡や堀之内原遺跡などが存在している。中谷遺跡では数度にわたる発掘調査で、縄文時代中期から晩期までの遺溝が確認され、特に耳飾りを付けた晩期の土偶は学術的にもよく知られている。また、墨書き土器を出土している堀之内原遺跡の南側には宮脇遺跡も知られている。高川と中央自動車道を挟んで、その周辺に遺跡が点在する桂川流域では、溶岩の流れていない段丘左岸に遺跡は集中するようであるが、中でも大原大地の中央に位置する中溝遺跡は古くから知られている縄文中期の遺跡である。今回、山梨リニア実験線建設に伴い、揚久保遺跡に他に、中谷遺跡・中溝遺跡と周知の遺跡に隣接する区域の調査も行われ、大きな成果が得られている。この他、桂川右岸に存在する九鬼第一・第二遺跡がある。ここもまた、今回のリニア関連で発掘調査が行われた。この他、遺跡の南端には、18世紀末に構築された『二ヶ堰水路』の石組み跡が残っている。現在では水は流れていが当時の面影を残している。

3. 調査方法

今回の調査は、山梨リニア実験線に伴う事前調査として行われたものであり、平成4・5年の2年次に渡って試掘および発掘調査を行った（第31・32図）。平成4年度はAからC区およびH区の試掘調査を行い、その結果からB区についてのみ本調査を行った。平成5年度にはDからH区までの試掘調査を行い、前年度確認されたB区のうち一部が未調査であったことから、これをI区として本調査をおこなった。調査は、光波測量器で設定した座標をもとに、遺溝・遺物とも光波測量器で測定した。グリッドは設定していない。

第3節 遺溝と遺物

1. 土坑

- 1号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。長径1.2m、短径1.15mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ0.23mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 2号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。長径1.0m、短径0.55mの長方形を呈し、東側がテラス状で西側は深さ0.9mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 3号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。長径1.1m、短径1.0mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ0.18mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 4号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。直径0.9mの円形を呈し、確認面からの深さ0.18mを測る。北西側の一部を現代の畑の畝に切られている。遺物がないため、時期は不明。

- 5号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。直径1.25mの円形を呈し、確認面からの深さ0.2mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 6号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。直径1.23mの円形を呈し、確認面からの深さ0.25mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 7号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。直径1.25mの円形を呈し、確認面からの深さ0.07mを測る。4号土坑と同様に北西側の一部を現代の畑の畝によって切られている。遺物がないため、時期は不明。

- 8号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。長径1.05m、短径0.95mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ0.07mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 9号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。一辺が1.9mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは、深いところで0.55m、浅いところで0.23mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 10号土坑（第33図）

B-1区北側に位置する。長径0.65m、短径0.5mの円形を呈し、確認面からの深さ0.23mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 11号土坑（第33図）

B－1区南側に位置する。長径1.5m、短径0.22mの長方形を呈し、確認面からの深さ0.35mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 12号土坑（第33図）

B－1区南側に位置する。直径1.2mの円形を呈し、確認面からの深さ0.1mを測る。遺物がないため、時期は不明。

- 13号土坑（第33図）

C区に位置する。長径1.82m、短径1.27mの楕円形を呈し、確認面から1.05mの深さで一端テラスを作り、底から2本のピットをあてている。ピットは0.3mと0.15mの2本で、深さはほぼ0.2mである。形状からこの土坑は陥穴と推定される。遺物がないため、時期は不明。

- 14号土坑（第33図）

I区に位置する。直径2.15mの円形を呈し、確認面から深さ0.63mを測る。遺物がないため、時期は不明。

2. その他の遺溝

- 1号溝（第33図）

B－1区南側に位置する。長軸4.33m、短軸0.65～1.15mで、確認面からの深さは0.09mを測る。遺物がないため、時期は不明。

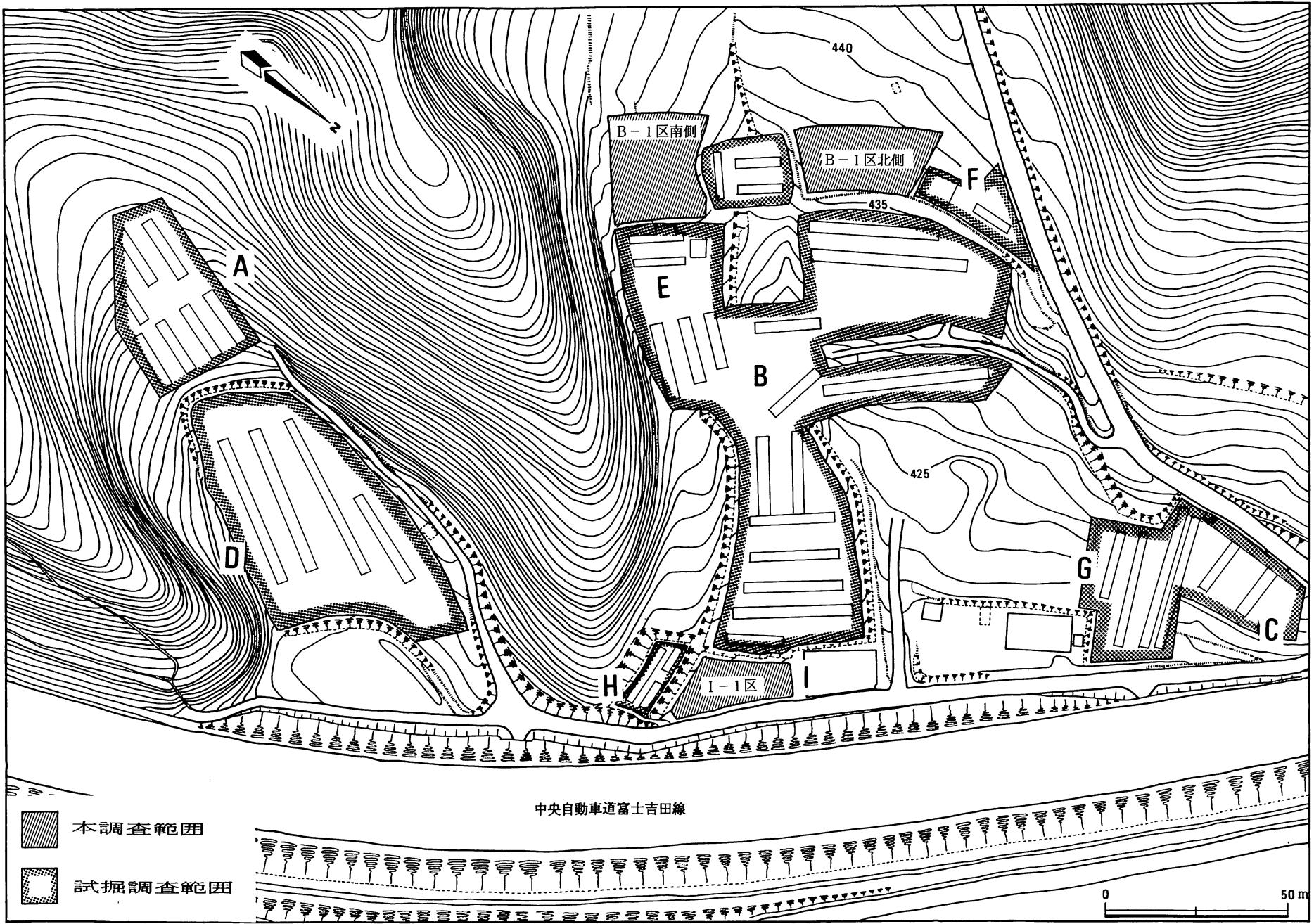
- 掘建柱状建物跡（第33図）

B－1区南側に位置する。直径0.3～0.35m、深さ0.07mの小穴が規則的に並んでいる。北に5基、南に4基、その間に2基検出できた。小穴の間隔は、0.9～1.0mで調査区外に続く。遺物がないため、時期は不明。

3. 遺溝外出土遺物

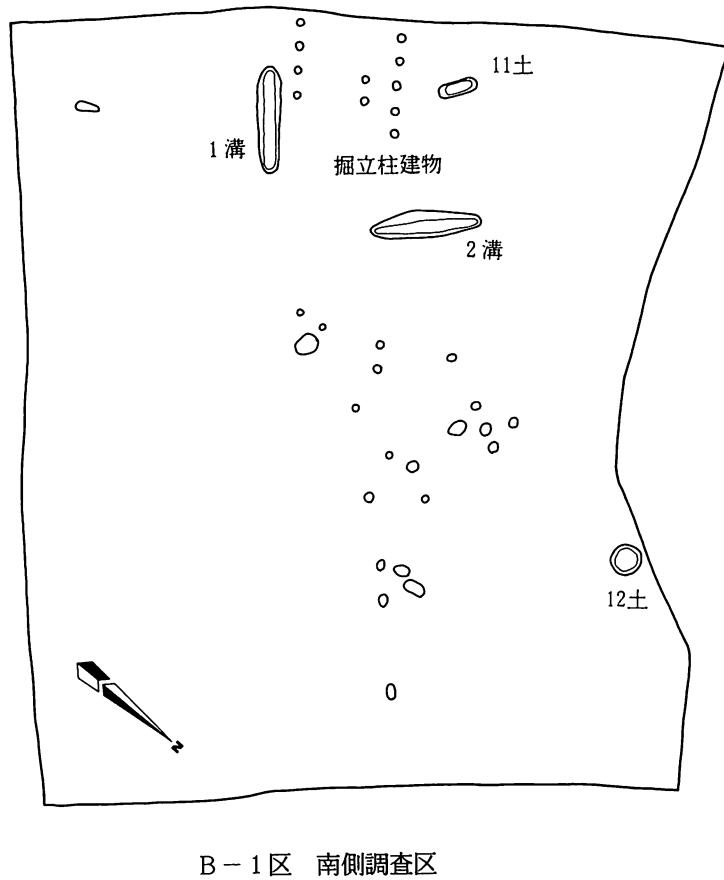
今回の調査では、遺溝に伴う遺物は確認できず、掲載した土器・石器はすべてB－1区の遺溝外出土遺物である。第34図1～5は諸磯b式に属するもので、1は地文にL Rの単節縄文が施され、2～5は縄文を地文とし半截竹管による平行沈線文が施されている。6～8は諸磯c式に属し、結節状浮線文と円形貼付文が施されている。9は隆帯に区画された中を串状施文具で綾杉状に文様を施したあと、懸垂文を施している。10・11は単節縄文で9より古く、藤内式期に位置づけられる。12は9と同様曾利式である。13・14は口縁部で無文の深鉢である。15・16・18は深鉢の胴部で沈線で区画されたなかを施文している。17は注口土器の胴部で櫛目状工具による施文がある。19は底部で網代痕がある。20は深鉢の口縁部で器面がよく磨かれており、ススが付着している。21～23は平行沈線で区画された中に縄文を施文している。これらは堀之内式～加曾利B式に位置付けられるよう。24～26は羽状沈線が施文され、加曾利B式以降である。石器は、打製石斧・磨石・凹石・石匙・加工痕のある剥片等（第35図）で出土数が少なく、種類も限られている。

第31図 調査全体図

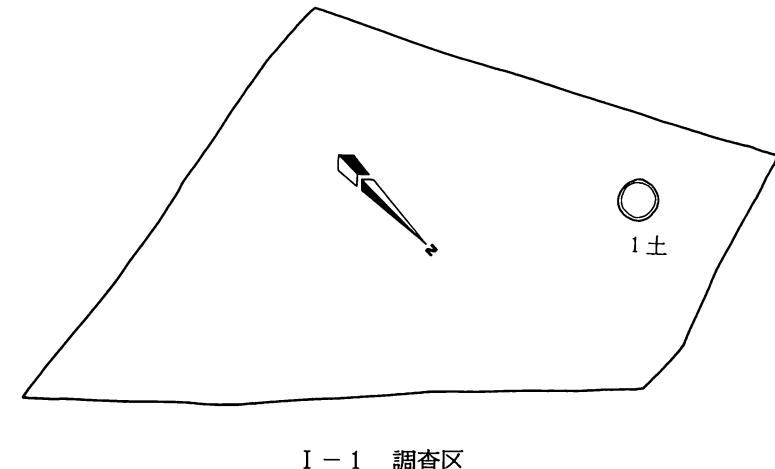
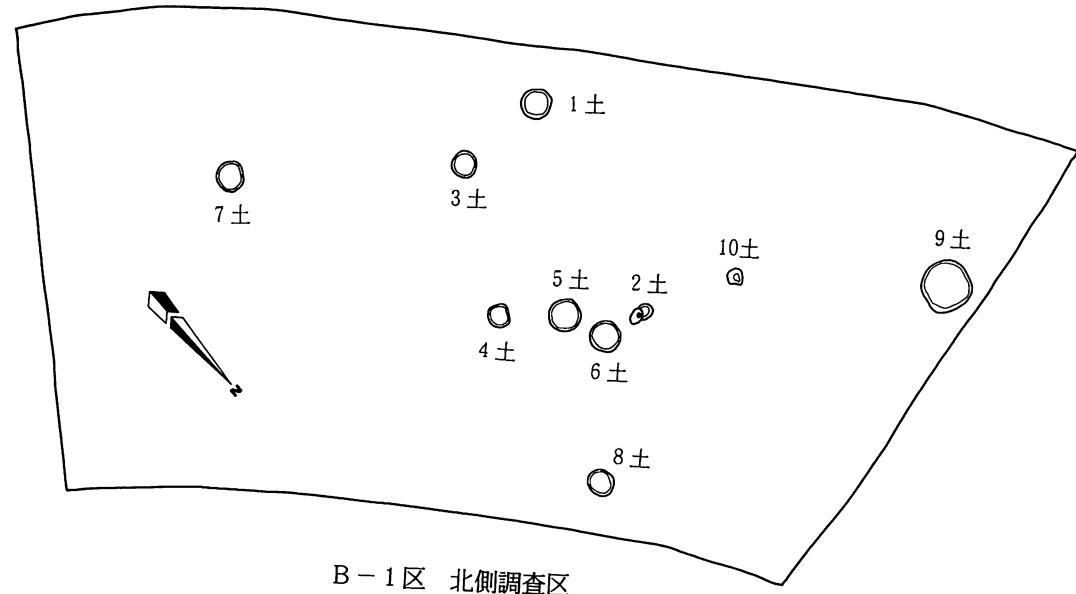


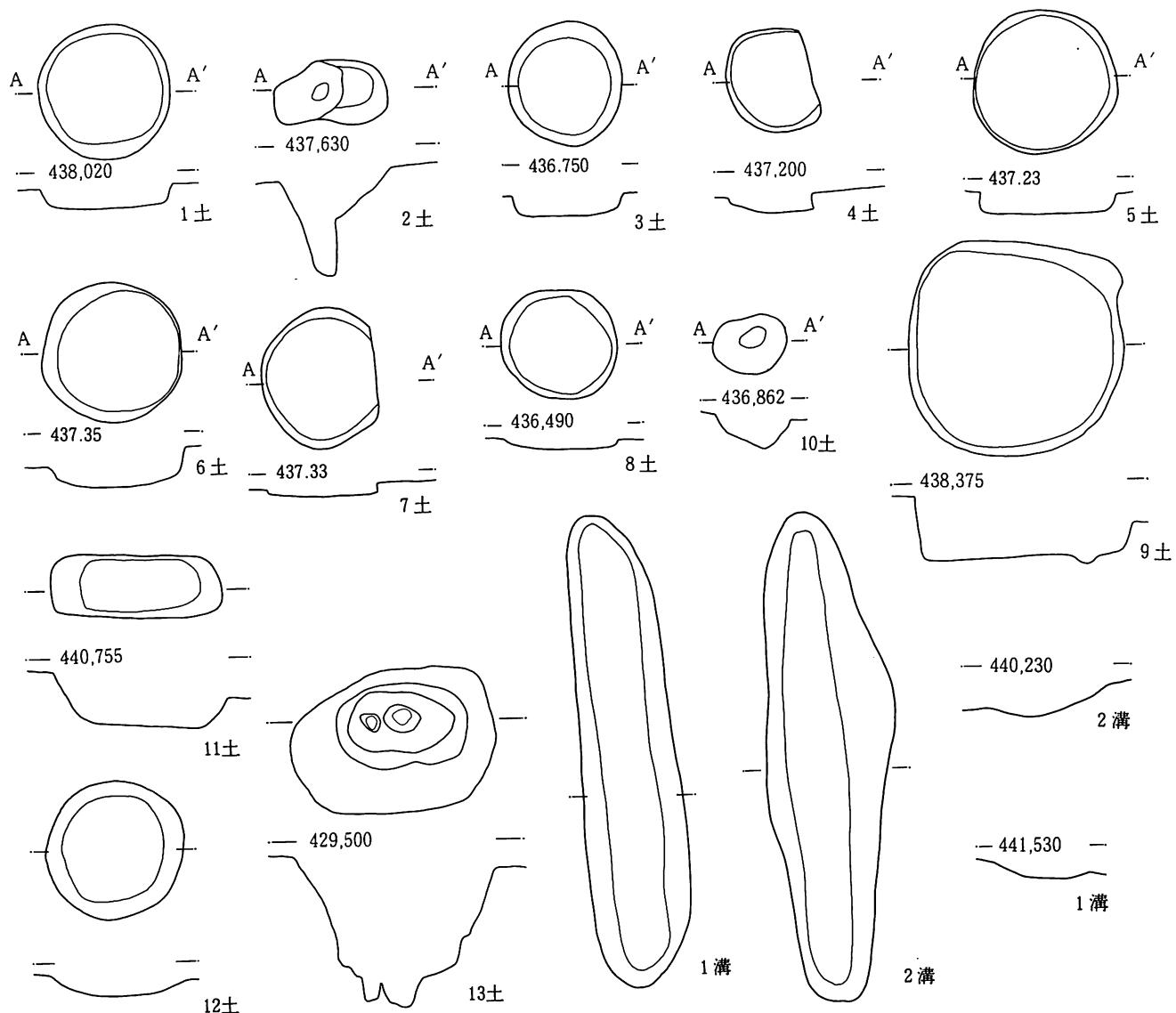
第32図 遺構配置図

— 45 —

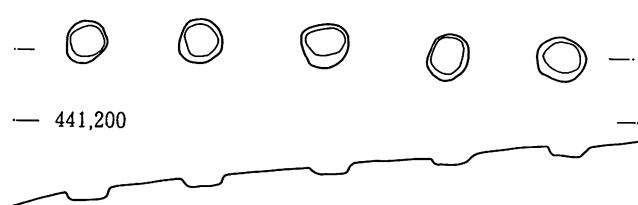


0 20m





掘立柱建物



第33図 各遺構

I …暗褐色粘質土
II …暗褐色粘質土
III …暗褐色粘質土
IV …暗黃褐色粘質土
V …暗黃褐色粘質土
VI …暗黃褐色粘質土

0 2m



1



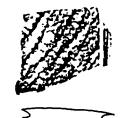
2



3



4



5



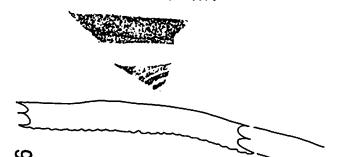
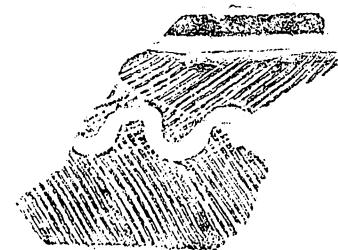
6



7



8



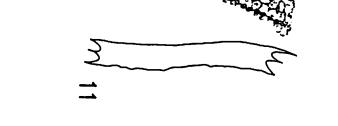
9



10



11



12



13



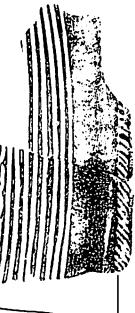
14



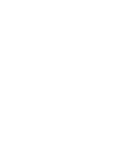
15



16



20



21



22



23



24



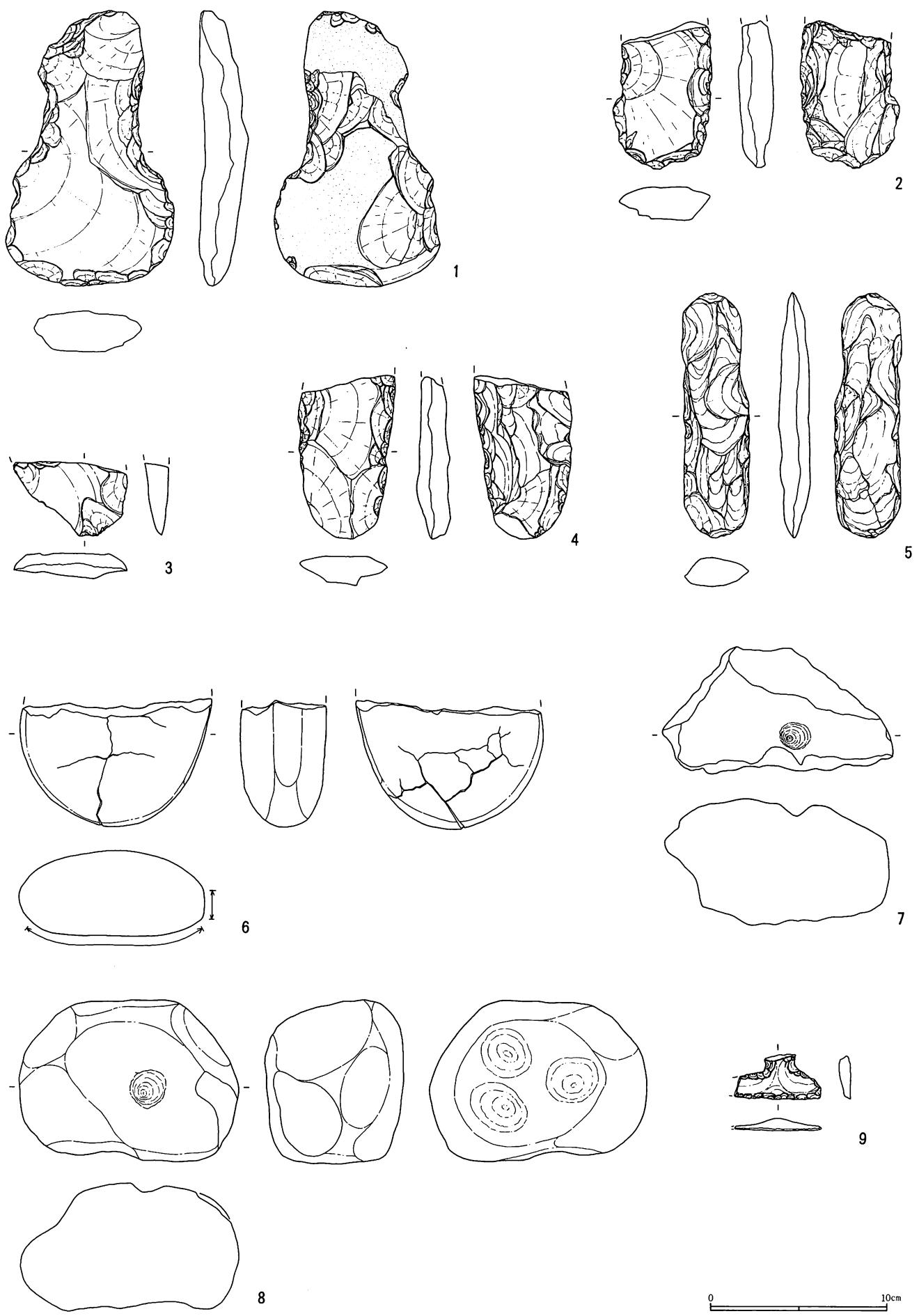
25



26

0
10cm

第34図 出土土器



第35図 出土石器

第Ⅲ章 考 察

第1節 中溝遺跡から出土した炭化植物について

松谷 晓子

試料（一覧表・図版14～16）

都留市中溝遺跡から出土した炭化植物は、縄文時代早期末～前期初頭の住居跡5軒と奈良・平安時代の土坑7カ所から出土している。

方法

ほとんどの試料は、実体顕微鏡による外形の観察と写真撮影を行ったが、一部の試料については走査型電子顕微鏡により、微細構造の観察を行った。

観察結果

縄文早期末～前期初頭の住居跡から出土した炭化種子は、縦方向に溝が8～10本くらい認められ、高さ3～4ミリ、幅5～6ミリで幅のほうが高さよりも大きく、側面観や上面観が楕円形をしているものが多い（図版14-1～6）。これらはミズキ科のミズキ類の内果皮（核）と考えられる。先端の尖ったものと尖っていないものがあり、大きさにも変異がある。ミズキ属にはミズキとクマノミズキがあり、小さいものでは、クマノミズキが混在している可能性も考慮したが、現生標本と比較したところ、どれもミズキのようである。破片になったものも、表面の溝状の構造や、裏面の様子からミズキと判断される。その他、外形から球根と考えられるものが一点あり（図版14-8）、走査型電子顕微鏡で観察を行った（図版16-19）。実体顕微鏡での観察では不明と考えたもの（図版14-7）も二分したものを走査型電子顕微鏡で観察を行ったところ、ユリ科の球根の鱗片と考えられる構造が観察された（図版16-20）。

奈良・平安時代の土坑から出土した炭化物の中では、球根類と考えられるものが多かった。同心円状の断面を示しているもの（図版15-11～12）と、同心円状ではなく、外形が球根状のもの（図版15-13～15）があり、後者の方が多かった。球根と考えられる炭化物の直径は3ミリ～11ミリくらいまで、長さは6～14ミリの変異がある（一覧表）。直径10～11ミリで球形のものは、ノビルの可能性が考えられる。直径よりも長さの方が大きいものは、小さいものに多い。それらの内の一つ（18土坑C3）を走査型電子顕微鏡で観察したところ、鱗片が重なっている球根と判断される構造が確認できた（図版16-21）。しかし、実体顕微鏡で球根と判断されるこれらが、すべて同じ種類なのか、あるいは複数の種類が混在しているのかは今の所なんともいえない。

実体顕微鏡下で、外形からマメの子葉と考えられる炭化物が1点あった（図版15-16）。大きさは、長さ6.5ミリ、幅4ミリ。その他、二分していくと合わせると8×5ミリくらいの楕円形と推察される。実体顕微鏡では不明の炭化物も、走査型電子顕微鏡で観察したところ、マメではないかと考えられるものがあった（図版16-22）。破損していて内部は黒く光っているが、本体は楕円形の5×3ミリくらいのものに、何か付着していると考えられる炭化物があり（図版15-17）、走査型電子顕微鏡で観察を行ったところ、マメのへそと考えられるものが観察された。へその長さは2ミリ、幅は1ミリであるが、このように楕円形で幅広いへそを持つマメは、ダイズあるいは野生種のツルマメということになる（図版16-23）。

2点は不明として残る。一つは、長さ9ミリ、幅4ミリの炭化種子で両端が尖っている（図版15-18）。もう一つは8×9ミリくらいで破損が著しいのでドングリの可能性も考えられるが、同定はできない（図版14-9）。

結論

縄文時代早期末～前期初頭の住居跡から出土した種子はミズキ類の核が大部分である。破片のため確実ではないものも含めて数えると、4住17点、5住11点、6住1点、7住8点で合計37個になる。量は様々であるとはいえ、5軒の住居のすべてから出土している。4住からは球根と考えられる炭化物も2点出土している。

奈良・平安時代の土坑から出土した炭化物は、球根状のものが多く、他にはモモの核と考えられるものが1点

あった。マメ類ははっきりしないものも含めて3点見いだされたが、そのうち1点は、ヘその形から、ツルマメあるいはダイズと思われる。ドングリに似たものもあるが、はっきりしない。14土坑と18土坑では球根状の炭化物の数がそれぞれ18点と16点で、13土坑と17土坑から2点、9土坑から2点、10土坑から1点となる。

考察

ミズキについて

縄文時代の遺跡からのミズキの核の出土はこれまでにも報告がある。静岡県の縄文早期後半の元野遺跡では貯蔵穴状のピットからミズキの内果皮が多数出土している（粉川1982）。山梨県でも縄文前期後半の花鳥山遺跡の8号住居跡と9号住居跡から合計207粒が数えられている（笠原・藤沢1989）。中溝遺跡は花鳥山遺跡よりも時代がやや古い早期末～前期初頭であるが、やはり住居跡から出土している。現在では鳥がよく食べるが、人の食べる果実とはいえない。しかし、縄文時代には良く利用されていたと考えられる。

球根について

縄文時代の遺跡からの球根類は、近年出土例が増えている。山梨県でも水呑場北遺跡（松谷1989）、花鳥山遺跡（渡辺1989、松谷1989）、獅子之前遺跡（松谷1991）、などがあり、他県では、福井県鳥浜遺跡（西田1979）、石川県米泉遺跡（松谷1992）、岡山県岡山大学構内遺跡（松谷1994a）などで、炭化球根あるいは土器付着物として出土しており、ユリ科またはユリ科ネギ属の球根として報告されている。平安時代の遺跡からの球根は、獅子之前遺跡からも出土している。縄文時代の球根類の種類の同定には、ノビルとの同定が二例（渡辺1975）、ヒガンバナ科のキツネノカミソリという同定が1例（小島・浜口197）ある。ノビルの出土は弥生時代の遺跡からも報告されている（柿本・池永1973）。観察結果の所で述べたように、直径が10ミリ位で球形のものはノビルの可能性が高い。

ダイズについて

遺跡からのマメ類の出土は少ないと見えるが、ヘその部分が残っているマメは比較的少ない。マメの識別にはヘその形態が大切なので、マメの種類の同定は困難なことが多い。中溝遺跡の奈良・平安時代の土坑（18号土坑）から出土した炭化物にダイズまたはツルマメのヘそに似たマメが見いだされた。小さいので野性のツルマメなのかもしれないし、奈良・平安時代なのであるいは小さいダイズなのかもしれない。平安時代のダイズと考えられる炭化したマメの例としては、茨城県武田西塙遺跡99A住から出土したマメがあるが、これらの粒の長さは6～8ミリで、ヘその長さは2.5～3ミリ、ヘその幅は1.5ミリであった（松谷1993）。また、八戸市根城跡岡前館から出土したマメでダイズと考えられるものは、長さ7.3～7.7ミリくらいで、ヘその長さは、2.3～2.6ミリ、ヘその幅は、1.5～1.7ミリであった（松谷1994b）。いずれも炭化による変形が著しいものであるが、これらに比べると中溝遺跡のダイズ類似マメはやや小さいと言える。

文献

- 柿本春次・池永孝生 1973 山口県下松市宮原遺跡・上広石遺跡。山口県埋蔵文化財調査報告20。
- 笠原安夫・藤沢 浅 1989 花鳥山遺跡出土の炭化種実塊ならびに微小種子の同定。「花鳥山遺跡・水呑場北遺跡」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告45：129～136。
- 小島弘義 1977 上ノ入遺跡炭化球根。どるめん13、90～95。
- 粉川昭平 1982 縄文時代の植物－主として果実・種子を中心にして－。日本の美術199：87～94。
- 松谷暁子 1989 水呑場北遺跡出土土器付着球根状炭化物の識別について。「花鳥山遺跡・水呑場北遺跡」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告45：143～145。
- 松谷暁子 1991 獅子之前遺跡出土植物遺残について。「獅子之前遺跡発掘調査報告書」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告61、102～103
- 松谷暁子 1992 米泉遺跡出土土器付着物の走査型電子顕微鏡による観察。石川県立埋蔵文化財センター年報12、143～152。
- 松谷暁子 1993 武田西塙遺跡（1992）出土植物遺残について。「武田VI」（財）勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告8集、108～117。

- 松谷暁子 1994 a 津島岡大（第5次調査）出土土器内面付着物について。「津島岡大遺跡4－第5次調査」、岡山大学構内遺跡発掘調査報告7、243～248。
- 松谷暁子 1994 b 根城跡岡前館から出土した炭化穀類等について。八戸市埋蔵文化財調査報告書60集、191～194。
- 西田正規 1979 植物遺体。鳥浜貝塚－縄文前期を中心とする低湿地遺跡の調査。福井県教育委員会、158～161。
- 渡辺 誠 1975 縄文時代の植物食。雄山閣。

写真説明

図版14 縄文時代早期末～前期初頭住居跡および奈良・平安時代土坑から出土した炭化物の実体顕微鏡写真（白いスケールは1mm）

- 1 上面観が橢円形のミズキ内果皮：7住D5
- 2 側面観が橢円形のミズキ内果皮：4住D8
- 3 上方先端が尖っているミズキ内果皮：6住
- 4 縦長のミズキ内果皮：4住C6
- 5 小型のミズキ内果皮：8住炉
- 6 小型のミズキ内果皮：5住B12
- 7 SEMで球根と判断された炭化物：4住C66
- 8 球根：4住G4
- 9 不明：11土坑C3
- 10 桃の核：18土坑C1
- 10a 同上裏面

図版15 奈良・平安時代の土坑から出土した炭化物の実体顕微鏡写真（続）（白いスケールは1mm）

- 11 同心円状構造を示す球根断面2点：9土坑C1
- 12 斜めの同心円状構造を示す球根状炭化物：14土坑C29
- 13 球根状炭化物で太いもの：18土C11
- 13a 拡大写真
- 14 球根状炭化物：18土C20
- 15 球根状炭化物：18土C17
- 16 マメ：18土坑C32
- 17 ダイズ？：18土坑C14
- 18 不明：14土坑C13

図版16 縄文時代の住居跡および奈良・平安時代の土坑から出土した炭化物の走査型電子顕微鏡写真

- 19 球根鱗片状炭化物：4住G4
- 19a 中央部拡大写真
- 19b 中央部左寄り部分拡大写真
- 20 球根状炭化物全形：18土坑C3
- 20a 中央部下方部分拡大写真
- 20b 左方拡大写真
- 21 球根状炭化物：4住C66（写真7と同じものの半分）
- 21a 中央右寄り部分拡大写真
- 22 二分した炭化物（マメ？）：14土坑C27
- 22a 上左部拡大写真
- 23 ダイズ？18土坑C14

中溝遺跡から出土の観察を行った炭化植物試料一覧表

時代	遺構	試料番号	同定結果	大きさ
縄文時代	4住	B 5	ミズキ	4×4ミリ
早期末～		C 6	ミズキ	4.5×4ミリ（写真4）
前期初頭		C 8	ミズキ	4×4.5ミリ
住居址		C 6	球根	（写真7、写真21）
		D 5	ミズキ	5×6ミリ
		D 6	ミズキ	3個 3.5×3.5、3×4、3×3.5ミリ
		D 7	ミズキ	3個 3×3.5、3.5×3.5、3×4ミリ
		D 8	ミズキ	4×4ミリ（写真2）
		E 4	ミズキ	破損
		E 6	ミズキ	2個 3.5×3.5、3×3.5ミリ
		F 5	ミズキ	3.5×4ミリ
		F 8	ミズキ	3.5×3.5ミリ
		F 9	ミズキ	3×3.5ミリ
		G 4	球根	（写真8、写真19） 5×3ミリ
	5住	A 3-30cm	ミズキ	3×5ミリ
		A 4-35cm	ミズキ	2.5×3ミリ
		A 4-40cm	ミズキ	
		A 16-25cm	ミズキ	2.5×3ミリ
		B 8-25-30cm	ミズキ	3×4ミリ
		B 10-40-45cm	ミズキ	3×4ミリ
		B 12-40-45cm	ミズキ	3×3.5ミリ（写真6）
		C 5	ミズキ	破損
		C 6	ミズキ	破損
		C 18	ミズキ	破損、径4ミリ
		C 41	ミズキ	5×3ミリ
	6住	25-30cm 3	ミズキ	4×5ミリ（写真3）
	7住	C 1	ミズキ	3×4ミリ
		D 2	ミズキ	3.5×4.3ミリ
		D 4	ミズキ	3点 4×5、4×4ミリ、2.5×2.5ミリ
		D 4	ミズキ	
		D 5	ミズキ	3.5×4.5ミリ（写真1）
		E 6	ミズキ	3.5×4ミリ
	8住	炉内	ミズキ	4×3ミリ、先端とがる（写真5）
平安時代	9土	C 1	同心円状球根	長さ10×直径10ミリ（写真11）
		C 3	球根状炭化物	長さ9×直径7ミリ
	10土坑	C 2	球根状炭化物	7×5ミリ
	11土坑	C 3	不明	9×8ミリ（写真9）
	13土坑	C 1	球根状炭化物	8×4ミリ
		C 2	球根状炭化物	5×3ミリ

時代	遺構	試料番号	同定結果	大きさ
		C 3	球根状炭化物	5.5×2.5ミリ
14土坑	C 1	球根状炭化物	6×4ミリ	
	C 2	球根状炭化物	6×4ミリ	
	C 5	球根状炭化物	7×7ミリ	
	C 6	球根状炭化物	5×2.5ミリ	
	C 8	同心円状球根破片	直径6ミリ	
	C 10	球根状炭化物	8×6ミリ	
	C 11	球根状炭化物	10×6ミリ	
	C 12	球根状炭化物	7×4ミリ	
	C 13	不明	(写真18)	
	C 15	球状球根	10×9ミリ	
	C 17	球根状炭化物	10×8ミリ	
	C 18	球根状炭化物	9×8ミリ	
	C 19	球根状炭化物	8×6ミリ	
	C 20	球根状炭化物	10×8ミリ	
	C 21	球根状炭化物	10×8ミリ	
	C 22	球根状炭化物	11×7ミリ	
	C 24	球根状炭化物	9×4ミリ	
	C 25	球根状炭化物	14×11ミリ	
	C 27	マメ?	(写真22)	
	C 29	同心円状球根	8×8ミリ (写真12)	
17土坑	C 1	球根状炭化物	10×10ミリ	
	C 2	球根状炭化物	10×8ミリ	
	C 5	球根状炭化物	8×4ミリ	
奈良時代? 18土坑	C 1	桃の核	16×8ミリ (写真10)	
	C 2	球根状炭化物	12×7ミリ	
	C 3	球根状炭化物	14×8ミリ (写真20)	
	C 4	球根状炭化物	7×3ミリ	
	C 7	球根状炭化物	11×5.5ミリ	
	C 9	球根状炭化物	14×5ミリ	
	C 11	球根状炭化物	12×10ミリ (写真13)	
	C 12	球根状炭化物	10×6ミリ	
	C 14	ダイズ?	5×3ミリ (写真17、写真23)	
	C 15	球根状炭化物	6×4ミリ	
	C 17	球根状炭化物	16×11ミリ (写真15)	
	C 18	球根状炭化物	10×7ミリ	
	C 20	球根状炭化物	10×9ミリ (写真14)	
	C 23	球根状炭化物	9×6ミリ	
	C 24	球根状炭化物	7×3ミリ	
	C 25	球根状炭化物	6.5×4ミリ	
	C 28	球根状炭化物	13×5ミリ	
	C 31	球根状炭化物	10×6ミリ	
	C 32	マメ	(写真16)	

第2節 中溝遺跡における炭化物の年代測定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中溝遺跡では、縄文時代早期末～前期初頭の住居跡が検出され、中からは構築材などの可能性がある炭化材が出土している。本地域における縄文時代の年代については、中谷遺跡の縄文時代の集石で行った放射性炭素年代測定で $4,630 \pm 100$ y.B.P.～ $5,120 \pm 110$ y.B.P.という値が得られている。

本遺跡では、縄文時代早期末～前期初頭の住居跡から出土した炭化材を対象として放射性炭素年代測定を行い、その年代を確認する。

1. 試料

試料は、4号住居跡および5号住居跡から採取された炭化材各1点である。

2. 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3. 結果

測定結果を以下に示す。

中溝遺跡の放射性炭素年代測定結果

遺構名・試料番号	試料の質	年代（1950年よりの年数）	Code No.
4号住居跡 C-9	炭化物	$5,590 \pm 130$ y. B. P. (3,640B. C.)	Gak-18815
5号住居跡 C-4	炭化物	$6,990 \pm 300$ y. B. P. (5,040B. C.)	Gak-18816

・年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用した。

4. 考察

山梨県内の縄文時代遺跡で年代測定を行った例は少ないが、隣接する関東地方では資料が豊富に蓄積されている（キーリ・武藤、1982）。これを参照すると、今回中溝遺跡で得られた測定値のうち、4号住居跡は縄文時代前期、5号住居跡は縄文時代早期末にそれぞれ相当する。試料とした炭化材の出土状況や出土土器の時期などを改めて吟味したうえで述べるべきではあるが、両住居跡がいずれも縄文時代早期末～前期初頭の土器を伴うとすれば、4号住居跡はやや新しい年代値が得られたことになる。

〈引用文献〉

キーリ・C. T. ・武藤康弘（1982）縄文時代の年代、加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」、p.246-275、雄山閣出版。

第3節 縄文時代早期末～前期初頭の土器について

今回、本遺跡では縄文時代早期末～前期初頭の住居跡7軒が調査され、各住居跡から厚手（含繊維、無繊維）の下吉井式と薄手（無繊維）の木島式土器片が出土している。また、遺構外からも同時期の土器片が出土した。本稿では、県内でもこれまで確認例の少ない該期の土器について、他遺跡例と比較し、時間的位置付けやその変遷について触れてみたい。

前章第1節で概要を述べた各住居跡の状況を、有文のものに限定したうえで下吉井式と木島式と対比して並べ換えたものが第36図である。各住居跡の資料は左側に下吉井式を、右側に木島式を配置した。

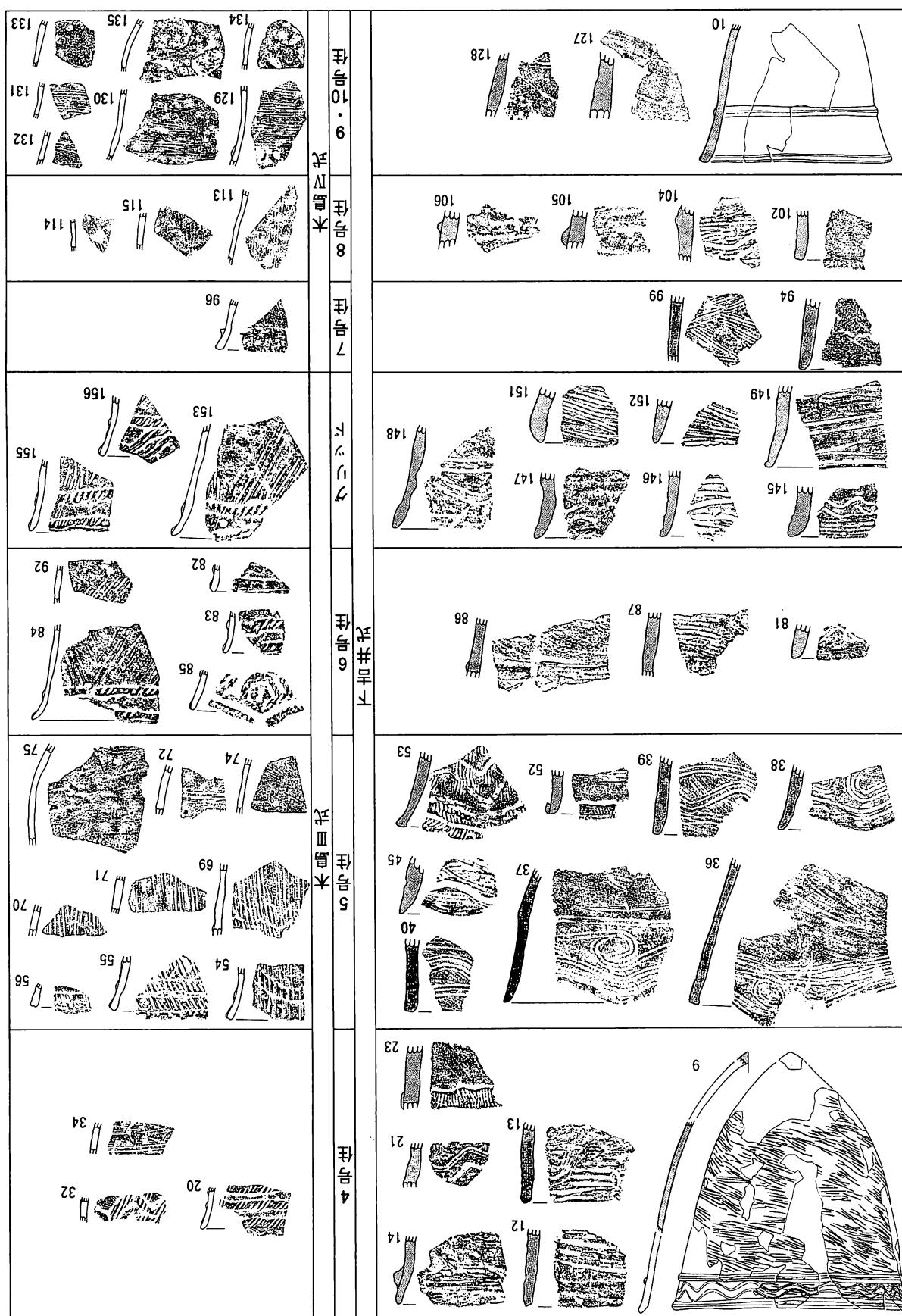
下吉井式は口縁部に半截竹管による平行沈線を波状に施文するものが4号～6号・8号住居跡などに多くみられる。4号住居跡では口縁部のタガ状隆帯下に半截竹管による波状沈線の施文されるもの（9）とされないもの（14）との2種類がある。これらの器面は貝殻による条痕が全面に施される。5号住居跡では沈線が波状のもの（39・40・45）が確認されるほか、波状口縁の波頂部に沈線を巴状に入り組ませて施文するものや円形に施文するものなど（36～38）もみられる。36～38は施文具が半截竹管であるが、これを縄に材質転換すれば花積下層式のモチーフと見做すことができ、その意味では、これらの資料から花積下層式への連続性を指摘できると同時に、あらためてこれらが花積下層式に先行する一群であることを認識できよう。なお、数は少ないものの結節を意識して沈線施文したものが4号住居跡、5号住居跡の資料中（53・12・61）に数は少ないものの見受けられる。また、隆帯上や口唇部に貝殻による圧痕を連続施文したものも4号・5号住居跡で確認される（23・52・53）。

下吉井式のもう一つの特徴であるタガ状隆帯を口縁部や体部に有するものは、遺物出土量の少ない7号、9号以外のすべての住居跡で確認される。しかし、隆帯はすべて横方向に限られ、口縁部から垂下する隆帯は一例も確認されていない。

繊維はほとんどすべての土器片に含まれているが、110は全く含まない。ただし繊維の含有量には極端な差があり、微量の繊維を含むものがほとんどである。多量の繊維を含むものは断面に濃いスクリントーンを貼付し示したが、その量は少ない。

今回の出土資料中には胎土に特徴的なものがある。木島式には全く見られないが、下吉井式のうち36・37・39・41・65・98・101・127の8片に白色の棒状物質が確認された。とくに36・37には顕著である（図版9下）。この物質は、先学により動物珪酸体と呼ばれる海水中に生息する海綿動物の骨針であることが明らかにされている。千葉県や東京都など東京湾岸では縄文土器から須恵器・土師器まで、胎土にこの海綿体骨針が含まれていることが指摘されている^{1,2)}。なかでも、縄文時代早期末の土器群においては、下吉井式にこれらが特に顕著であることが指摘され、他の土器との分類に際しメルクマールにさえされている。これを報告した小薬一夫によれば、神奈川県東部から東京都、埼玉県の湾岸から多摩丘陵にかけて分布する下吉井式や他の条痕文系に確認されているとのことである³⁾。千葉県や神奈川県西部、あるいは山梨県、静岡県の複数の遺跡も同時に資料調査しているものの、その時点では確認されていない。山梨県では、出土例が少ないとあるが、釣迦堂遺跡群塚越北遺跡、同三口神平遺跡、勝沼町勝沼氏館跡遺跡、中道町金沢天神遺跡の4カ所の遺跡が調査され、いずれの遺跡でも海綿体骨針は確認されていない。なお、1983～85年に調査された大月市原平遺跡では該期の住居跡が56カ所で確認されている。現在も未整理であるため住居跡の重複により正確な住居数が把握できない状況であるが、おそらく60軒にも及ぶ（あるいはそれ以上の）大規模な集落がそっくり調査された、この時期の集落としては希有な例である。主体となるのは下吉井式であるが、ここでは海綿体骨針が確認された。ごく一部を実見したに過ぎないが、それでも数片の破片がすぐに確認でき、36や37のような顕著な入り方をしているものも含まれている⁴⁾。そのうち有文のものは半截竹管による波状沈線施文と、同様な施文を結節状に行うものとがあり、いずれも下吉井式である。おそらく、原平遺跡全体ではかなり普遍的にこの海綿体骨針が確認できるものと想像され、本遺跡と併せて、山梨県東部域が多摩地域と密接な関係にあったことが窺われる。したがって、これまでの分布域も確実に広がることとなる。以上、今回出土した下吉井式の概要を示したが、各住居跡の下吉井式は類似しており、時間差を求めるだけの

第36图 下吉井式・木鳥式土器对比图



資料は得られていない。下吉井式の施文は前述したように豊富であるが、それが変遷を示すものかバリエーションであるのか不明である。前述の結節状の押し引きは、県内資料をまとめた小野正文が下吉井第2段階としたもので⁵⁾、それと木島式との併行関係では木島Ⅲ式に限定されるのか、あるいはその前後をも含むものであるのか曖昧なところである。少なくとも本遺跡の今回の資料では、同じ下吉井式の住居跡でありながら切り合いの認められる6号と7号住居跡で木島Ⅲ式とその後の時期（IV式以降）が確認されるが、両者の下吉井式に明瞭な差は認められない。あえて言うなら、2軒の住居跡とも口縁部資料が少ないため不明瞭な点もあるが、波状沈線が6号住居跡には確認されるが、7号住居跡にはないことが違いとして挙げられよう。結局、神之木台式がなく、また花積下層式もない状況であり、その中間的位置付けという以上の細分はできない。

一方、木島式は4～6号住居跡及びグリッドからの出土資料と、7・8・10号住居跡の出土資料とで明確に一線を画することができる。前者の条痕は施文が明らかに貝殻であり、背面を利用した条痕文が主文様となる。また、口唇部には腹縁による刺突が行われる。さらに厚さ2mm前後、幅4～8mm程の隆帯を直線あるいは波状、弧状に張り付けている。貝殻条痕文はこの隆帯上も含めて施文される。これに対し、後者の条痕は櫛歯状工具によるもので、条線そのものが前者に比べてはるかに細く、また鋭い。96や129は胴部の条痕だけでなく貼付やつまみによる隆起などが施される。96は唯一の口縁部資料で、細い粘土紐を口縁部下に貼付し、つまみ上げるように断面三角形の隆帯としている。ただ、この資料の条線は細いものであるが、断面四角形であり、櫛歯状工具とは考えにくい。まだ前段階の名残として貝殻が使用されるのかもしれない。129は平坦な器面に工具を押し付け抉るようにして粘土を寄せ、あたかも塊を貼付したかのような状態を作り出している。

このように木島式は大きく2種類に分類でき、木島式の編年を積極的に進めてきた渋谷昌彦の編年に従えば前者が木島Ⅲ式、後者が同IV式ないしV式に位置付けられよう⁶⁾。

さて、今回の出土資料について以上のように概観したが、これまで県内で確認された資料と比較し、整理しておきたい。

現在までに、山梨県内で早期末～前期初頭の住居跡は、前述した釧迦堂遺跡群、原平遺跡、勝沼氏館跡に加え、富士吉田市古屋敷遺跡、南都留郡西桂町寺野遺跡、東八代郡中道町上野原遺跡、同町立石遺跡、北巨摩郡大泉村金生遺跡、同甲ツ原遺跡、同白州町新居道上遺跡、同板橋遺跡、同明野村神取遺跡、同須玉町津金御所前遺跡等で確認されている。これらと本遺跡とを比較する場合、前述のように本遺跡の下吉井式土器は、その変遷を追えるような資料には恵まれず、むしろ木島式が2分類される状況から、木島式を伴うものを比較の対象とした方が好都合である。本遺跡以外で住居内資料として木島式を出土しているのは釧迦堂遺跡群⁷⁾、原平遺跡、金生遺跡⁸⁾、甲ツ原遺跡⁹⁾、立石遺跡¹⁰⁾、上野原遺跡¹¹⁾の7遺跡である。

各遺跡の遺構毎に出土した木島式と伴出土器を対比させたものが第37図である。これまで県内で確認された木島式で古く位置付けられるのは釧迦堂遺跡S-I区53号及び52号住居跡で、神之木台式が出土している。53号は条線だけでははっきりしないが、52号では低い隆帯の張り付けがあり、貝殻による条痕が隆帯上を含め施文されている。木島Ⅲ式である。これが確実に伴出したものであれば、これまで言われているより木島Ⅲ式がさらに遡ることになる¹²⁾。

これに続くものが本遺跡4号・5号・6号住居跡の資料で木島Ⅲ式と下吉井式の併行資料である。この段階の下吉井式には縄文施文の土器はほとんど伴わない。

次段階は本遺跡の7号・8号・10号住居跡と上野原遺跡1号竪穴、さらに金生遺跡2号住居跡が挙げられよう。木島式は櫛歯状工具による細い条線に変化するが、金生遺跡ではまだ隆帯の張り付けが見られ、上野原遺跡では斜行や波状の施文となることから、IV式もしくはV式に位置付けられる。一方、伴出資料は本遺跡では縄文施文の土器を全く伴わず、下吉井式併行と考えられる。金生遺跡ではタガ状隆帯を有する無文土器と縄文施文の土器が伴っており、下吉井式～花積下層式併行期と捉えられよう。

さらにこれに続くものが、甲ツ原34号住居跡、立石遺跡の住居跡群ということになる。甲ツ原遺跡は頸部に一条の隆帯を張り付け、隆帯上に竹管状工具による連続押し引きを施し、口縁部から垂下する同様の隆帯と連結さ

第37图 墓内各墓随出土木器及·伴出土器对比图

土器	时期	遗物名	时期	遗物S-1区
木盒	?	52件	53件	52件
木鼎	?	6件	4件	5件
木勺	下古#	56	55	54
木叉	中漢	6件	5件	12 13 14 15 20 32 34
木匙	上古#	10件	7件	96 113 129 130 10 127 94 102 104
木鼎	木鼎	2件	2件	金生 王·V
木鼎	中漢	10件	8件	7件 8件 9件 10件
木鼎	上古#	11厘米	1厘米	上/平 升花枝耳 带花枝耳
木鼎	金生	2件	2件	2件 2件
木鼎	甲山原	34件	17件 27件 29件	立石 花瓣下唇饼行
木鼎	木鼎	29件	27件 29件	木鼎
木鼎	立石	17件	27件 29件	立石
木鼎	花瓣下唇饼行	29件	27件 29件	花瓣下唇饼行
木鼎	木鼎	2件	2件	木鼎

せるもので、器面は櫛歯による条痕が見られる。木島Ⅷ式である。立石遺跡は資料が多いため17号・27号・29号住居跡に限定したが、木島式は同じである。両遺跡とも伴出土器は縄文施文の花積下層式併行の土器が主体で、これには無節と単節がある。これら縄文施文の土器以外に、甲ツ原遺跡では中越式、立石遺跡ではやはりタガ状隆帯を張り付けた無文土器が伴う。

以上、本県でこれまで確認された木島式土器を出土した住居跡毎の対比を行ったが、全国的に見ても下吉井式期の集落としては希有な例である原平遺跡が未整理である現状ではこれ以上の変遷は追えない。逆に言えば、原平遺跡では多くの住居跡の切り合いがあるため、型式学的な面からの追求とは別に前後関係が明らかにされていくことになる。

註

- 1) 宇津川徹・上条朝宏 1980 「土器胎土中の動物珪酸体について(1)」『考古学ジャーナル』
181 P 22~25 ニューサイエンス社
- 2) 宇津川徹・上条朝宏 1980 「土器胎土中の動物珪酸体について(2)」『考古学ジャーナル』
184 P 14~17 ニューサイエンス社
- 3) 小葉一夫・石川隆司 1990 「縄文土器の動態的把握(予察)」『研究論集VIII』
P 117~143 東京都埋蔵文化財センター
- 4) 未報告である。資料実見に際しては、大月市教育委員会杉本正文氏の協力を得た。
- 5) 小野正文 1983 「縄文時代早期・前期初頭の土器について」『研究紀要』 P 41~50
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 6) 渋谷昌彦 1994 「土器型式より見た縄文早期と前期の境について」『第7回縄文セミナー
早期終末・前期初頭の諸様相』 P 1~45 縄文セミナーの会
- 7) 小野正文 他 1986 『釈迦堂I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 山梨県教育委員会
- 8) 新津 健 他 1989 『金生遺跡II(縄文時代編)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集
山梨県教育委員会
- 9) 山本茂樹・今福利恵 1992 『甲ツ原遺跡概報I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第71集
山梨県教育委員会
- 10) 小林広和 他 1996 『立石・宮の上遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第110集
山梨県教育委員会
- 11) 中山誠二 他 1987 『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第19集 山梨県教育委員会
- 12) 渋谷・小野ともに神之木台式を早期に、下吉井式を前期に位置付けており、木島Ⅲ式は下吉井併行としている。文献は註6・5と同じ。

参考文献

- 渋谷昌彦 他 1981 『木島』 富士川町教育委員会
池谷信之 他 1985 『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
谷口康浩 1989 「条痕文系様式」『縄文土器大観1』 P 278~281 小学館
宮下健司 1989 「東海条痕文系土器様式」『縄文土器大観1』 P 282~285 小学館

第4節 中溝遺跡出土の玦状耳飾りについて

人間は衣服や宝石で身を飾り、他者の注目を自分に向けようとする。古今東西、変わらない風俗である。

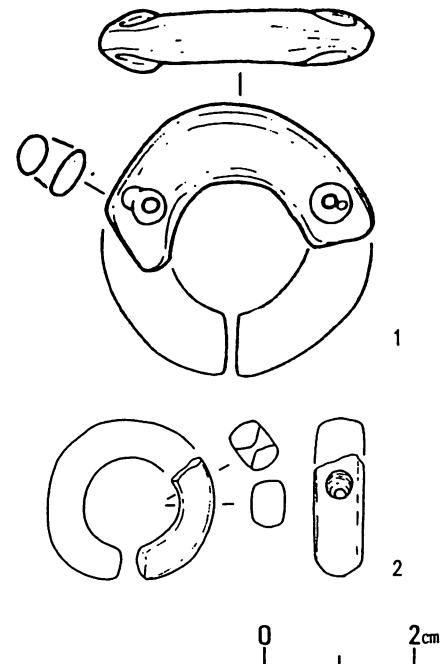
「玦状耳飾り」は、その名のとおり現在のイヤリングやピアスと同じ使い方をするアクセサリーで、時期的には、縄文時代早期から中期まで作られ、その中でも特に前期に発展するものである。この遺物が、耳飾りとされる所以は、大阪府藤井寺市国府遺跡や神奈川県上浜田遺跡など、人骨の伴う土壙の耳と胸の付近から一对の玦状耳飾りが発見されたことから解釈されている¹⁾。これらは、完形で出土することは珍しく、ほとんどが欠損品で補修孔があけられている。割れても廃棄せず、穴をあけて紐などで繋ぎ直して使うという習慣があったことが窺われ、当時の人々にとって貴重品だったことがわかる。装身具が作られる頃は、新潟県西部から富山県東部にかけての日本海側地域に遺跡が集中し、その後、白馬岳山麓を中心とする長野県北部に移行することが指摘されている。玦状耳飾りは主に、比較的加工しやすい滑石を用いる。白馬岳周辺は良質の滑石原産地として知られており、その周辺には装飾具を加工・生産していたと推定される遺跡が多い。山梨県内出土の玦状耳飾りは、縄文時代前期に属するものが最も多く、中期後半まで土製玦状耳飾りが継続される。その中で、最も古く位置づけられているものは塚越堂遺跡群塚越北B遺跡SB-02、縄文時代早期末の住居跡から出土したものである。今回調査された中溝遺跡出土と同時期であると思われる。玦状耳飾りは、「中央の円孔が大きく正円形に近い形」が早期末に出現する²⁾。県内出土の2点をみるとこれに当てはめることができる。また、石材については、大半のものが柔らかく加工し易い滑石を使っており、当遺跡出土品も例外ではない。しかし、塚越北B遺跡出土のものはメノウ製という。飾玉製作遺跡の中心地域から離れた山梨県で出現期のものが発見されたことは、物資の流通がここまで広がっていたことを示し、貴重な宝飾を得ることが出来る人物がいたと想定できる。中溝遺跡では、縄文時代早期末から前期初頭の住居跡が7軒も検出できたが、その中で、玦状耳飾りが出土したのは2軒のみであった。玦状耳飾りが貴重品とすれば、その住居跡に住んでいた人物はこの集落を統括する立場にあったのだろう。

註

- (1)藤田富士夫『考古学ライブラリー52 玉』1989 ニューサイエンス社
- (2)小林達夫編「縄文人の装い」『古代史復元3 縄文人の道具』1988 講談社
- (3)小野正文「塚越北B地区」「塚越堂I」1986 山梨県教育委員会

参考文献

- 小野正文「山梨県に於ける土製耳飾の予見的考察」『山梨考古学論集II－山梨県考古学協会10周年記念論文集－』1989
山梨県考古学協会
- 藤田富士夫「縄文～古墳時代の玉製装身具－生産と流通－」
『季刊考古学』第5号 1983 雄山閣出版
- 堀江武史「玦状耳飾の分類と製作工具に関する考察」『国学院大学考古学資料館紀要』第8輯 1992 国学院大学考古学資料館
『北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書』1983 浦和市遺跡調査会
- 「カゴ田遺跡」『長野県史考古資料編 主要遺跡（南信）』1983
長野県史刊行会編
- 『上浜田遺跡』1979 神奈川県教育委員会



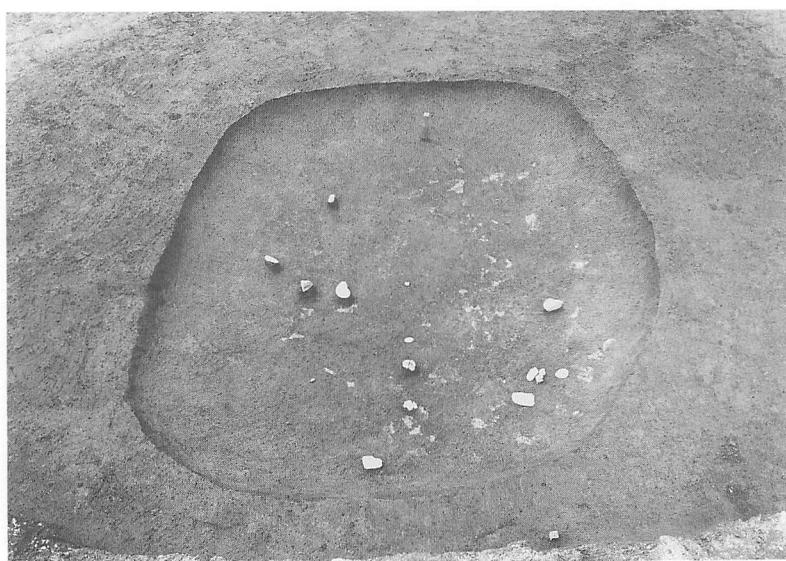
1. 塚越北B遺跡 SB・02出土
2. 中溝遺跡 5号住居跡出土
第38図 県内出土早期末～前期初頭玦状耳飾

図 版

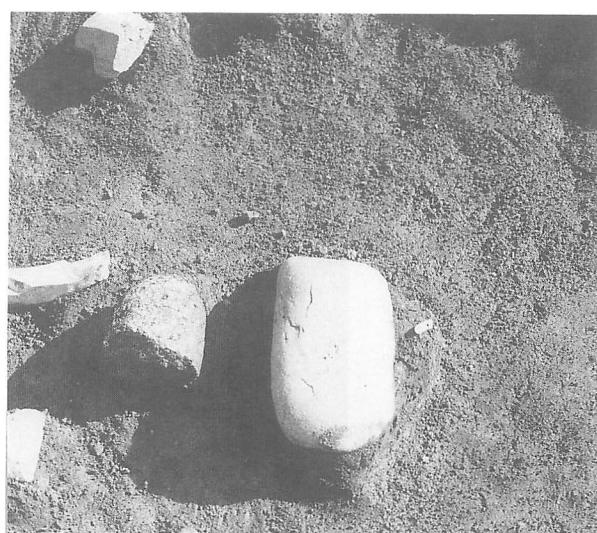
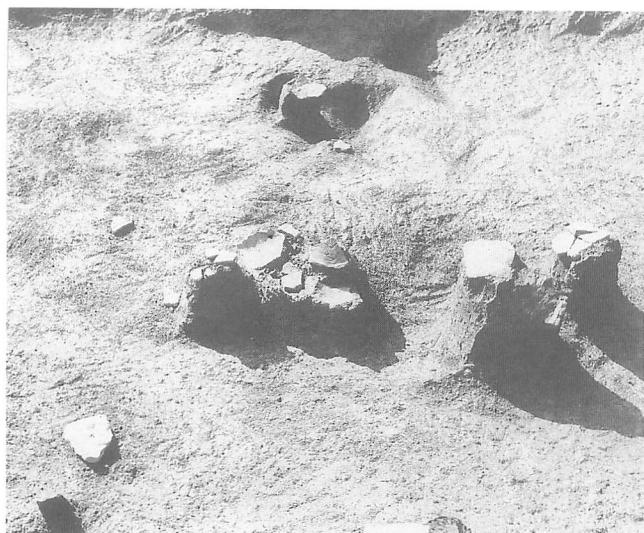
図版1 上 調査前遺跡近景 中・下 1号住居跡



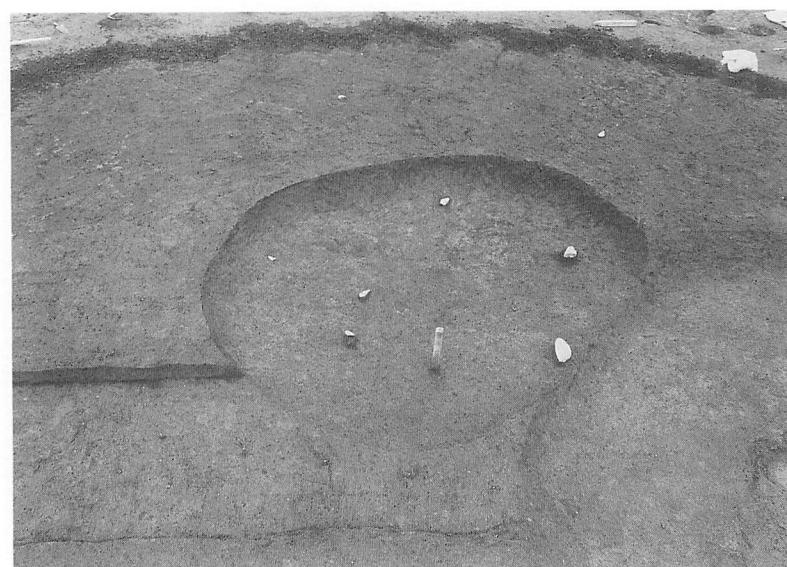
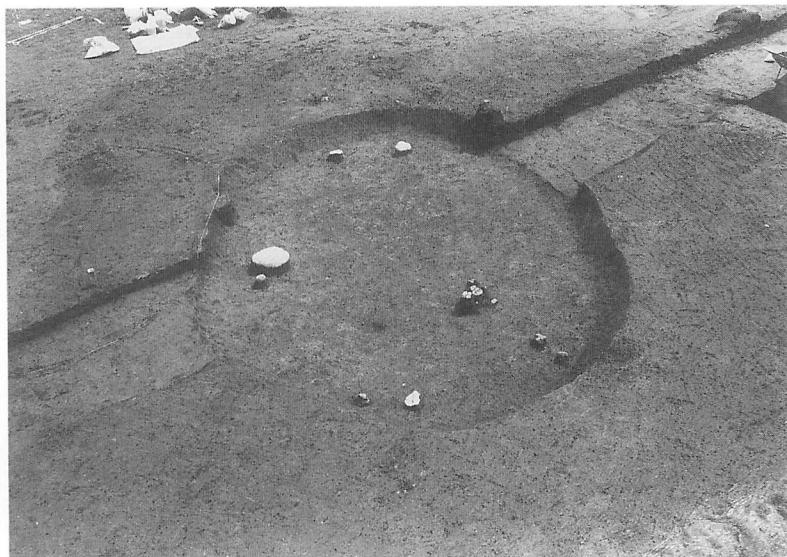
図版2 上 4号住居跡 中・下 5号住居跡



図版3 5号住居跡



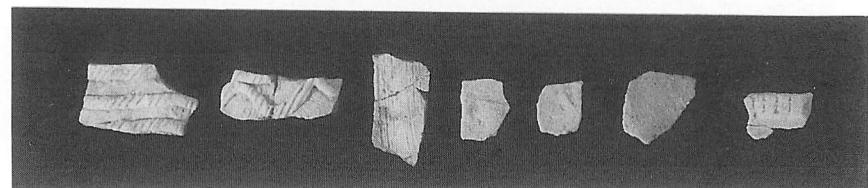
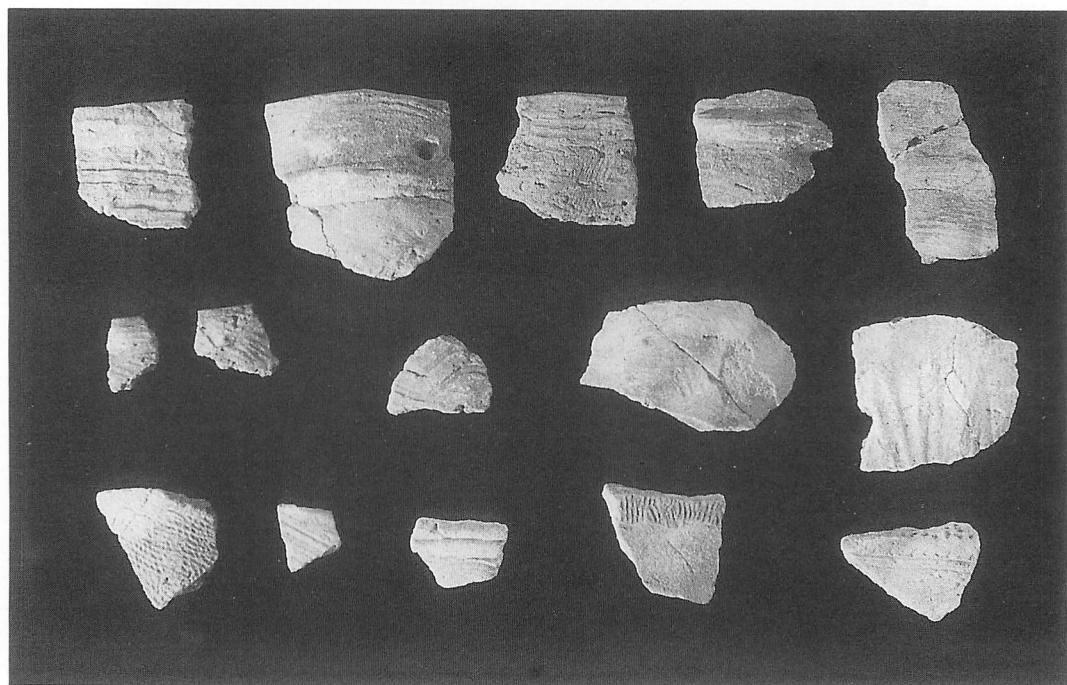
図版4 上 6号住居跡 中 7号住居跡 下 8号住居跡



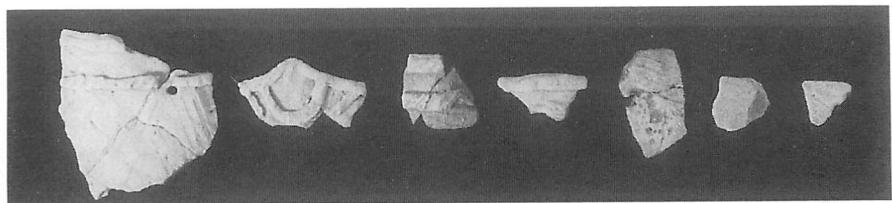
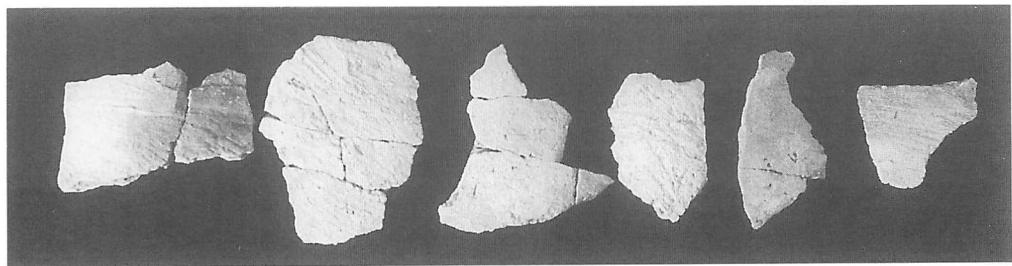
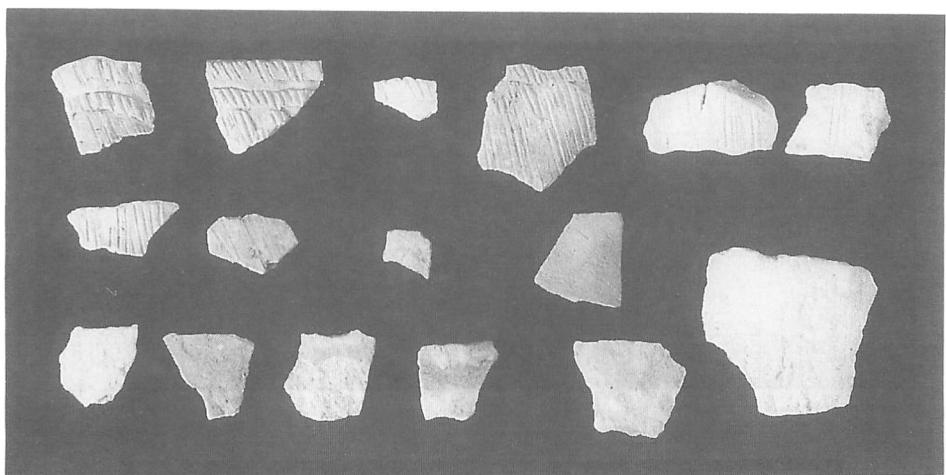
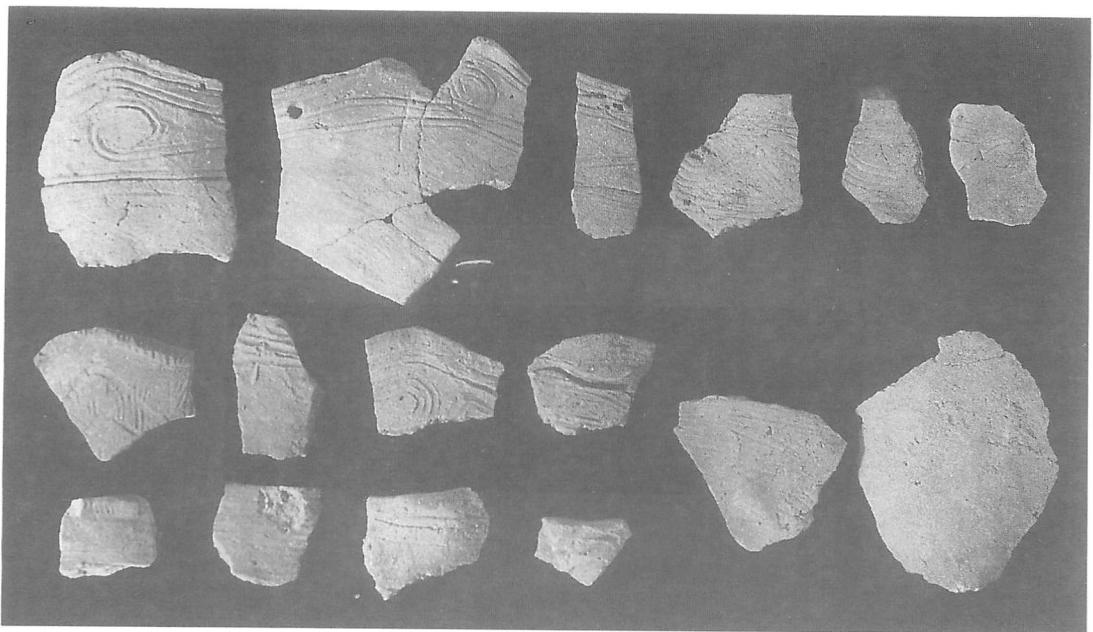
図版5 上 9号住居跡 中・下 住居跡全景



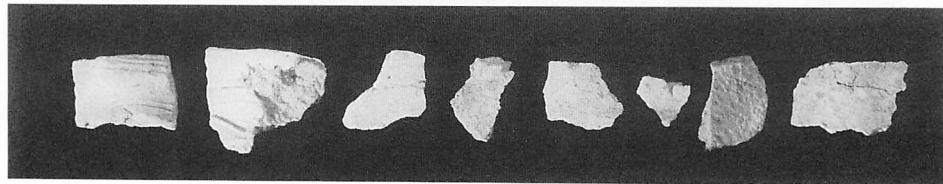
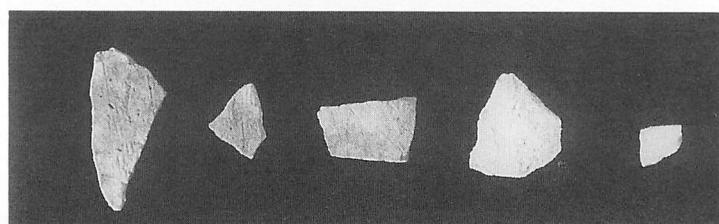
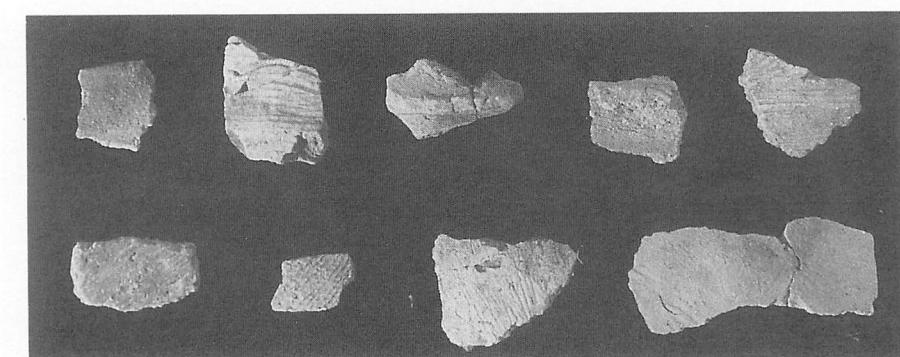
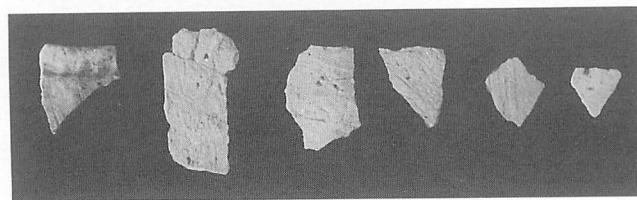
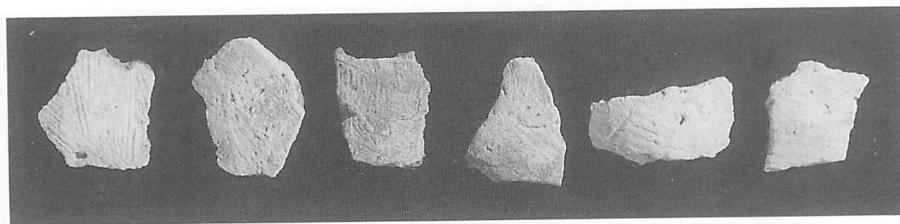
図版 6 土器 (4号住居跡)



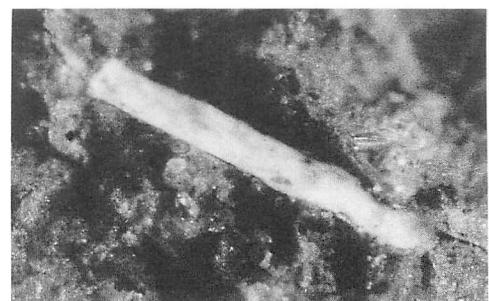
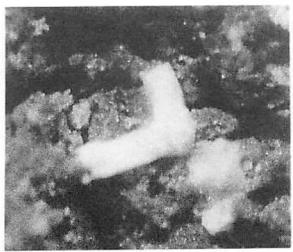
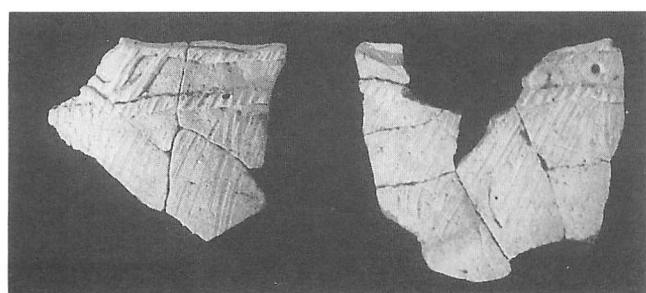
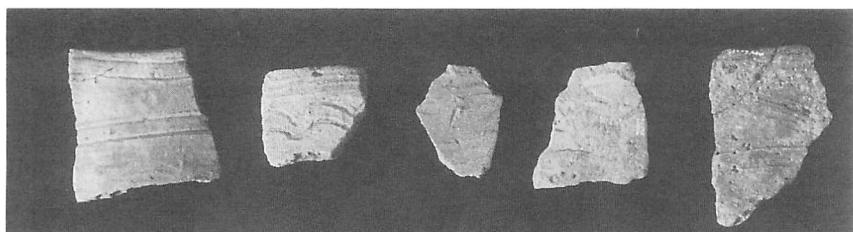
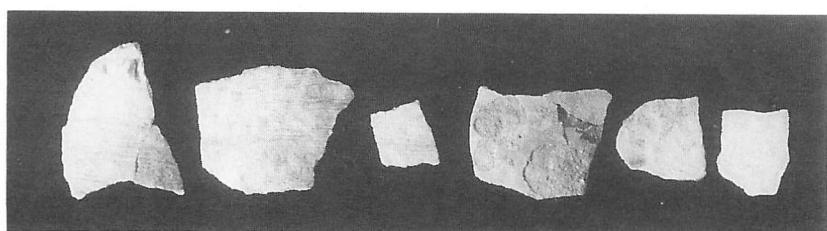
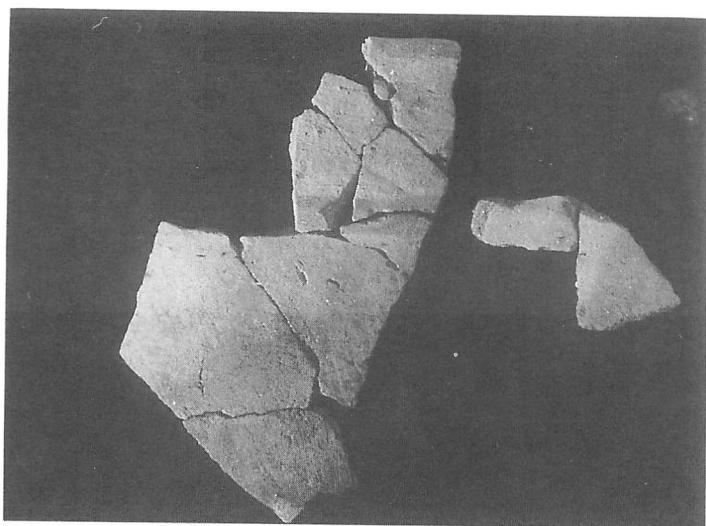
図版7 土器（上 5号住居跡 下 6号住居跡）



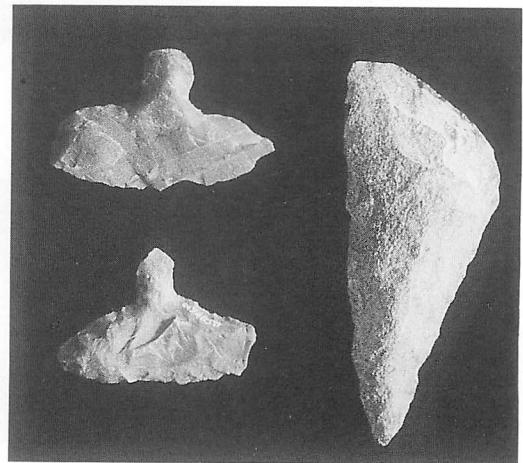
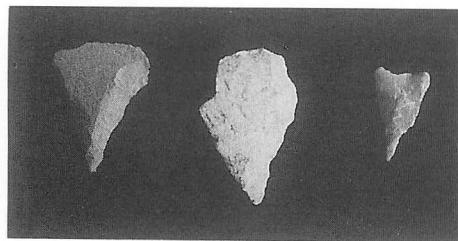
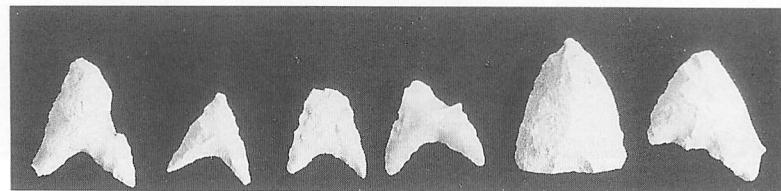
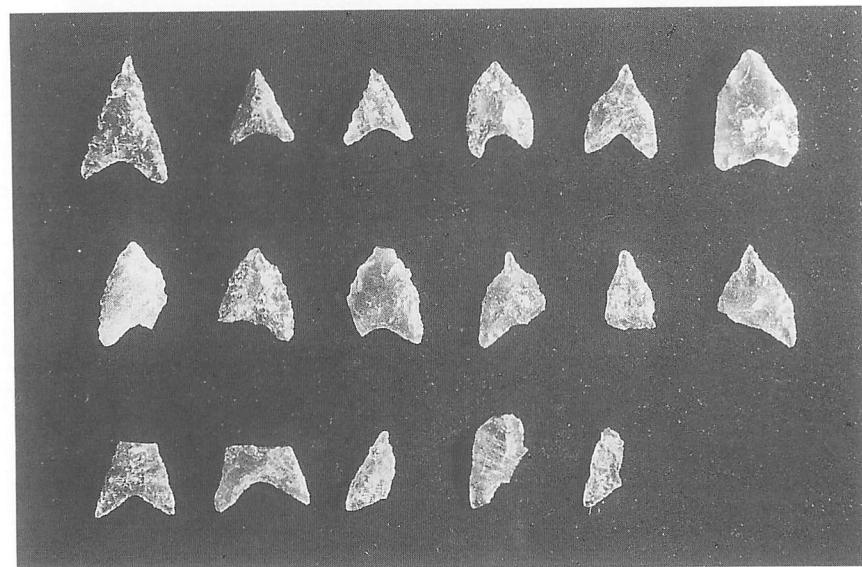
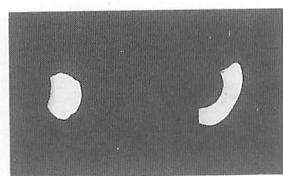
図版 8 土器(上) 7号住居跡 中 8号住居跡 下 9号住居跡()



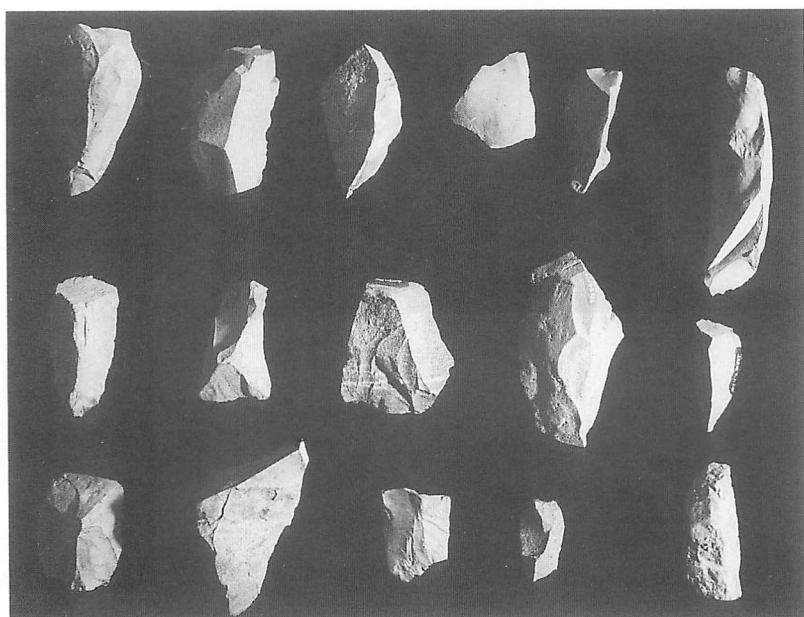
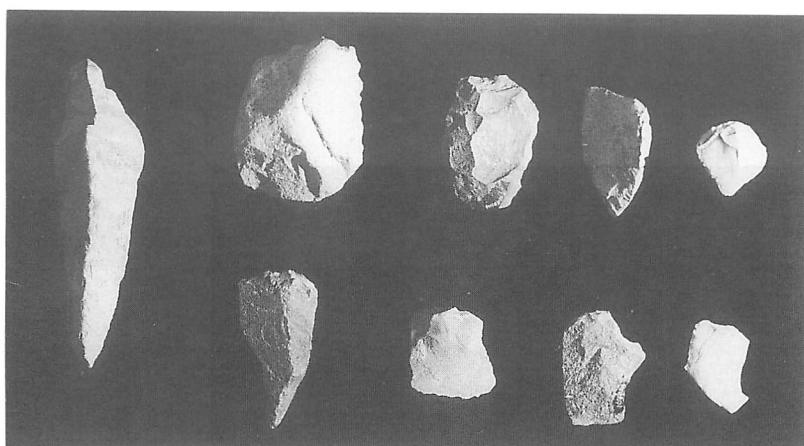
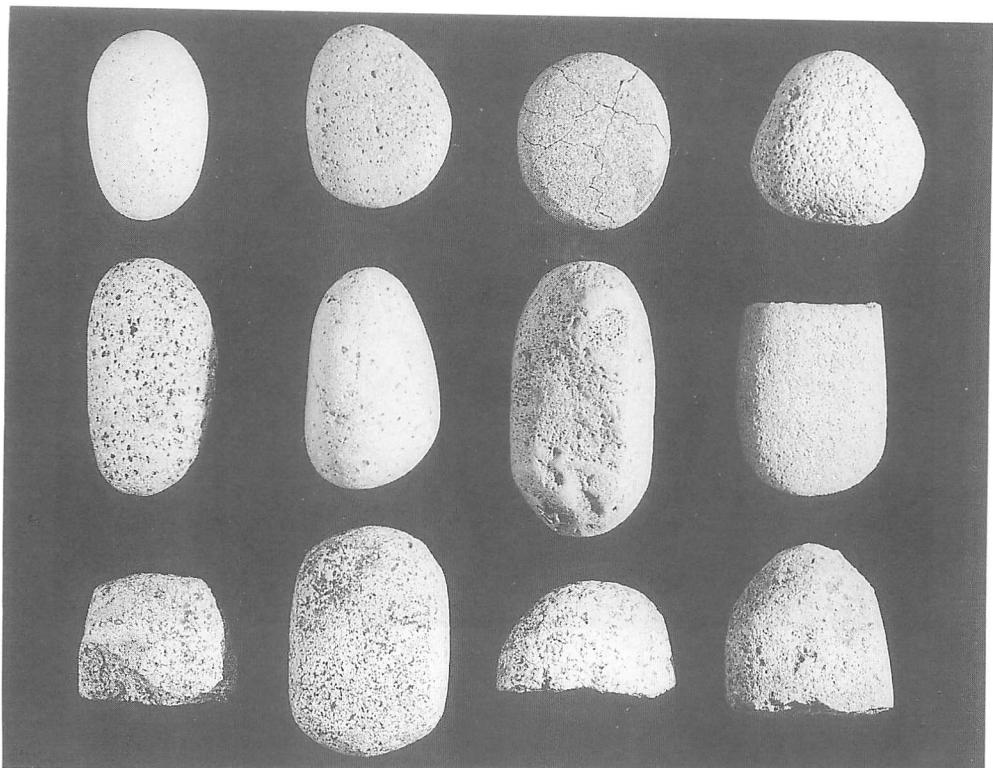
図版9 土器（上）
10号住居跡 中 グリッド 下 海綿休骨針（金剛石）

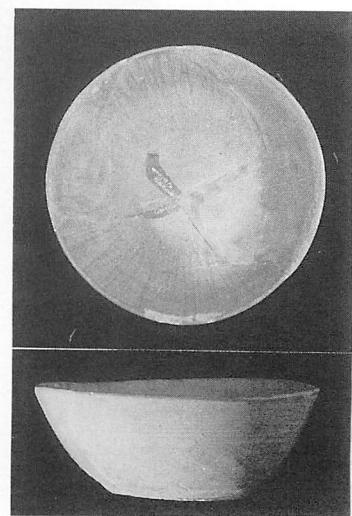
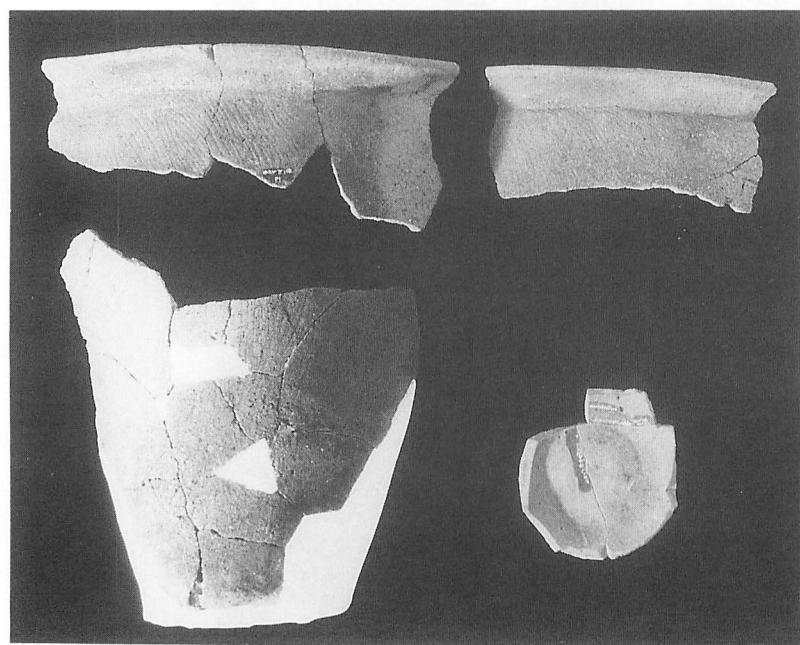
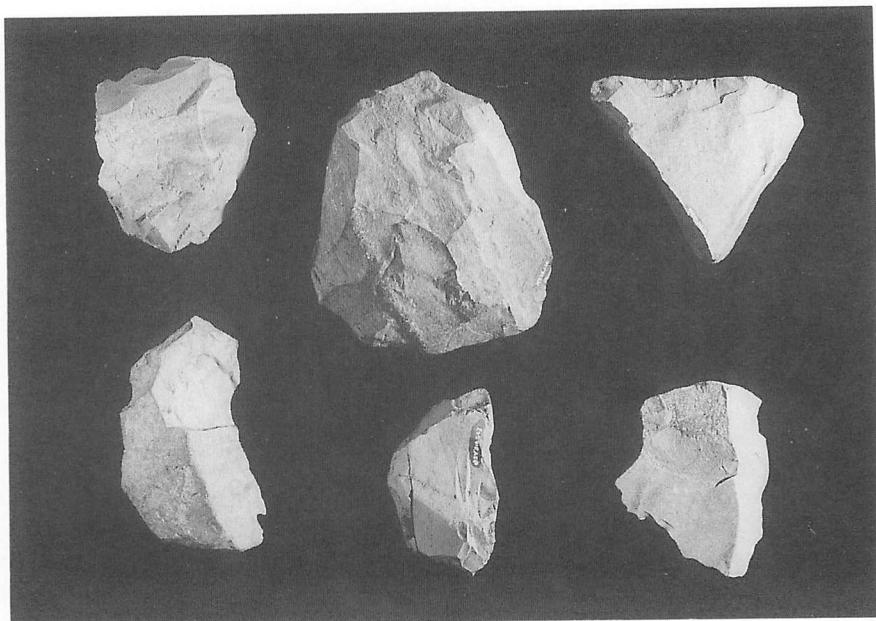


図版10 石製品 石器（石鏃・ドリル・石匙）

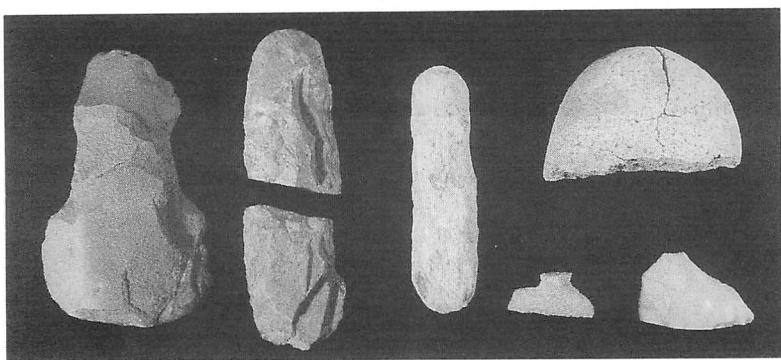
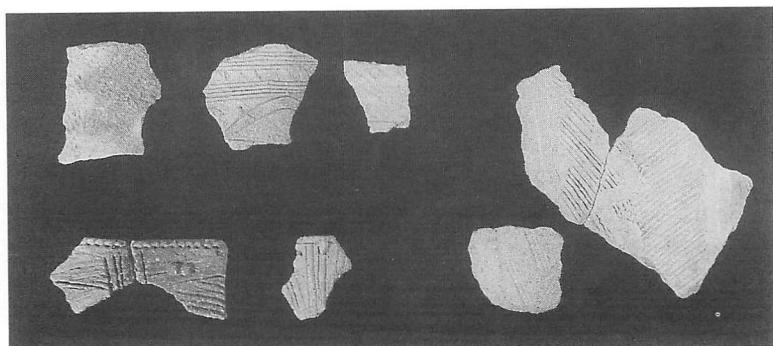


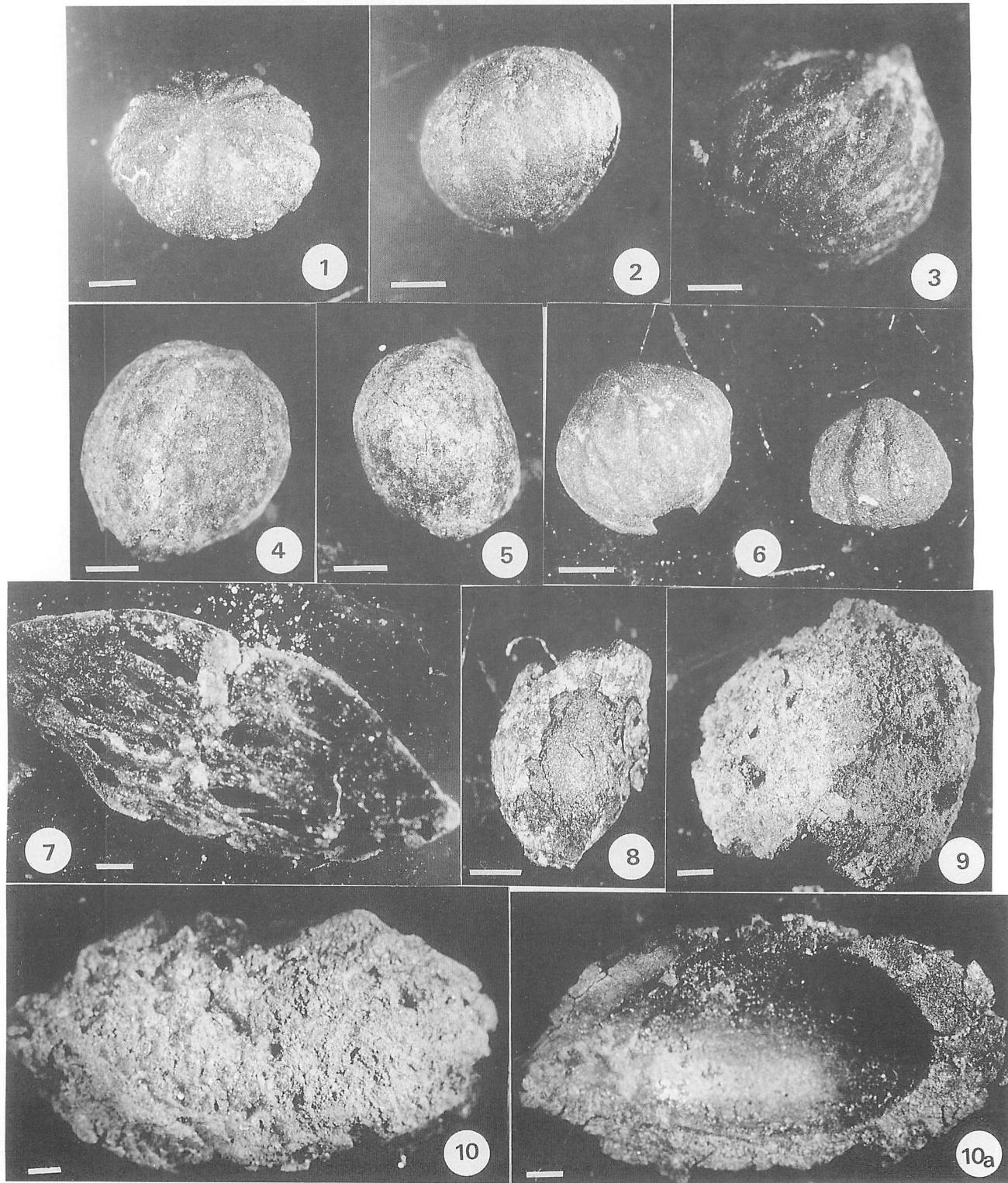
図版 11 石器（磨石・加工痕ある剥片・剥片）

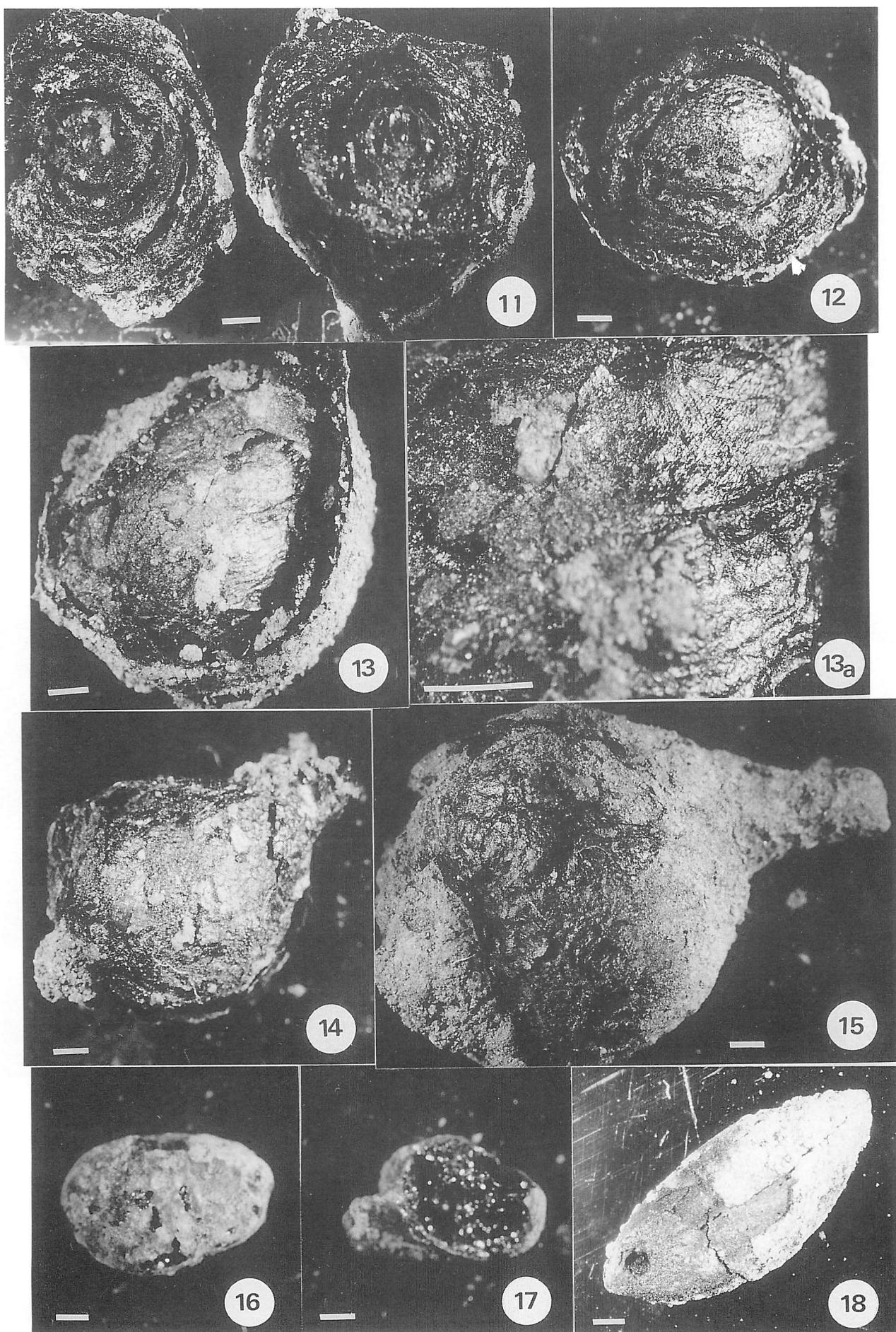


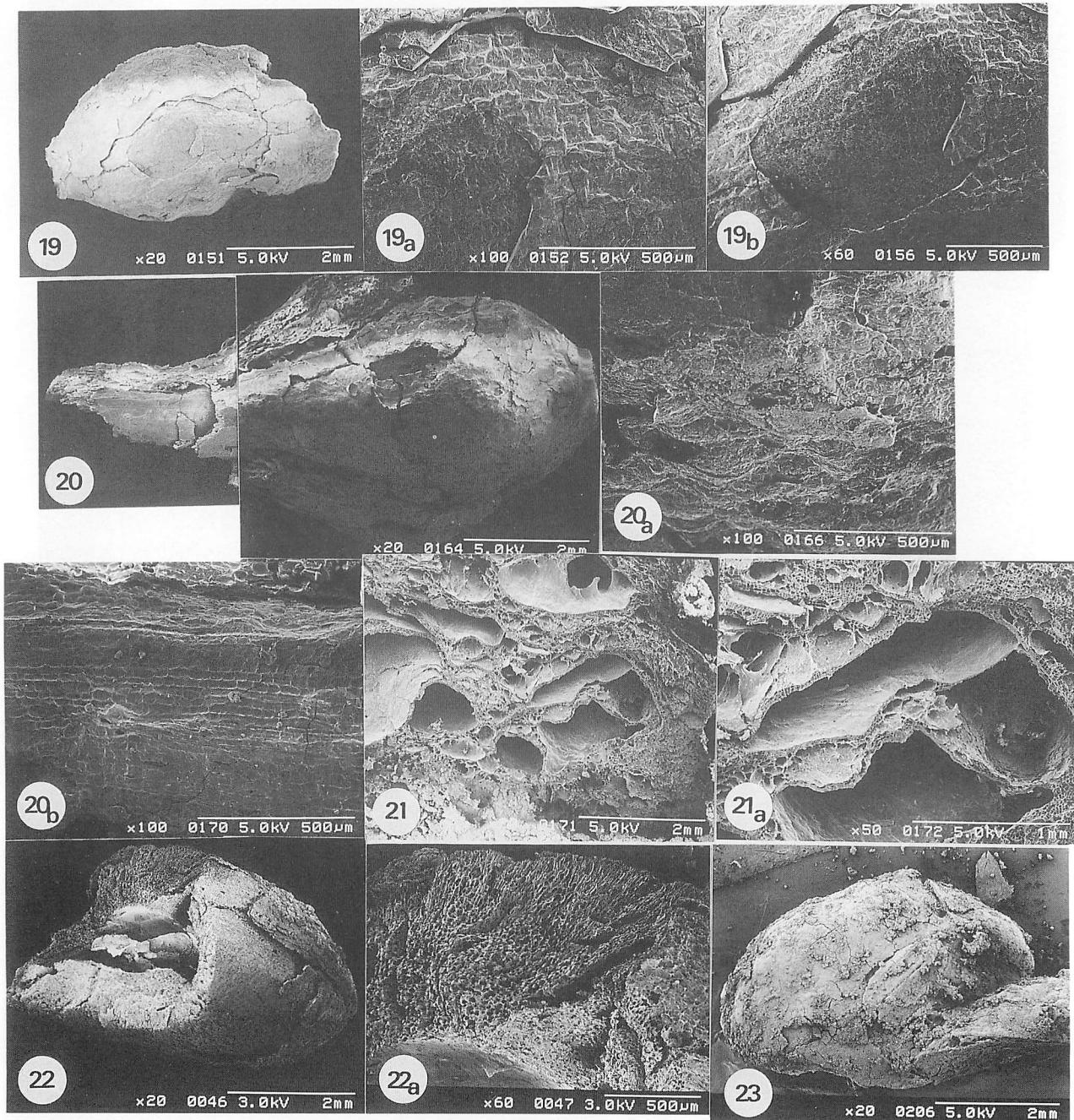


図版13 上 揚久保遺跡近景 下 同出土遺物









報告書概要

フリガナ	ナカミゾイセキ・アゲクボイセキ	
書名	中溝遺跡・揚久保遺跡	
副題	山梨リニア実験線建設に伴う事前調査	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第115集	
著者名	長沢宏昌・笠原みゆき	
発行者	山梨県教育委員会	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎0552-66-3881	
印刷所	(株) 峠南堂印刷所	
発行日	1996年3月31日	
遺跡所在地	山梨県都留市小形山大原	
25,000分の1地図名・位置・標高	都留 東経138° 56' 10" 北緯35° 34' 40" 410m	
概要	主な時代	縄文時代早期～平安時代
	主な遺構	中溝遺跡：早期末～前期初頭住居跡7軒 平安時代住居跡3軒 土坑・集石 揚久保遺跡：平安時代土坑
	主な遺物	早期末～前期初頭の土器（下吉井式土器・木島Ⅲ式土器）同時期石器 炭化物
	特殊遺構・遺物	滑石製块状耳飾り
	調査期間	中溝遺跡：1993年4月26日～8月30日 揚久保遺跡：1993年11月1日～11月30日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第115集

中溝遺跡・揚久保遺跡

印刷日	平成8年3月25日
発行日	平成8年3月31日
編 集	山梨県埋蔵文化センター
発 行	山梨県教育委員会
印刷所	(株) 峡南堂印刷所

